
とある転生者の過負荷（マイナス）

クズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある転生者の過負荷マイナス

【Nコード】

N1468Y

【作者名】

クス

【あらすじ】

一瞬にして死人になった僕。気が付けばそこは死後の世界。そこで僕は、下っ端の死後の世界の管理人みたいなのに会った。ポイントが皆無な僕は天国にも地獄にも行けず、人生をやり直す必要がある。所謂転生だ。下っ端に気に入られた僕は大量チート能力が貰うことが出来るらしい。

・・・くだらねえ

大量チートなんか要らない

そんなの、過負荷一つで十分だよ

悪いことも良いことも、僕がゼーんぶ『無かったこと』にするから

プロローグ（前書き）

悔いはありません

初投稿にして始めてしまいました

駄目文ですが、どうぞ

プロローグ

人生とは唐突にことが起きるんですね。

突然ですが、僕は死にました。え、いきなりすぎる？ それなら僕を木っ端微塵に爆死させた工事用ダイナマイトに文句を言ってください。

アレは普通の日でした。僕はいつも通り日課の朝の散歩に出掛けました。

外も良い天気で、小鳥などが鳴いており、とても平和な日でした。

僕も

機嫌が上々、まさに最高の朝でした。

僕の家付近には新しくビルが建設されることになって、どのような建物になるのかワクワクしていました。

それなのに・・・

アレは一瞬の出来事でした。

いつも通りビルの前を通ります。それは別になにもおかしくありません。

いつも通りちょっとだけビルを眺めます。それも別になにもおかしくありません。

いつも通りその高い頂上まで視線を泳がせました。それも別に何もおかしくありません。

すると、いつも通りじゃない物が上空に見えました。普通より一回り大きい小石のよう
ようで、徐々に迫ってくるのが見えました。危ないなあ、と思い、普通に右へ避けました。

次の瞬間、僕の意識は無くなりました。

最後に感じたのは、とてつもない浮遊感です。

で、気が付けば真っ白な世界に居るわけですよ。上も真っ白、地面も真っ白、壁の存在さえ疑わしいくらい真っ白でした。汚れも一つとついておらず、まさに純白の景色でした。普通の人なら見惚れているところですが、生憎と僕はその様な感情はないのですよ。

ちなみにここが話の没頭部分です。

今は状況を整理しようと、さっきまでの記憶を考え直していただけです。

ホント、どこなんでしょうね。

「ギャハハハハハハ！……！！！」

すると、突然下品で狂気に満ちた笑い声が聞こえました。

こんな笑い方、今だにする人が居るんですか？

その笑い声は徐々に大きくなっていき、やがては一人の人物がこちらに近づいてきました。

「ギャハハハハハ！！！！ お前、最高だよ！」

その人物は、ジーンズにTシャツという今時の若い人が着てそうな服装で、

髪は真っ赤で血の色のようにでした。靴は履いておらず、裸足のままです。

「いきなり登場して第一声が”ギャハハハハ”はどうかと思いますよ？」

的確な突っ込み。なのに赤髪あかがみ(仮)さんは大笑いしたままです。

「ハハハハ！！ いやだつて、あんな死に様だと誰でも笑うだろ！」

「ギャハハハハ！」

死に様？ ああ、あれのことですか。

「ギャハハハ！ ああ、悪い。つい面白くてな・・・ククク。」

はあ、これ毎回説明すんのも面倒だけど、お前は死人だ」

そんなの明白ですよ。貴方は二次小説などを読んだことがあるんですか？

大抵の場合は死んで真っ白な世界に行く 神様に会うというパターンです。

「そんなの分かってますよ」

「へえ、状況把握が早いな。さては相当な妄想癖があるな？」

「馬鹿なことやってないで、早く僕を天国でも地獄にでも送ってくださいよ」

僕はもう楽になりたいんですよ。さつさと天国でも地獄でも何でもいいから送って欲しいです。

「まあ待って待て。こっちにも”ステップ”ってのがあるんだよ。まずは・・・ククク、死因からだな」

さつきからなんで死因で大爆笑してるんですか？ なんとというか、死に様で笑われると気分が悪くなります。

「お前の死因は・・・ギャハハハハ！！ 工事用爆発物投下による爆死だつてよ！

ギャハハハハハ！！ それって避ける意味がねえじゃねえか！！」

いい加減にしないと怒りますよ？ 僕だつて気は長くありません。

「お前の人生経験を調べさせてもらったけどさ、お前、親父が工事現場で爆発物を取り扱う仕事してんだろ？ それなのに爆弾で死ぬつて・・・気の毒すぎるだろギャハハハハ！！！！」

そこまで笑われるつて・・・

「まあ、話は終わりだ。とつとと天国にでも行きな」

あれ？ それで終わり？ こういう展開って”神のミスでした、転生させます”って展開なんじゃないんですか？

「こういう場合って”神のミスでした。お詫びとして転生させます”って展開なんじゃないんですか？」

「はあ？ なに言ってるのてめえ？ 神がミスするわけねえってことぐらい

下っ端のオレでも分かるわ！ なんでもかんでも神のせいにするんじゃないねえ、

この無神論者が！」

この人は下っ端なんですか・・・想像していたのとかかなり違いますね。

ま、仕方ないですね。さっさと天国で安らかに暮らしましょう。

「ん、ちょっと待て」

すると、赤髪さんはポケットからなにやらノートのような物を取り出しました。

かなり使い込まれてますけど、なにが書いてあるんでしょうか・・・

「プ、ギャハハハハ！！！！」

ノートを見ると再び大笑いを始めました。さつきから笑ってばかりですね。

「お前最高だよ！ うん、実に面白い！」

なにが気に入られたんでしょうか．．．僕はまだ貴方とは初対面ですよ？

「いいか、あの世つーか死んだ後の世界にはポイントってのがあるんだ」

ポイント？

「ポイント．．．ですか」

「ああ。生まれた時から死ぬ時まで人間は皆ポイントを持って生活してるんだ。

悪いことをすればポイントは無くなるし、逆に良いことをすればポイントは増える。

そして、死んだ後に行く場所がそのポイントによって決まるんだ」

なんとというか、ゲームみたいですね。僕はどれぐらいあるんでしょうか。

「それがお前と来たら．．．ギャハハハハハ！」

いい加減笑い声が鬱陶しくなってきました。何回も聞いていると耳障りです。

「僕のポイントになにかおかしい点でも？」

「いや、まったく無いんだよ。でも、逆にそれが面白いんだよ！
ギャハハハ！」

普通のなにがいけないんでしょうか？ 自惚れているわけでは
ないですけど

僕は人生でなににも悪いことはしてませんよ？

「普通のなにがいけないんですか？」

「いや、だって、お前のポイントは生まれた時から一切変わって
ないんだよ！」

つまり、生まれてから一度も良いことも悪いこともしてねえんだよ
！ それって

ある意味不可能じゃね？ ギャハハハハハ！」

言われてみれば、僕の人生ではあまり良いことも悪いことも起きて
ませんね。

普通に生まれて、普通に生活して、普通に生きていましたからね。

親戚や親が亡くなられたりした時でも泣いた覚えはないですし、
ただ寿命が僕より早く訪れたとしか思いませんでした。それはある
意味

大罪だと思えますけど。

「そしたら僕はどうなるんですか？」

「それが分からねえんだよ・・・これって今まで始めてのことだ
し、

オレも対応の仕方が分かんねえんだよ。ちょっと待ってる、今調べとくから」

すると、赤髪さんはポケットから小さいながらも分厚い本を取り出し、

ペラペラとページを捲り始めました。

「え〜と．．．あつたあつた、”死人の扱い書”」

僕はゲーム機ですか。

「．．．おいおい、マジかよ．．．」

赤髪さんはなにやら驚いた表情になりました。

どうかしたんでしょうか？

「えーと．．．いいか、さっきも言ったと思うがお前のポイントは生まれた時

からまつたく変わってない。つまり0のままなんだ。大抵の奴はポイントが0より

多かった時は天国で、0より低かったら地獄に行くんだ。でもお前はポイントが0

のまま。どちら向きでもないからどちら側にも送れない」

うんうん、つまり？

「つまり．．．お前は1から人生をやり直す必要がある」

．．．はい？

人生を一からやり直す？ なに刑事ドラマの主人公が犯人に言うセリフ
みたいなことを言ってるんですか？

「どういう意味ですか？」

「お前はそのままもう一度生を受けることになる。その年齢のまま、
その状態のまま再び生き返る。所謂転生だ」

へえ、もう一度僕は生きれるんですか。周りにまったく干渉は
なかったのが
この後に及んで役立ちましたね。

「ただ、この場合は幾つか条件がある」
条件？

「取り扱い説明書での条件は三つ。

生き返る世界はランダムに指定される。元々の世界かもしれないし、
過去の世界かもしれないし、まったくの別世界かもしれない。
れない。

生き返った後はなんとんでも寿命で死ななければならぬ。
もし事故や殺人で死んだ場合、お前はそのままずっと生死の狭間を
永久に
さまざることになる。

死んだ後のポイントで今後が決まる。

さつきも話したがお前のポイントは0のままだ。つまり、良く生きれば天国で過ごせるし、悪く生きれば地獄で過ごすことになる。

再び0のままだと？と同じく生死の狭間に突き落とされる。

以上だ。分かったか？」

うーん、中々と厳しい内容ですね。気をつけないと天国か地獄に簡単に傾くような点数ですしね。

「分かりました」

「そしてだ、これは久しぶりに爆笑させてくれたお前への礼だ。よくある大量チートってのをやるよ。何個でもいいから好きに選べ」

ああ、あのテンプレートの展開ね

うん、でも僕の考えはもう纏まっているよ

「そんなのいらないよ」

「は？」

「僕に大量チートなんてそんな面倒なものは要らない。いや、”必要ない”と言った方が正しいかな」

「必要ないだア？ てめえ、おれ本気で言ってるのか？」

お前も健康な高校生男子なら大量チートぐれエ欲しいだろ？」

ううん、全然

僕が欲しいのは”アノ”能力一つだけだよ

「僕が欲しいのはとある一つの能力だ」

「ほオ、それはなんだ、言ってみろ」

間を入れて、僕は笑顔で能力名を言う

「オールフイクション大嘘憑き。それがその過負荷マイナスの名前だ」

「おーるふいくしょん？」

なんだ、知らないのか？

週間少年ジャンプの愛読者なら多分有名なチート能力なのに

「オールフイクション大嘘憑きの能力は、すべて現実を虚構にする^{なかつたこと}。人類史上最低の過負荷マイナスです」

「現実を虚構にする？ おいおい、どんなチート能力だよそれ？
大量チートは要らねえって言った癖によオ。それに、さつきから言
つてる

過負荷マイナスってなんだよ？ 聞いたこともねえぞ」

「過負荷っていうのは、人間が稀に生まれながらに持っている才能のつらみの呼び名です。自分にとって利益プラスになるのが異常、自分にとって不利益マイナスになるのが過負荷マイナスと呼ばれています」

僕が過負荷について説明すると、赤髪さんは「なるほど」と手を叩いて頷く

「そして、過負荷を持った人間は生まれながらの敗者で、不幸にしかなれないような人類の屑です。僕にピッタリでしょう？」

過負荷は一見便利そうに見えて実はそうでもない

一度でも過負荷になれば一生幸せになれない、無才能で負けることしか出来ないような人間になってしまっただ

ま、僕にはそんなの関係ないけどね

「・・・ギャハハハハ！！ 最高だよ！ お前、本当に面白いえ！

まさか自分の貰う能力が自分を不利にする能力なんて、傑作だ！ うん、気に入ったぜお前！ 分かった、お前にその大嘘憑きとやらをやるよ」

赤髪さんは僕の胸の辺りに手を置いて、目を閉じなにかを唱え始めた

すると、体の中に突然なにかが送り込まれるような感触に陥る

その感触が終わると、僕は自分に騒然とした

自己憎悪、劣等感、世界のくだらなさ

自分は最低だ、無才能だ、負完全だ

これが大嘘憑マインナスきの力、なのか・・・

「終わりだ。ついでに一つだけ能力を追加させてもらったぜ。なあに、くだらねえチート能力じゃねえよ。その能力の元々の所持者が使っていた能力だ」

大嘘憑きの元々の所持者が使っていた能力？

それってもしかして・・・

「『ブックメーカー
却本作り』」

「お？ 知ってるのか？」

知ってるものにも、それこそ

大嘘憑き以上に最低の過負荷じゃないか

「『ありがとう赤髪さん』『これで僕は負完全かんぜんになれた』」

「喋り方が違わくないか？」

過負荷というか却本作りの所為だよ

あの過負荷の効果を受けている人は皆こんな喋り方と思うよ？

「そついえばお前、名前はどつするんだ？」

名前、か・・・

話に夢中になり過ぎて考えてなかったな

「『前世と同じじゃ駄目なんですか？』」

「悪いがそりゃ駄目だ。他を選びな」

でも、過負荷として生きるのなら、
それに相応しい名前が必要だ

しかも、『大嘘憑き』と『却本作り』を持っているんだ

となると名乗る名前は一つしかないだろう

「『球磨川』」

「ん？」

「『球磨川』くまがわ『そう名乗るよ』」

「オツケー。じゃあ名前は？」

流石に同姓同名は嫌だな

だって、それだと『僕』という過負荷こしんじゃなくなるだろう？

”球磨川禊”に取り込まれて”僕”という存在が無くってしまう

「『うーん．．．』じゃあ雪ゆきで『流石に同姓同名は嫌だから、
限りなく近い名前を選ばせて貰ったよ』」

「球磨川雪ねえ。くまがわ せつね うん、良いんじゃないの？」

決定、だね

「『ところで何時転生するんだい？』」

「今だ」

すると、赤髪さんは間を入れることなく僕を蹴りました。

いきなり不意を突かれたので必然的に僕の体は倒れる。

でも、地面に落ちるはずの背中が突然浮遊感を感じました。

下を見ると、そこには大きな穴。中は暗闇しか広がっていません。

「『せめて合図ぐらいくださいよ．．．』」

ちよつとした愚痴を零し、穴の中へと落ちていく。

「頑張れよー！ー！！」

最後に赤髪さんの声援が聞こえました。

さて、僕は一体どこの世界に送られるんでしょうか．．．出来れば元の世界がいいんですけど、そう都合良く事は運びませんね。

ああ、ノンビリとした世界に行きたい．．．

まあ、どんな世界でも良いけどね

どんなことが起きても、僕がぜーんぶ『無かったこと』にするから

プロローグ（後書き）

とても長いプロローグでした

過負荷が好きで始めた小説です

どうぞよろしくお願いします

一話 『んじゃ』『また明日とか!』 (前書き)

駄・目・文

自分の駄目文さに本当に呆れます

ああ、誰か文才を分けてください

初めて感想をくださった方、評価してくださった方々、
ありがとうございます

「話 『んじゃ』『また明日とか!』」

気が付けば僕は、遙か上空へ聳える建物の裏に倒れていた

体中に鈍い痛みが走っていて、頭痛も少々ある

僕は…生まれ変わったのか…

あまり実感が湧かないな

でも、事実僕は死んで、再び生き返った

こんな週間少年ジャンプに出てきそうな展開、
実際にあるんだね

「『痛たたた…』」

死から開放感から思わず独り言を呟いてしまう

さて、僕の新しく来た世界はどうなんだろう

立ち上がり、辺りを見回してみる

幾つも聳える高層ビルと、隅で道を掃除するロボットのようなもの

そして、僕の世界では見当たらなかった電車などが幾つか見える

この世界はどうやら僕の元の世界と似ているらしい

少々技術だけ進んでいるみたいだけど

「おい、その君！」

路地裏から観察していると、建物の影から突然声を掛けられた

そちらの方向を向いていると、一人の学生らしき少年が居た

学生服を着ていて、腕には緑色の腕章をしている

誰だろう？

「ん？ 僕？」

「ッ…！」

僕もそう少年に言うと、あの子は一瞬怯えたように見えた。

その表情は恐怖から軽蔑と憎しみの目に瞬く間に変わった

僕が他人と会話するだけで恐れられ、嫌われる…か

これが過負荷の欠点みりよくなのか…

「この辺りで大きなエネルギー反応があったと

通報があったんだけど…君はなにか知っているのか？」

丁寧な口調でも表情はかなり警戒している

大きなエネルギー反応ねえ…

完全に僕じゃないか

「『うん…』 『知らない』 『少なくとも僕は無関係だね』」

「とりあえず一緒に来てもらっていいか？ 見かけない顔だし、少し話を聞かせてくれないかな…！」

そう言っただけで僕に手を差し伸べてくれる

でも、その笑顔の裏には威圧的な瞳が宿っている

僕を完全に警戒し、軽蔑し、見下すような目だ

これからは過負荷として、いつもこんな目に耐えないといけないのか…

「『うん、いいよ』 『でもさあ、僕、少し探し物をしているんだ』」

『よかったら君も一緒に探してください』

そう言っただけで路地裏の奥に手招きする

友好的な笑顔を作って、できる限りフレンドリーに言う

「…分かった。見付かったら直ぐ着いてきてもらいますよ？」

それに応じると、少年は僕が居る路地裏の奥に来てくれる

そして、少年が目の前まで迫った時…

「がアツ!!??」

少年の腹に数本の巨大な螺子が刺さり、
更に両腕にも小さな螺子が幾つも突き刺され、
壁に縫い付けられていた

うわ、痛そう…

「『あは!』』迂闊だねえ学生くん、過負荷^{マイナス}相手に
無計画に近づくなんて』でも安心して、僕は殺したりはしないか
ら』」

「てめえ…!」

何本も螺子が突き刺さっているのにも関わらず、少年は僕を睨み倒
している

「『良いのかなあ』そんな態度をとって?』』君の命はもう僕の手
の平の中っていつのに』」

すると、今度はさっきより数倍大きい螺子を取り出して、少年の頭
に近付ける

その行動に睨んでいた少年は涙目になる

「お願いだ! 命だけは助けてくれ!」

「『そんなテンプレ的な誤り方をされてもなあ…』』もう少しオ
リジナリティのある

謝り方をしてくれないと、僕も助ける気が失せるなあ…』」

「頼む！ なんでもするから！」

慈悲を悲願してくる少年

そんな少年を、僕はただただ笑いながら見ている

なんだろう、この感じ？

他人の悲痛の表情を見ると、不思議と満足した気分になる…

人を不幸にすることで、僕は満足できる

そうだ… そうなんだよ

過負荷はいつも迫害される、ならどうすれば

他人に平等に接してもらえる？

他人を自分と同じ位置に墮おとせばいいんだ

「『ホント？』 『なんでもしてくれるの？』」

そう訊くと、少年はブンブンと頷いた

「『うーん、どうしよう？』 『他人に命令できる機会なんて滅多に無いからなあ』」

『あ、そうだ！』 『うん、なにを頼むか分かったよ！』

『死んでくれない?』」

そう言つて、僕はその螺子を少年の眉間に
ぶっ刺した

絶望の表情に染まつた少年はそのまま、
氣力を無くしたかのように
喚くのをやめ、目を閉じた

「『…なんちゃって!』』よく漫画でこう
いう台詞があつたか
ら、僕も

一辺言つてみたかつたんだあ!』」

そう言つと、僕は一つずつ少年の螺子を
抜き取る

全部抜き終わると、僕は意識の無い少年
に向かつてこう言つた

「『だいじょーぶ、君のその傷は』』
ぜーんぶ無かつたこと
にしてあげたから』」

返り血塗れになつた顔で僕は、満面の
笑顔でそう言つた

~~~~~

風紀委員第177支部は、大騒ぎしていた

先ほど見回りに向かった同僚の一人が、

路地裏で気を失っていたのだから当然とも言えるが

一部の者は同僚を襲った犯人の行方を追い、  
その他一部の者は精神錯乱状態に陥っていた  
同僚を、静めようと沸騰している

まるで臨死体験から抜け出した恐怖のような  
錯乱状態に陥っており、その惨状は凄まじかった

「一体誰がこんなことを…」

錯乱する同僚を見てそう呟くのは、

第177支部所属の初春飾利

圧倒的なコンピューター技術を持っており、

そのハッキング技術は風紀委員でも重宝されている

あまりにも様子のおかしい同僚を他所に、

初春は気分を変えようと路地裏から出た

そこで目に飛び込んできたのは、路地裏の出口の直ぐ後ろ、  
つまり自分の真横に居る少年

その少年の顔を見て初春は戦慄していた

少年の顔は、まさに返り血塗れだった

「『ん？』『あ、やべ！』」

初春を見るや否や、その少年は逃げるように走り出した

「あ！ 待ってください！」

慌てて初春はその後を追いかける

普段は身体能力が低く、逃げる犯人を捕まえることなど到底できない初春だが、なぜかこの少年にはどンドン追いついていった

そして、ようやくその少年の肩を掴んで捕まえた

「『ハアツ』ハアツ』ハアツ』』『やっぱ人類最低の僕が  
他人から走って逃げ切るなんて無理があつたかあ…』」

声を発した途端、初春はかつてにない気持ちに襲われた

ただ声を発しただけ

それだけで、この少年に対して説明しようのない憎しみを抱いた

「この人は気持ち悪い」と心の中で思いながらも、その少年に声を掛けた

「あの、貴方は誰ですか？ どうして逃げるんですか？」

「『だって、僕って証明書とか学生書とかまったく無いんだよ』  
『見たところ君達って警察みたいな連中だろ?』 『それなら捕まり  
たくない  
から逃げるのが普通だろ?』」

予想外のことを発した

証明書などが無い場合

つまりそれは不法にこの学園都市に侵入したという意味

学園都市の周りには巨大な壁が張り巡らされていて、  
進入する方法などは殆どなかった

「『あ、やべ』 『僕としたことが、返り血を拭いていないじゃな  
いか』

『あはは、いけないいけない』 『服は洗ったつもりなんだけどなあ  
…』」

自分の顔の惨状に気付き、乾いた笑い声を出しながら、  
少年は自分の顔を袖で拭いていた

あまりに堂々と証拠を隠滅しようとする少年に、初春はただ呆れる  
ばかりだった

「あの、一緒に着いてきてもらえませんか?」

「『嫌だ』 『だって今日、ジャンプの発売日じゃん?』

『僕はこの日のために一週間を生き抜くんだよ』」

「そ、そんなのは後にしてくださいよ！」

馬鹿馬鹿しい理由に怒鳴るが、  
それでも少年は笑みを崩さない

「貴方の名前は？」

「『球磨川雪』 最近ここに来た高校生さ」

「では球磨川さん、一緒に着いてきてください。  
証明書や不法侵入の件では、そちらで訊きますので」

言われるがままに連行される球磨川

元々過負荷の所為なのか、身体能力が  
女子中学生のほずの初春より低いため、  
抵抗せず素直に着いていった

いやいや、ミスったぜ

興味本位での学生くんを放置した場所に行ったけど、



まさか警官で溢れ返っていたなんて

しかも、あの学生くんもまさか警官の一人だったとは…  
ついてないぜ

今回は他の警官も多いから、僕は素直に連行された

本当は螺子伏せた後で逃走したいんだけどなあ

「『君も警官なのか？』」

「いえ、私は風紀委員という組織に所属しています。まあ、  
所謂学生で構成されている警察です」

「『へえ。ちなみにあの倒れていた学生くんも…』」

「風紀委員のメンバーです」

あはは、やっぱりそうか

結局こうなってしまうのか…

「ではさっそく、貴方について話してもらえますか？」

風紀委員第177支部つて所の一室に連れて行かれた僕は、  
そのまま事情聴取という名の尋問を受けた

「『さつきも言ったけど僕は球磨川雪』『ついさつきここに来たばかりの

高校生さ』『よろしく!』」

「私は初春飾利といいます。さつきですけど球磨川さん、貴方はどうやってここに来たんですか？」

初めて自己紹介してくれた初春ちゃん

うーん、見るからに年下の女の子に尋問されるのは少し嫌だけど、しょうがないねこは

「『知らない』『気が付いたらあの路地裏に倒れていたんだ』」

「どうやってここに来たか知らないんですか？（記憶喪失?）」

まあ、神様に送り込まれたなんて言えないし

「『うん』『だから僕はここが何処なのか、ここでの文化や常識はなんなのか、さっぱり分からないんだよ』  
『説明してくれれば僕は助かるんだけど…』」

「そうですか…此処は”学園都市”と呼ばれている科学の街です。ここでは科学的に解明された超能力を研究していて、ここに住んでいる殆どの人間は学生です」

おいおい、まるで少年漫画のような世界じゃないか

それに、学園都市か…どこかで聞いたことがありそうなんだよねえ…

僕はジャンプ愛読者だから他ではあまり覚えが無いけど

「『へえ、それはまた僕の少年心を撥るような場所だね』」

「でも、本来ここは正式な手続きをしないと入れないんですけど…」

まあ、僕はその赤髪さんに落とされてきたからね

正式な手続きなんて一切働いていない

「『そういうのは何処でやるのかな？』 『悪いけど、そうと分かれば僕は

一刻も早く手続きを済ませてさっさと平和に戻りたいんだけどなあ』

「  
その方が面倒なことにはならなさそうだしね

新しい世界に来た初日で不法侵入者で指名手配されたらそれこそ  
過負荷マイナス以上に最低マイナスだよ

「あ、でも…（この人って一応不法侵入者だよな？）」

「『まあまあ、そういう堅いこと言わないでよ』 『そういう人は  
友達が減るぜ？』」

「よ、余計なお世話ですよ！」

僕なりの忠告のつもりだったんだけどなあ

「手続きはここで済ませてください。（記憶喪失なら良い、かな？）」

「  
そう言って、なにか住所を紙に書くと、僕に渡してくれた

「『ん』『ありがとう』」

うん、じゃあさっそく

「『じゃあ、さようなら』」

この部屋から出ようとする

「あ、待ってください！ まだ話は終わっていませんよ！」

でも直ぐに扉の前までダッシュされ、出口を塞がれる

あはは、幾ら過負荷とはいえ、女子中学生に  
出口を塞がれて出れないなんて、滑稽な話だぜ

これなら人類最弱の楔さんもビックリする

本来ならここで彼女を螺子伏せてでも突破するけど、  
今日の僕は気分が良いんだ。ここは見逃してあげよう

「『ええ…』」僕は早く週間少年ジャンプを買いに行きたいんだけ  
「ん」

「手続きを済ませるって言いませんでしたっけ!？」

あ、それもついでにやっておくよ

「はあ…もういいです。貴方は悪気があったわけでも無いと思いますし、もう帰っても良いです」

あは、とうとうそっちが折れたね

面倒臭かったけど、まあこれで不法侵入者で無くなるのなら、それで良いけどね

「『うん、ありがとう』『じゃあね』『』」

そう言っただ僕は扉に手を掛ける

あ、そういえば彼女に言っておかないといけないね

「『君、忘れてると思うから言っておくね？』『』」

「え、なんですか？」

「『君の同僚を螺子伏せたのって、僕だけ？』『』」

そう言った途端に、彼女は動きを止めた

啞然と戦慄した表情のまま僕を見つめている

その惨状に、僕は笑みを浮かべながら背を向ける

「『んじゃ』 『また明日とか!』」

一話 『んじゃ』『また明日とか!』（後書き）

駄・目・文

大事なことなので前書きと後書きで合わせて二回書きます

主人公を原作に組み込ませるのがここまで難しいとは思いませんでした

それに、初っ端から思いつきり暴れちゃっていますし

以前は『主人公の身体能力は原作球磨川本人

と殆ど変わらない』と書いていましたが、感想にて

その矛盾点を指摘されたので、『身体能力は球磨川より遥かに劣る』というものに変更させてもらいます

大変、ご迷惑お掛けしてしまいませんでした

はあ、もっと文才が欲しい…

二話 『僕は被害者だ』 (前書き)

今回は少し短いです



二話 『僕は被害者だ』

風紀委員の支部から離れて数時間が経っていた

今は適当に学園都市を散歩しているんだけど、  
その暇な時間で僕は考えたんだよ

この世界は少なからずとも元の世界とはかなり違う

超能力なんて技術があるんだ、幾ら”科学の街”って  
言われていてもこれはかなり非科学的だ

でも、そこで僕はあることを思いついたんだ

僕はもしかしたら、一人じゃないと思う

この世界は少なくとも僕の世界とは違う。  
超常的なことは起こりえるし、非科学的なこともある

それなら、つまり、僕以外の他の過負荷も存在するかもしれないんだ

幾ら世界は違ってもこの世界のくだらなさは変わらない

理不尽さも何も変わらない

そんな腐った世界なら、僕以外にも過負荷として  
生まれてきている人が居るのかもしれない

だから僕はもう、この世界でやることは決まった

僕は、この学園都市に住む過負荷を全員纏め上げてみせる

そして、超能力者のエリート共に思い知らせてやるっぜ

人類<sup>マイナス</sup>最低の素晴らしさというものを

数分後

どうしよっかなあ

幾つものビルが並び、大勢の人で賑わっており、  
ショッピングモールや飲食店なども多数並んでいる  
場所を、僕は一人で歩いている

数多くの建物から発せられている電気などの光の  
所為で、夜とは思えないほど明るく、活発だった

そんな賑やかな道を僕は歩いているんだけど…

金、無いよ

元々僕はこの世界に来た時はなにもなかった

携帯は勿論、お金やパスポート、証明書なんて皆無だ

服装は神様がこの学生の街でも違和感が無いよう、学ランになっていた。赤髪さんなりの優しさかな？

はあ、これじゃあ週間少年ジャンプすら買えないじゃないか

何気に周りを見てみると、僕は面白いものを見つけた

大勢の不良っぽい高校生が、恐らくは中学生の一人の女の子を囲んでいる

どこから見てもカツアゲか、ナンパだね

今時そんなことする連中が居るなんて、ちよつと時代遅れとは思わないのかな？

…あ

あはは、いいことを思いついたよ

ここが漫画の世界だったら、多分”ニヤ”って効果音が出たと思うよ

「『やっほー！』『皆さん、こんばんは！』」

お気楽的に、友好的に不良たちに挨拶した

突然声を掛けられたのに驚いているけど、あの女の子を含めて全員の視線が僕に移る

「ああ？ 誰だてめえ？」

「『ただの通りすがりの高校生さ』 それより、僕  
『君達に訊きたいことがあるんだけど、言っつていいかな？』」

一人の不良が僕を脅すかの様に睨んでくる

それにも特に同様することなく、  
僕は話を続ける

「『女子中学生をナンパするってことは  
つまりさあ、君達全員ロリコンって意味？（笑）』」

僕の発言に周りの空気が凍ったかのように静かになった

不良たちは微動だにせず、僕を見つめている

やがて、硬直が段々と解けていき、その表情は怒りに染まっていく

「てめえ！ ふざけるんじゃないよ！」

全員が僕に殴りかかってくる

あまりのそれなりに大人数だけど、特に問題は無いね

「あ、危ない！」

さっきまでずっと突っ立っていた女の子が  
心配したような声を上げる

あはは、まあ見るからに貧弱そうな草食系の僕が  
ガラの悪そうな不良に大勢で襲われたらそう思うよね

次の瞬間、不良たちの全員が一人残らず、  
幾つもの巨大な螺子で地面に螺子伏せられていた

「なッ！？ グ、ぎゃああー！！」

体中が螺子で貫かれている惨状を見て、  
不良の男の子たちは全員痛みで声を上げる

「『あは！』『馬鹿だねえ』『人の危険度を測らず攻撃してくる  
のは  
とても浅はかなことだぜ？』『それに、君達から攻撃してきたんだ  
から  
正当防衛ってことになれるしね』『」

ついでに僕は全員のポケットから財布を抜き取った

「『じゃあ、あばよ』」

そして、用済みになった地面に平伏している男の子たち  
全員の後頭部に、巨大な螺子が突き刺さった

「『ぎゃああああ！！』」

一声を上げた後、辺りはシーンと静かになった

完全に計画通りじゃないか

過負荷だから自分の思い通りには行かないとは思ったけど、まさかこんなにスムーズに進むなんてね

服は返り血塗れになっちゃったけど、まあ

これは大嘘憑きで直せるけど

お金も手に入ったし、一件落着（？）

「『って、ワオ』」

某風紀委員長みたいな声を上げると、

僕の顔面の前をギリギリ雷撃が通り過ぎた

雷撃が向かってきた箇所を見ると、僕に

向かって手を突き刺しているさっきの女の子が立っていた

「アンタ…！」

敵意丸出しで僕を睨んでくる

それより雷撃つてなんだよ？

まるつきり漫画みたいな能力じゃないか

これが超能力なんだね

これは凄い、僕の少年心をここまで攪るなんて

「『おいおい、なにをそんなに睨んでいるんだい？』」

「幾ら私が脅されてたとしても、これはやり過ぎよ！」

地面で血塗れになりながら体中を螺子で串刺しにされている不良たちを指差す

なんでこうなるんだよ…

「『あの人たちが攻撃してきた』 故に正当防衛さ』」

「自分から挑発しといて、何処が正当防衛よ！ お金だつてあいつらから盗んでるし！」

はあ、せつかく気分が良いからついでに助けてあげたのに、この仕打ちはなんだよ？

やっぱり過負荷に対しては理不尽だなあ

「『』でも、事実あの子たちは僕に向かって攻撃してきただろ？』」

『貴方は僕に黙って殴られてボコボコにされるとでも言っているのか？』」

「別に、私はそんなつもりで…」

「『僕は大量の高校生たちに袋叩きにされる所だったんだぜ？』  
『それなのに僕を凶悪犯扱いするなんて、横暴だよ君は』」

『僕は被害者だ』」

「ッ〜！」

声にもならない怒りの声を上げる中学生ちゃん

それは僕が行った行為に対しての怒りなのか、  
僕に論破されたからの怒りなのかは定かでは無いけど

「ふ、ざけるなア！」

再び電撃をぶっ放してくる中学生ちゃん

いきなりスイッチの入った全力の攻撃で、  
しかも僕を殺す気満々だ

過負荷の貧弱体質である僕にこんな攻撃は避けれるはずも無く…



「『う、うわアア！！』」

僕は思いつきりその電撃を喰らい、  
真っ黒焦げにされた上に血塗れになってしまった

あはは、やばい、マジで死んじゃうよ

「えッ！？」

避けると思っていたのか、驚いている中学生ちゃん

「『あはは、過負荷相手に手加減無しって、えげつ無いぜ…』」  
痛みと傷、そして出血多量で倒れてしまう僕

「あ、ちょっと！」

でも…

「なッ！？」

中学生ちゃんの頭上から大量の螺子が  
降り注ぎ、当たるか当たらないかのぐらいの  
距離で周りに突き刺さる

「『ふう〜、危うく痛みで気を失っちゃう所だったよ』」  
『流石に無意識での使用は出来ないし』」

無傷で僕が立ち上がるのを見て、中学生ちゃんは目を見開いた

「そんな！？（幾ら手加減していても、レベル5の電撃を直撃して無傷なんて…それにこいつからあふれ出てる負のオーラ…）」

「『はあ、これじゃあ僕が益々被害者じゃないか』『ま、その方が警察にも言い訳できるし、良いか』」

「アンタ、何者？ どうして私の電撃を受けて無傷なのよ？」

「『そんなの簡単さ』『君が頑張って僕に放った電撃を』」

『君が自分の労力を使って僕を丸焦げにしたっていう事実を』

『無かつたことしただけさ』

「は？（無かつたこと？ わけ分からないわよ！）」

僕の無能力マイナスの意味が理解できていないようだね

まあ、君みたいな能力者プラスが僕みたいな無能力者マイナスを

理解するなんて絶対にありえないけど

すると、後ろからパトカーのサイレンが鳴り響いている

どうやら僕が不良たちを螺子伏せているのを見て

誰かが通報したみたいだ

「『あは！』『僕もう行かなくちゃいけないよ』」

『じゃあまたね、中学生ちゃん』」

お別れの挨拶をした後、啞然としている中学生ちゃんを他所に僕は歩き出した

「アンタは、絶対私が捕まえる！ 捕まえて、半殺しにしてあげるから、覚悟しろ！」

歩き出す僕に向かってそう怒声を放つ

あはは、実に強者ブラスのような台詞だね

でも、なんで僕ばかり恨まれるんだろう？

あはは！ 憎まれマイナスっ子だから仕方無いよね！

三話 『僕と居れば、君は世界一不幸になれる』 (前書き)

一人目のオリキャラ兼オリ過負荷です

もし良かったら過負荷のアイデアなど

あれば感想欄に書いていただけると嬉しいです

一種の募集ですね

僕の想像力ではあまり良い案が浮かばないので、  
良かったらどうぞ書いてください

出来る限り採用することにします

三話 『僕と居れば、君は世界一不幸になれる』

「『これください』」

「は、はい！ 625円になります！」

千円札をコンビニの店員に渡し、僕は会計を済ませる

そして、小さな袋を受け取り、そのままコンビニを出る

なにをしてるかって？ あはは、愚問だね

お金がやっと手に入ったんだからジャンプは直ぐにでも買わないといけないだろ？

ついでに食べ物も少し買ったし

あの中学生ちゃんとの小さな言い争いから

一時間ぐらい経ってるけど、まったく…することが無いぜ

まず住居すら無いんだ

ま、それは正式に登録したら学校と共に

与えられると思うけど、今は行く場所すら無い

それに他の過負荷に関しての情報もまったく無い

こんな学生みたいなお子様で溢れている都市なら

過負荷みたいな噂も多いと思ったけど、意外と少ないらしい

訊き込みをしても僕が話しかけると皆逃げちゃうし

はあ、確かに大嘘憑きのお陰で死ねない体になったし、  
赤髪さんから与えられた課題は問題無いけど、過負荷が  
ここまで不憫だとはね

あの漫画を読んだ人は殆ど、”過負荷とか異常性が欲しいなあ”  
とか思うかもしれないけど、過負荷や異常性なんてとんでもなく不  
憫だよ

その他の人と比べるとかなりの異常性な分、避けられ  
迫害され、化け物を見るみたいな目で見られる

そんなの、常人じゃ耐えられないよ

だから過負荷や異常性を持っている人は少なからず  
性格や考え、理想が破損しているんだ

とまあ話を戻すけど、とにかく僕は訊き込みでも相手にされないんだ  
途方に暮れながら僕は深夜の道を歩く

すると、近くを歩いている二人組の興味深い会話が耳に入ってくる

《ねえねえあの噂聞いた？》

《あの噂ってなに？》

《こここの直ぐ近くにある廃墟に人が住んでるって

噂があるんだけど、その人に近づいた人は皆不運な死に遭ったんだって!」

《うわぁ! こわ〜!》

現代の女子ではもう定番の都市伝説のような噂話

でも、これはひょっとして…

「『ねえねえその二人』 『ちょっと話を聞かせて貰ってもいいかな?』」

僕が話し掛けると、二人共ビクッと一瞬震えた

僕ってそんなに気持ち悪いのかな?

それともこの過負荷か、この括弧つけた話し方の所為かな?

「ひッ! えっと、なにか用かな…?」

少し震えた声で答えてくれる片割れちゃん

「『さつき話してた都市伝説の話なんだけどさ』 『その廃墟って何処かな?』」

あの噂を聞けば、その廃墟に住んでる人って

限りなく過負荷のつひやくかソレに近い無能力のつひやくを持っている人だ

少なくとも過負荷側のつひやくの人間だ

それなら勧誘するのも悪くないだろ？

「あ、あつちです！」

近くにある廃棄された工場を指差して言ってくれた

見るからに”近寄るな”って異様な雰囲気を出している

あの場所は、普通の人なら確実に心霊スポットって呼んでいると思う

あはは、まあヒッキーには丁度良い隠れ家だね

「『ありがとう』『急に話し掛けて悪かったね』」

それだけ言い残して、僕はあの廃墟に歩き出す

この世界に来て一人目の僕と同類の奴

どんな最低マイナスか楽しみだよ

ちなみに後ろでヒソヒソと「あの人気持ち悪かったよね？」って話し声が聞えたのは無視しておくよ

さて、廃墟に入ってみたのは良いけど、真っ暗でなにも見えないなあ



せめて月でもいいからなにか明かりがあればなあ

「『おーい！』『ここに居るのは分かっているからさあ、出てきなよ！』」

『安心して〜！』『僕は君の味方だからさあ！』」

試しに大声を出して所在を確認してみる

でも、それは空っぽの工場に響くだけでなにも応答は無い

留守かなあ？

すると突然、僕の後頭部に鋭い衝撃が走った

「『えっ？』」

地面に血が飛び散っていることから、僕は後頭部からかなり出血しているみたいだ

殴られるだけで血が飛び散るって、釘バットかなにかか？

「てめえ、なにもんだ？」

後ろからどこか野蛮な男の子の声が聞える

まあ殴られてるから当たり前だけど、どうやら留守じゃないらしい

「『痛ててて…急に殴るなんて酷いじゃないか』」

「勝手に人ん家に上がり込むてめえの方がひでえと思うが？」

まったく…元気な子だなあ

この子が”近づくと不幸な死を遂げてしまう”と噂されてる男の子が少し乱暴な箇所以外は至って普通なんじゃないのかな？

「あ、それと、そこに居ると危ねえぞ？」

「『？』『どついう意味か』」

次の瞬間、僕の目の前が鉄棒で埋め尽くされていた

頭は勿論、体中になりに重い鉄棒や工場の器具が落ちてきて、多分全身の骨が骨折してると思う

後頭部どころか頭全体が流血状態だけど…

「ああ、運悪くその器具を留めてる縄が切れちまったみてえだな。ソイツは不運だな」

「『僕が丁度落ちてくる箇所に立っていたのも不運だったって言うのかい？』」

瓦礫の中から這いずり出ながら僕はその男の子に訊く

「おッ、物分りが良いじゃねえか」

這いずり出て、どうにか立ち上がった瞬間、今度は

顔をさつき感じた鋭い衝撃が直撃する

ボロボロだった僕の体は更に吹き飛ばされ、壁に激突する

激突した衝撃で壁に取り付けられていた

古い棚が壊れてしまい、上に置いてあった器具も  
全て落ちてくる

その真下に居るのは僕

つまり

「『まったく…痛く過ぎて笑うことすら出来ないじゃないか』」

ドライバーやカッターナイフが体中に突き刺さっている

痛い

これまでに感じたことに無い痛みだ

激痛で意識が無くなりそうなくらいだぜ

でも、この過負荷を手に入れてから

不思議と痛みに耐性ができているんだよ

打たれ強いつて意味かな？

「まだ死んでねえのかよ。いい加減にしてくれよ…」

呆れたように頭を掻きながら僕にスタスタと歩いてくる男の子

僕の目の前まで来ると、胸ぐらを掴みあげて  
目線の位置まで無理矢理持つてくる

「『殺すのかい？』」

「あたりめえだろ。それこそ俺の生き甲斐なんだから」  
ポケットから彼はなにかを取り出した

暗闇の中で輝くそれは、鋭く尖っている  
”凶器”。真夜中の工場に僅かに漏れている月光  
によって露になる男の子の”狂気”

「じゃあな」

そのナイフを、僕の胸に、突き刺した

心臓を貫かれた僕は、力を無くし地面に倒れる

「はあ、まったく手間かけさせやがって」

意識の途切れる少し前に、彼がナイフを  
僕の胸から引き抜き、この場を去っていくのが見えた

「ちツ、また死体の処理かよ。面倒臭えな…  
つかアイツなにもんだったんだよ？ あの喋り方と  
独特な雰囲気、まるで俺と同じみたいな…」

「『同じさ』」

「なッ!？」

男の子の周りに無数の螺子が突き刺さる

勿論、一本も当ててないけど

「『君は僕と同じだ』 『同じ最低で、最悪で、負完全で、屑で、負け犬で、社会の塵で、不幸せ者さ』」

「てめえ…なんで…!」

無傷で彼の前に立っている僕に驚愕の声を上げる男の子

まあ、さっき殺した相手が目の前に立っていたら誰でも驚くよね？

「『おいおい、なにをそんなに驚いているんだい?』」

『君も同類なら分かるだろ、僕がなにをしたかぐらい』」

「意味が分からねえよ! てめえはなにをした! 何で生きてやがるんだ! てめえは俺が確実に殺したはずだ!」

曖昧に話を済ませている僕にイライラしたのか、怒りの声を上げる男の子

「『簡単さ』」

『君が僕を切り刻んだり』

『殴ったり』

『ボコボコにしたり』

『刺しまくったり』

『潰したり』

『殺したりしたことを』

『無かつたことにしただけさ』

「なんだと…？」

代表的な驚き方をしてるね

何回も言うけど僕はテンプレが大嫌いなんだ

オリジナリティのもの以外は興味が殆ど無い

「『君の能力と同じ種類のものさ』 『僕が見る限り君は他人の運を最低にする能力みたいだね』 『うん、それは十分に最低で最悪な能力だよ』 『気に入った』」

「てめえ、なんで俺の能力を…」

どうやら当たりのようだね

器具が落ちてきたり、棚が壊れたり、

工具が僕に刺さったのも、ナイフが都合よく急所に当たったのも、全てこの子の過負荷が僕の運を低下させていたからなんだ

”運が悪かった”、まさにその通りだね

他人の運を最低まで低下させていたんだから

「でも、僕の無能力は君以上に最低だ」マイナス

そのまま一本の螺子を男の子の腹に突き刺した

「がアアツツ!!」

反撃されるなんて想定外なのか、避けられず痛みの声を上げる男の子

「てめエエエ!!! ぶっ殺してやらアア!!!」

そう雄叫びを上げているけど、痛くて動けないのか地面に寝たままだ

「『あはは』別にそんなに怒らなくてもいいよ」

『そんな傷は、僕がぜーんぶ無かったことにしてあげるから』

僕は彼から螺子を抜き取った

すると、さっきまでの傷が嘘だったかのように綺麗さっぱり無くなっていた

痛みも無くなっている点も含め、男の子はただ啞然とするばかりだった

「そんな…馬鹿な…」

「『あはは、驚いた？』『君の能力が運を最低にするのなら』」

『すべて なかつたこと 現実を虚構にする』、それが僕の大嘘憑きだ』オールフィクション」

あまりにも驚愕な僕の能力の全貌に、彼はただ啞然とするばかりだった

ちなみに却本作りは使<sup>ブックメーカー</sup>ってないよ？

この過負荷は禁止手だ、あまり迂闊に使うような代物じゃない

「『まあでも、僕は別に君と戦うためにここに来たわけじゃないんだけど』」

「あア？ 俺になにか用か？」

「『単刀直入に訊くけど、僕の仲間にならないか？』」

「はア？」

僕の質問に疑問符を浮かべる男の子

今までの戦闘で僕は確信した、この子は過負荷だって

過負荷なら、仲間になろうなんて言われるのは初めてだと思っけど



「なに言つてんだてめえ？　なんで俺がお前の仲間になんなくちゃいけねえんだよ？」

「『君は恨んでいないのか、君をこんな場所に住まさせるこの世界に？』」

「ッ…！」

僕の言葉に彼は息を詰まらせた

「『君はなににも悪いことはしていないんだろ？』』それなのに君はこんな廃墟みたいな場所に住まさせられていて、都市伝説扱いされている』」

『そんな世界を、君は恨まないのか？』」

「……………」

とうとう無言になってしまった

自分を今までずっと恐れ、迫害し、恨んできたこの世界

それについて真剣に考えているんだろう

「『僕はね、君みたいな子を集めて、とあることを企んでいるんだ』」

「とあること…？」

そして、僕は満面の笑顔で目的を話す

「『君は見下されるのが嫌なんだろ?』」

『なら超能力者を全員抹殺すればいいんだよ』  
『そうすればこの学園都市は平等で平和だ』

『君もそう思わないか?』」

「……おいおい、てめえ、頭イカれてるんじゃないのか?  
超能力者が何人居ると思ってるんだよ? そいつらを全員殺す  
なんて、できるわけねえだろ」

「『勿論一人で出来るとは思っていないよ』 『僕は世界で一番弱  
いんだぜ?』  
『そんなラスボスみたいなこと出来ないよ』 『だから仲間を集める  
んだ』」

しばらく考え込む男の子

うーん、と唸ったりして相当考えているらしい

僕としてはYesと答えて欲しい

彼のような人材は是非とも過負荷側に欲しいものだよ

「俺になんのメリットがある？」

「『メリットって？』」

「お前のその超能力者抹殺計画、それは全部お前の望みなんだろう？  
なら俺への見返りはなんだ？」

「『…僕は過負荷なんだ』 『無論メリットなんか一切無い』」

『ただ僕が出来るのは、一つの保障ぐらいだ』

『僕と居れば、君は世界一不幸かわいそうになれる』」

「…ときめくじゃねえか」

僕の条件にニヤリと笑みを浮かべる

「一見デメリットしかないようなこの条件

でも、彼も過負荷ならこの条件の意味を理解しているはずだよ

「分かったぜ。俺はてめえの

仲間になってやる。名前はなんだ？」

「『高校三年生の球磨川雪だ』」

「高二的木更津敦だ。一年下だから、アンタの後輩ってことになるな。」

よろしく頼むぜ、球磨川先輩」

「『うん、こちらこそね、木更津ちゃん』」

この世界に来て始めての仲間

『ミスフォーチュン』の木更津敦くん

三話 『僕と居れば、君は世界一不幸になれる』（後書き）

まさかの途中まで主人公フルボッコ

まあ、人類最弱なので仕方ないと思いますけど

（オリ、または原作過負荷の説明コーナー）

この作品で新しく登場した過負荷はオリ・原作問わずここで説明します

まずは主人公の過負荷

『オールマイクシヨン大嘘憑き』

”すべて なかったこと現実を虚構にする”能力

それが現実なら、それが起こったという事実を嘘として処理し、無かったことにする能力

所持者が死ぬと自動で発動し、所持者は実質死ねない体

『ブックメーカー却本作り』

作中に能力が使用されるまでお預けです

『ミスフォーチュン負運性』

周囲に居る他人の運を最低レベルまで下げる  
過負荷。その範囲は定かとなつては居ないが、  
近くに居るほど効果が強力になる

漢字の由来は不運の”不”を負に変えて、  
運勢を性つて変えただけです

想像力の無い自分ではこれが限界です…

#### 四話 『無才能だ』

「それで、これからはどうするつもりなんだ球磨川先輩？」

廃工場から出てくる木更津ちゃんはそう僕に訊いてきた

彼とは行動を共にすることにしたんだ、  
まあ初めての仲間だしね

木更津ちゃんはこれから増えていく過負荷の  
副リーダー的な存在になって欲しいからね

僕の思考とかを理解してもらいたい

「『うーん、どうしよっかなあ』僕、ここにはつい最近  
来たから部屋とか学校とかは無いんだよね」

「どうするんだよじゃあ！？ 今日野宿でもしろっていつのか！」

僕の現在の状況を知ると、木更津ちゃんは  
驚きの声を上げ、僕に怒鳴ってきた

「『部屋を見つけられなかったらそうなるね』まあ、君も  
似たようなものだろ？』工場に住み着いてたし』」

「けどなあ、あそこはやっぱり寒くて寝辛いんだよ。  
ま、野宿するんなら俺はかまわねえけど」

工場で寝るのも殆ど野宿じゃないのか？

屋根があるだけマシだけど

「『明日にでも登録するからその時に部屋を貰おうよ』』 ついでに学校も』」

「おいおい、俺はガツコなんか行かねえぞ。そもそも俺たち過負荷にガツコなんて必要なのか？」

ちなみに木更津くんには過負荷については大体説明した

最初はこんなおとぎ話みたいな話は信じなかったけど、本人は自分の能力や思想を考えたら納得したそうだ

これで一人目だね

せめて後三人ぐらい欲しいよ

過負荷勢力は僕を含める主戦力の五人とその他のメンバー多数が良いな

ま、そんな都合良く集まるとは思わないし、精々僕を含めて五人で限界かな？

「『ここは学園都市なんだよ？』』 学校に行かないと怪しまれるかもしれないじゃないか』』 僕はこれでもかなり警戒されているんだよ』」



「警戒？」

「『風紀委員の子を一人螺子伏せちゃった』」

「なにやってんだよアンタは！」

冷たいなあ木更津くんは

「『まあ証拠不十分で多分捕まらないと思うよ？』」

『その子も今は精神科の病院に入院してるから証言なんて

得られないし』」なににより僕に関しての記憶も無かったことにしたから

「まずは安心さ『』」

傷を無かったことにしたついでに僕への恐怖以外は無かったことにしたから、僕がやったという証拠なんて何一つ無い。状況証拠だけで決められそうで怖いけど

「改めて考えると、球磨川先輩はとんでもねえ能力を持ってるんだな」

「『この能力だつて弱点ぐらいあるよ？』」一度無かったことにしたのを無かったことには出来ないし、気をつけないとこの世界そのものを無かったことにしちゃうかもしれないんだ』」  
『ま、つまり僕は自分の中に核爆弾を抱えているんだよ』」

気を抜いて制御が雑になると本気でこの世界が無かったことになるから怖いんだよね

だって、うっかりと世界を消しちゃったら

エリート抹殺もクソもないだろ？

「どっだけ出鱈目な能力なんだよ、その大嘘憑オールフイクションきつてのは…」

「『あはは、よく言われるよ』」

~~~~~

「『…ん？』」

朝の日差しが目に照らされ、僕は起きる

夜は明け、辺りはすっかり早朝だ

小鳥の鳴き声が鳴り響き、学校に登校している
学生達も見える

全員が公園で座ってる僕のことを変な人を見
るような目で見てるけど、なんでかな？

涼しい朝の風が僕の服を通る

まったく、なんとも快適な朝だ

「『おい、木更津ちゃん』『もう朝だぜ？』」

「あア？」

僕の声と共に木更津ちゃんも起きる

彼は機嫌が悪そうだ、顔色も優れないし

朝は苦手なのかな？

低血圧はいけないぜ？

「『明日はさっさと起きて登録しようって
言ったのは木更津ちゃんだぜ？』」

「でも流石に七時起きは久しぶりだ……」

これからは学生なんだから、それぐらいガマンしてくれよ？

ちなみに僕は滑り台で、木更津ちゃんは砂場で寝ていた

僕は寝癖で髪の毛が所々はねてるけど、
木更津くんは砂塗れだ

なんであそこで寝たんだ？

「『木更津ちゃんは馬鹿なんだね』」

「んだとてめえ！」

いけないいけない、つい考えが言葉として出てしまった

僕たちは公園から出て、初春ちゃんがくれた
紙に書かれた住所へ向かった

「その紙、誰からもらったんだ？」

「『風紀委員の子に事情を話して教えてもらったんだ』
『ご親切に住所まで書いてくれたしね』」

「風紀委員について、アンタなにしたんだよ……」

殺人未遂ですけどなにか？

「『着いたよ』」

「早えな！ どんだけ近くにあったんだよ!？」

「『公園の直ぐ近くで助かったね』」

公園の直ぐ近くにあった事務所に僕たちはたどり着いた

二階建ての建物で、小さな会社のような場所だった

こんな所で登録をするんだね

「『木更津ちゃんはここで待ってて』 『直ぐ戻ってくるから』」

そう言って、僕は建物の中へ入っていった

「『木更津ちゃんただいま』」

十分ぐらいしてから僕は戻った

僕はただ名前と年齢を教えただけで、
他の書類とかは全部やってくれるらしい

イメージと全然違うけど、こんなのでいいのかな？

「どうだった？」

「『第七学区で部屋を貰ったよ』 『学校は身体検査システムスキャンを受けた後だつてさ』」

まあ、結果は分かっているけどね

無才能マイナスの僕が超能力プラスのような才能を持っているわけないだろ？

「身体検査つて、俺たち過負荷に検査なんか必要なのか？ 結果なんて確かめなくても分かっているしな」

木更津ちゃんも過負荷というのは段々理解し始めているね

「『ま、学校へ行くためには必要だからさ』 『面倒だけど受けるよ』」

『検査は一応通う予定の学校つてことになってるし』」
転入生つてこともあってあまり良い学校には行けない

第七学区にある学力が比較的低い高校だったと思うよ

僕は一応高校三年生だからそれ相応のクラスになるけど

「『木更津ちゃんはどうするの?』」

「俺は適当に学園都市を彷徨ってるよ。学校にはもう行けねえし、他の過負荷も探しとくよ」

木更津ちゃんは元々学園都市に居た存在

つまり一度は学校に行ってるって意味だ

でも、彼は恐らく高校を中退してるところから、もう学校へ行くのは無理だね?

一度やめると再び学校に入るのはかなり難しいって話だし

「『じゃ、一先ず別れようか』 『じゃあ木更津ちゃん、また後で』」

「ああ、球磨川先輩も精々ボコられねえようにな」

お互い手を振って、僕は学校へ、木更津くんはどこか適当なところへ向かって歩き出した

「やあ、君が球磨川雪くんか?」

「『はい、そうですよ』」

僕が学校にたどり着くと、校門で教師の一人が待っていてくれた

多分あの登録会社から連絡があつたんだね

なにからなにまでお世話になるなあ

「はっはっは、面白い喋り方だな」

「『括弧つけた喋り方ですよ』 他の人はこの喋り方は気持ち悪いって言ってますけど』」

この先生はどうやら僕の括弧つけた喋り方を気に入ったみたいだ

大抵の人は僕が話すだけで怖がるんだけど、この先生はかなり器が広いみたいだ

「俺は独創的だと思うぞ！ ガハハ！」

なんともテンションの高い人だね

「ま、そんなことより、さっさと済ませるか。着いて来い」

先生は僕を学園の中へと案内してくれた

中は至って普通の校舎だった

普通の教室、普通の生徒、普通の先生

全てが普通ノーマル

マイナス過負荷の僕が普通ノーマルの学校に行くなんて、なんとも滑稽で気の毒な話だ

「ここで身体検査を受けてもらう。なーに、この機械に寝てもらうだけだよ」

僕が案内された部屋に置いてあったのは、大きな機械だった

真ん中あたりに一人一人が通れるぐらいの穴があって、台に僕を寝かせた後そこを通らせるらしい

それで超能力の有無、そしてレベルが分かるんだって

超能力者のレベルは強さ

上から5、4、3、2、1、0とあって、レベル5が最も強力なんだ

レベル5はこの学園都市では七人しか存在していないくて、その一人一人が軍隊の歩兵中隊を相手に勝てるらしい

それに比べてレベル0は無能力者

なんの超能力も無く、基本的に

ノーマル
普通な人間のことだ

ま、僕はそれに当て嵌まるんだけどね

「この台に寝転がってくれ」

言われるがままに僕が台に寝転がると、
台が動きだし、僕をあゝ機械の穴へと通した

ゆつくりと通過していく僕の体を、
なにか光のようなものが通る

これだけなんだね

まあ、超能力は脳を調べるだけで分かるらしいからね

「終わったぞ。今結果を検討しているから、少し待っていてくれ」

検査が終わり、僕は再び学ランに着替える

「結果お前は…レベル0、無能力者だ。残念だったな」

ほらね、過負荷に超能力なんか無いんだよ

そんなのを持っている過負荷は、既に過負荷じゃない

超能力者だよ
プラス

「別に超能力なんか欲しくありませんし、
がっかりというわけでも無いですよ」

「ま、本人がそう言うなら俺はなににも言わん。
それより入学おめでとう。もしお前のレベルが高かったら
他の学校に移らせるつもりだったんだが、レベル0なら
ここに通っても大丈夫だろ。じゃ、明日からガンバレよ」

「『へーい』」

今日はもう用済みになった部屋を後にし、
僕は教室の廊下で立ち尽くす

現在時刻は朝の九時

まだ起きてから一時間しか経っていない

はあ、どうしよう？

携帯とか無いから木更津ちゃんには連絡が取れないし

新しい自分の部屋にも戻るのは面倒臭いし

「『うーん…』」

しばらく顎に手を当てながら考える

あ、なら良いこと思いついたよ

他の教室を見学しようよ

そうすれば他の過負荷を見つけられるかもしれないし

そうと決まればレッスンゴー

無駄に高いテンションで僕は学校を歩き出した

「『ん？』」

しばらく教室を転々としてしていると、僕の目に一つの教室が止まった

ここだけが異様の雰囲気を出していた

窓から中を覗いてみるけど、やっぱり中は普通の教室

ツンツン頭の生徒とか、サングラスをかけた生徒とか、関西弁を話す生徒とかも居たけど、それでもまだ普通だね

でも、端から端を除いていると、一人の生徒が僕の目を捉えた

教室の隅に縮こもっている一人の女の子

無表情でなにも考えておらず、他とは別の世界に居るような雰囲気、そして他人を拒絶するような目

でも、そんなことよりも彼女の周りが

僕の興味を引いた

彼女の周りにはなにも無いけど

そう、何も無いんだ

「『彼女、絶対に同類ほくたちじゃないか』」

決めた

僕は彼女の最低を

底辺を

負完全を

負け犬らしさを

「『受け入れてあげようじゃないか』」

五話 『受け入れるんだ』

「『お邪魔します』」

僕はさっそくその女の子の居る教室の中へ入った

今は休み時間なのか生徒たちは席を立って
友達などと話していた

ま、授業中じゃないだけマシかな？

急にこの学校とは別の制服を着た

生徒が入ってきて他の子たちは驚いていたけど、
それに得に気にすることなく僕は女の子の席へ向かった

目の前に立つと、今まで地面に俯いていた

女の子はそっとこちらを見上げた

さっきまで気付かなかったけど、

何気に可愛いじゃないか

ま、その瞳は最低^{マイナス}だけど

「『こんにちは』」

「…こんにちは」

挨拶すると、その子は小さく、弱々しい声で答えてくれた

「『そんなテンション低くして、どうしたの?』 『ほら、そんなに悲しくマイナスになったら可愛い顔が台無しだぜ?』」

「……」

これはセクハラ発言だと思うけど、そういうのは気にしないでくれ
僕に罪悪感なんて欠片も無いけど

だって、僕は悪くないんだもん

「『ま、冗談は置いて…』 『放課后会えるかな?』
『少し君とお話がしたいんだ』」

彼女の過負荷の能力の確認と、彼女の勧誘だけどね

「…いいですよ」

彼女は興味が無さそうだけど、一応は了承してくれた

うん、これでよし

後はこちらに引き入れるだけ

「おいちょっとアンタ!」

満足気に僕は帰ろうとするけど、一人の
生徒に呼び止められる

声からすれば男子生徒だと思う

まあ、声質はどこまでも幸せ者^{クラス}だけど

「『ん』『なに?』」

振り向いてその呼び止めた子を確認する

僕に声を掛けたのは、さっき窓の外から覗いていた時に何気に見たツンツン頭くんだった

「他所の学校の奴が、勝手に人の教室に入ってなにしてるんだよ！ 彼女だって困ってるだろ？ ほら、もう大人しく帰ってくれよ」

どうやら彼は僕が突然入って来たのを気に入らなかつたらしい

それか、このクラスに居る全員の生徒が思っていることを代弁したんだろう

まあどっちにしろ、彼は偶に居る正義感が強い子だよ

他人から頼まれたことは断れず、

困っている人が居たら放っておけないタイプだ

あはは、僕だつて同じだろ？

見^{マイナス}下される人が居るから僕は超^{エリート}能力者を

全員殺してこの街を平等にして彼等を幸せにするんだぜ？

対象が違うだけで人を助ける点では同じだ

正義かれと偽善ぼく、どちらが正しいんだろっね

「『うるさいなあ』『もう帰るって言ったんだから、いいだろ?』」

マイナス性をむき出しにして彼に笑顔を向ける

笑顔は人間にとっては最大のポーカーフェイスだ

こういう時に笑顔を作れば、誰だって退くんだよ

「ッ…!」

案の定、彼は僕を離してくれた

「『あはは、君は面白い子だね』『名前は?』」

「…上条当麻だ」

「『僕は球磨川雪』』もしもう一度

会うことがあったら、その時は仲良く友達になろうっね?」

さっきまで気付かなかったけど、彼はかなり興味深い

彼に掴まれた時、彼の右腕からとてつもない”何か”を感じた

超能力とも、才能スキルとも違う”何か”を彼は持っている

これは興味深い人だね

僕は手を振って、彼に別れを告げた

「『案外時間は早く進むんだね』『まあこれは作者にも都合が良いみたいだし』」

あれから放課後まで僕は適当にこの学校を彷徨っていた

頭の中で誰かが「キングダムソーン！」と言った気がするけど、気のせいかな？

まあそれよりは、あの子とやっと話せる

「『あ、居た居た』『おーい！』『こつちだよおー！』」

校舎から出てきた彼女を、僕は大声で手招きする

それに気付いた彼女はそのまま僕に向かって歩いてきた

「…会う約束を覚えていたんですね」

「『君みたいな可愛い女の子と会える

約束を忘れるわけ無いだろ?」

そのまま僕と彼女は人目の付かない所を探しに歩き出した

まあ、僕は彼女に着いていつてるだけで、
場所は全部彼女に任せてるけど

「…ここなら誰にも聞かれませんか」

僕たちは校舎裏で向かい合うように立っていた

よくジャンプの青春漫画で不良が
生徒をボコボコにする場所みたいなものだよ

まあ、過負荷の僕はそういうのには耐性があるけど

「『もしかして人目を気にしてくれたのか?』あはは、
気が利くんだね』ありがとう」

まだ世間に過負荷マイナスという存在には気付いて貰いたくないからね

「『ところで君、少し訊きたいんだけど』」

「…なんですか?」

「『君、おかしな能力とか無いか?』」

「ッ…!」

僕がそう訊いたら、一瞬彼女の表情が歪んだ

恐らく心当たりがあるみたいだね

「…一体なんのことですか？」

「『僕には分かるんだよ』『いや、過負荷には分かるんだよ』

『ほら、戯言シリーズでも”零崎は他の零崎を感じられる”って言うんだろ？』

『それと同じさ』『過負荷は他の過負荷の存在を感知できる』」

彼女は僕の問いの意味が分からないと言うが、僕は自分の特技というか過負荷の性質を教える

過負荷には過負荷が分かる

つまり、彼女も感じてるはずだ、僕が彼女と同類だっていうことを

「『ほら、こうして近付けば君だって分かるはず』

「来ないでください！」

すると突然、僕は後ろに向かって吹き飛ばされた

まるで全身を衝撃波が襲ったようで、そのまま校舎の壁に叩きつけられる

「あ…」

「『いてててて…』 『これが君の過負荷の力なんだ？』」

「くッ…！」

フラフラと立ち上がりながら僕は
そう言う

後ろの壁が少し窪んでたけど、修理大丈夫なのかな？

まあ、僕は悪くないけどね

「違います！ そんなものなんてありません！
とにかく私に近付かないでください！」

そう言い切るが、そう言ってる時にも衝撃波は
襲ってきて、再び吹き飛ばされる

今度は壁にこそ叩き付けられなかったけど、
かなり遠くへ飛ばされたよ

でも、これで確信が出来た

「『君の能力の正体が分かったよ』 『あらゆる物を
拒絶することで、それを周囲から遠ざける能力だ』」

ようするに、嫌いなものは根こそぎ吹き飛ばしてるんだよ

まったく、我が儘な子だな

「ッ…！ それが、どうしたって言うんですか！」

「『いや、別になににも悪くないよ』 『見るからに君は制御できていない』

と思うし、君のせいでは無いよ』 『僕はただ君の能力の確認をしただけだから』」

ま、この能力も十分最低で自分勝手な能力だよ

「『でも僕は、そんな能力を持っている君が必要なんだ』」

「私が…必要？」

「『そう』 『君みたな能力を持っている子を過負荷って呼ぶんだ』 『過負荷っていうのは、自分が不利になるような能力の呼び名でね』 『この過負荷を持った子はみいーんな最低で底辺な人間なんだ』 『もちろん』

僕もその一人だけだね』」

僕がこの子に過負荷について説明すると、彼女は信じられないのか首を横に振る

「違う…！ 私はそんな変な能力は持ってない…！」

「『現実を否定するものじゃないぜ？』 『事実君は僕を吹き飛ばして、』

骨を数個折ったんだぜ？』 『まあそれは直ぐに僕が無かったことにしたけど』」

骨が数本折れたことに彼女は驚いていたが、
”無かったことにした”という言葉に疑問符だった

「無かったことに…?」

「『そう』」

『すべて現実を虚構にするのが僕の過負荷、マイナス大嘘憑きの欠点さ』」

あまりに衝撃的な能力の内容なのか、今まで無表情だった彼女は始めて”驚愕”という感情を見せた

「…私に他の人とは違う”何か”があるのは認めます。でも、なんで私が貴方の仲間にならないといけないんですか?」

彼女が必要という僕の言葉に本人はとても怪しんでいる

まあ、彼女が本当に過負荷なら、必要とされたことなんて一度も無いと思うけど

「『それは、君が過負荷だからさ』 『それ以上に理由は無いよ』」

「え…?」

「『僕は君みたいな子を集めて、この学園都市に存在する超能力者^{エリート}を皆殺しにしたいんだ』 『そのために君達みたいな子が必要だ』」

目的をいとも簡単に話す

別に秘密にしなくてもいいしね

だって、もし彼女が仲間にならず、それを敵に報告しようとしても、彼女の僕に関しての記憶を『無かったこと』にすれば済むしね

「でも、私が過負荷という科学的根拠は…」

はあ、まだ言ってるのかよ

しょうがないね、ここは一つ本当の過負荷を見てもらわないと

「『いつまで否定するつもりだよ…?』」

「ひッ…!」

マイナス性全開にしたせいか、彼女は少し怯えてる

本当は僕もこれをしたくは無いんだけどね

僕は悪くないけど

「『いつまで現実を否定するつもりだよ?』」君は間違いなく過負荷だ』 過負荷の僕には分かる』 君はただ受け入れていないだけだ』」

「受け入れて…いない?」

「『そう』 君の身の回りに起こる不幸を全て”受け入れる”んだよ』 自分は屑だ、塵だ、負け犬だ、最低だ、幸せになんかなれないって』 認めるんだよ』」

徐々に、でも確実に彼女を過負荷へと墮としていく

「『受け入れるんだよ』

『不条理を』

『理不尽を』

『嘘泣きを』

『言い訳を』

『いかがわしさを』

『インチキを』

『墮落を』

『混雑を』

『偽善を』

『偽悪を』

『不幸せを』

『不都合を』

『冤罪を』

『流れ弾を』

『見苦しさを』

『みつともなさを』

『風評を』

『密告を』

『嫉妬を』

『格差を』

『裏切りを』

『虐待を』

『巻き添えを』

『二次被害を』

『愛しい恋人のように受け入れるんだ』

『そうすれば、僕みたいになれるかもしれないよ』
「」

言葉の連打を彼女に与え続ける

これが過負荷、これが最低

負の側面を全て受け入れてこそ、
人間は本当の意味で過負荷になれるんだ

「あああああ…!!」

「『だから、君は受け入れるだけでいいんだ』
『過負荷のことなんて心配しなくていい』」

「ああああああああ…!!!!」

「『僕が君の最低^{マイナス}を受け入れてあげるから』」

この言葉と共に、彼女は僕に泣きついていた

初めて受け入れられた

自分を、最低^{マイナス}の自分を

過負荷として受け入れてくれた人

僕の二人目の仲間

ことぶき みさき
琴吹海咲

彼女の能力名は

『ノイントルード
絶対禁止』

五話 『受け入れるんだ』（後書き）

（過負荷の説明）

『ノイストルード
絶対禁止』

自分が拒絶したものを遠ざける能力

物、人、動物、植物、液体、気体、

物体、嫌なものは問答無用で遠ざかせる

今はまだ制御が出来ておらず、

少しでも嫌と認識してしまつと遠ざけてしまつ

そのため、琴吹は”机”などの自分の

周りにあつたものを無意識に遠ざかせてしまつた

六話 『これが日常だぜ?』 (前書き)

今回は日常パートです

ちなみに今回をもって過負荷の募集を終了させていただきます

沢山のアイデア、本当にありがとうございます

六話 『これが日常だぜ?』

あれから一週間

至って普通な日々が続いていた

僕も大人しく学校に通えているし、

海咲ちゃんもあれからも学校には登校してる

まあ敦ちゃんは未だに学園都市を彷徨っているけど

彼曰く、「誰がそんな面倒なところに行くかよ」だそうだ

それにあれから一人も過負荷が見付かっていないんだ

まあ初日で二人も仲間に来たし、大丈夫かな?

負運性の敦ちゃんと絶対禁止の海咲ちゃん

この過負荷勢力にはこの二人にリーダーになってもらおう

僕はリーダーというよりも下っ端ってイメージだし

「おい球磨川先輩」

「『ん?』『どうしたの敦ちゃん?』『」

「どうしたって、こんなことやっててもいいのかよ!」

こんなこと、って失礼な

僕は今、部屋の布団に座りながら悠長に
ジャンプを読んでいる

今週のは楽しみだったんだから、
別にいいじゃないか

「別にいいんじゃないの」「毎日他の同類を
探し続けるとノイローゼになるぜ？」
マイナス

流石に僕も疲れを『無かったこと』にはしたくないし

それ以前に嫌なことを全部『無かったこと』に
したら過負荷の無駄使いさ

そんなのに頼ってちゃいざという時に体が鈍っているかもしれないし

「でも、だからってこんなダラダラしてていいのかよ！
超能力者を皆殺しにするっつっても具体的にはどうやって
この何万という超能力者を全員殺すんだよ！」
エリート

あはは、大抵の人はこう思うだろうね

頭の良い人はウイルスとかをばら撒けば
どうにでもなるって思うけど、それだと
無能力者まで殺すことになってしまう

僕たちは弱い者の味方だ

最低が最強に勝つには、これしか方法が無い

「ほオ、そういうことかよ。でも、本当に俺達でレベル5共に勝てるのか？」

「負けることしか出来ない俺達に？」

「『まあ、事実僕たちは負けることしか出来ない』でも、一つ忘れていないか？」

『これは殺し合いであって、勝負では無いんだ』

『なにも、勝者が生きて敗者が死ぬわけじゃない』

『時には敗者が生き、勝者が死ぬ場合もある』

『だから僕らは、その場合を起こせばいいんだよ』

世の中にはこんな勘違いが生まれているんだ

勝者こそ生き、敗者こそ死ぬ

なら勝利のために命を捨てた連中はどう説明する？

命を捨ててまで相手を改心させた連中はどう説明する？

出来ないだろうね

僕たちは過負荷なんだ

醜い勝利と、美しい敗北こそ過負荷だほくたち

「そうですよ。過負荷わたしたちには勝つ必要なんてありません。ただ相手を殺せさえすれば、それで十分私たちの勝利ですよ」

僕たちの部屋に入ってくるのは、海咲ちゃん

合鍵を渡してるから彼女は自由に行き来できるからね

まあ、男だけの部屋なんて入りたくないだろうけど

「ったく、ノックぐらいしろつつつてるだろうが、このクソガキ」

「貴方こそ、いつまで球磨川さんにタメ口で話すつもりなんですか？

気安く球磨川さんと話すなんて、行儀がなっていませんね」

「ンだとてめえ！ 戦やんのかあア？」

ちなみに敦ちゃん和海咲ちゃんは仲がかなり悪い

いつも言い争いなどをしてる

まったく…二人共かわいい後輩だけど、

こればかりはどうしようも無い

「『二人共やめてよね』敦ちゃんには

こうやって話してもらいたいんだよ』彼に敬語なんて似合わないと思うし』それに、僕はそんな高位な人間

じゃないよ』 『ただの貧弱な人類最低さ』^{マイナス}」

「ほら見る！ 俺に口出しするんじゃない」

「『敦ちゃんも』 『彼女にはこの部屋の合鍵をあげたんだから、実質この部屋は海咲ちゃんの部屋でもあるんだから』」

僕がこう言つと、さすがの敦くんも押し黙ってしまった

まったく…この子たちはなんで仲良く出来ないんだろう？

まあ過負荷だからそんな簡単に行くとは思っていないけど

「『そついえば海咲ちゃん』」

「なんですか？」

「『君つてまだ一年生だよ？』」

「え？ はい、そうですけど？」

海咲ちゃんはこの中で最年少の高校一年生だ

これから頼むことは、そんな

海咲ちゃんにしか出来ないことだ

「『君のクラスの中に、ツンツン頭の子が居るだろ？』」

「ツンツン頭？ …上条くんのことですか？」

「『そうその子』 『実は君に、彼を調査して欲しいんだ』」

僕の言葉に彼女は意味が分からないのか
首を傾げていた

「調査…ですか」

「『うん』 『同じクラスの君になら、簡単だろ？』」

僕は二年も年上だから迂闊に一年のクラスには入れない

毎日一年のクラスに行つて海咲ちゃんと会つてたら、

僕はロリコンかなにかと勘違いされちゃうしね

人類最弱つて呼ばれるのはいいけど、変態だけはカンベンして

「出来ますけど、彼になにかあるんですか？」

「『実は初めて君に会つた時、僕は彼に

肩をつかまれたんだよ』 『その時に僕は変な

気分になつたんだよ』 『まるで、彼に掴まれている

時だけ過負荷マイナスが消えていたような感じだった』」

「『過負荷が消えた！？』」

海咲ちゃんと敦ちゃんは驚きの声を上げる

通常、過負荷っていうのは

生まれ持ったスキルだ

某一京以上ものスキルを持つインフレ野郎
と交換でもしないと、普通は手放せない

そんな中、彼に掴まれているときだけ無くなっていた

明らかに異様だ

彼の能力を突き止めたい

いわば僕の好奇心みたいなものだよ

「過負荷をも打ち消せる能力なんて…」

「球磨川先輩の大嘘憑き並の出鱈目さじゃねえか」
オールマイクシヨン

「『そう』 『超能力なのか、過負荷なのかは分からないけど』

『少なくともどちら側でもない能力を持っている』 『海咲ちゃんには
その実態を突き止めてもらいたい』 『出来るかな?』」

「も、勿論です! 球磨川さん自らの

頼みなんですから必ず突き止めてみせます!」

あはは、頼もしいね

海咲ちゃんは敦ちゃん以上に僕を慕ってるっぽいし

なんでだろう?

ま、協力的なのは救いさ

「『あ、でも襲つたりとかはしなくてもいいからね?』
『彼、結構正義感が強そうだったから自分で勝手に巻き込まれてく
れる
と思うし』」その時に観察でもすればいいんじゃないの?』」

彼は困っている人を放っておけない正義だからね^{プラス}

「分かりました」

「おいおい、俺に頼み事はねえのかよ?」

さっきまで置いてけぼりになってた敦ちゃんが
クレームを付けてくる

まあ、彼はあまり他人との関係が無いから
頼める幅が細いんだけど

「『敦ちゃんには引き続き他の過負荷を
探しててくれ』」見つけたら勝手に勧誘してもいいよ』」

「またその仕事かよ…」たく、俺だって暴れたいんだよ」

「『その時はどっかの不良にでも
喧嘩を売ればいいじゃないか』」風紀委員に
文句を言われると思うけど』」

僕みたいに風紀委員に目をつけられると、
迂闊に行動できなくなるよ?」

僕だってこれまで何度他人を螺子伏せたいと思ったことか…

「血の気の多い人ですね、貴方は。球磨川さんに迷惑ばかり掛けないで、偶には役立つことの一つはやってみてくださいよ」

「ふざけるな琴吹！ なんだったら厄介者のお前を始末してやるよ！ そうすりゃ俺に役立つしなア！」

「フ、貴方なんて私に指一本も触れられませんよ」

「だったら試してみるか、あア？」

同時に二人が殺気立ちながらにらみ合う

はあ、まったくカンベンして欲しいぜ

「『二人共、喧嘩なら外でやってくれ』」

だが、そんな言葉には耳を貸さず、この狭い部屋で殴り合いが勃発した

まあ殴り合いと言っても、

敦ちゃんが一方的に殴られてるだけだけど

「てめえ！ 卑怯だぞその能力！」

「卑怯で結構です。私は過負荷なんですから」

すると、後ろに後退していた

敦ちゃんの背中が壁に当たる

その衝撃で棚の上に置いてあった

古いダンボールや本などが全て海咲ちゃん

に向かって落ち、ガンガンと後頭部を直撃した

「はッ！ 運悪くさっきの衝撃で落ちてきたらしいなア！

そいつア不運だったじゃねえか、えエ？ 琴吹？」

「くッ！ 私が拒絶しないとイケないのを知ってて…！」

「拒絶しねえと弾くことは出来ねえよなア？」

二人共、喧嘩はいいけどせめて外でやって…

すると突然、一本のはさみが僕のジャンプに向かって落ちてきた

それは運悪く先から落ちてきて、僕の本に大穴を開ける

しかも、丁度運悪く本を固定している

箇所を切り、本がバラバラになる

「『……………』」

無言でバラバラになった途中まで読んでいた

ジャンプを目視する

それを他所に、二人はまだ喧嘩中だ

「殺し…や…！」

「やれるもの…てみて…！」

なにか言い合っているが、僕の耳には入ってこない

「「なツ!?!」」

驚愕の声と共に、二人は

何本もの螺子で服を壁に螺子付けられている

「『ねえ二人共々』 別に喧嘩はいいけどさあ〜』」

朗らかな声で、僕は二人に話しかける

「『僕の読書の邪魔はしないでくれるかなあ〜!』」

何本も細長い螺子を指に挟みながら、

少しずつ彼等に歩み寄る

「ちよつと…待ってくれよ球磨川先輩！」

「そ、そうですね！ 私たちが悪かったです！」

そう、君達が悪かったんだ

つまり

「『僕は悪くない……』」

「じ、じ、わああ……」

「ぎゃあああ……」

六話 『これが日常だぜ?』 (後書き)

色々やんちゃしてしまった主人公(笑)

ちなみに当麻の調査は描写はあまりしないつもりです

いや、番外編で書くかも?

七話 『はあ…夏樹』 (前書き)

明日の更新は無理っぽいです

ちなみに今話は急展開

七話 『はあ…憂鬱』

放課後、いつも通り三人で集まってる

昨日の事件から二人が僕に冷たい気がするんだ。
さつきから全然こっちを向いてくれないし、僕とも
目を合わせてくれない

なんでだろう？

僕、嫌われちゃったかな？

「『おい！』 今日三人で出掛けようか』」

たまには友達っぽいこともやってみたいしね

だって、僕たちは仲間であると同時に
友達同士だろ？

こつというのは大事だと思うんだ

「出掛けるって、何処へですか？」

「『ま、適当に行こうよ』 歩いてれば面白そうな場所も見付かる
と思うし』」

ゲームセンターやボーリングぐらい

ここにはあるんじゃないのか？

それどころか最新のが楽しめるし

流石は科学の街

「はッ、引きこもりのためえには理解できねえだろうな。

ただブラブラと学園都市を彷徨ってるだけでそれなりに楽しいんだ
ぜ？」

「引き籠もりなどではありません。シャイと言ってください」

「同じようなもんだろ！」

ああ、うるさいなあ

この二人は会話をする度に喧嘩になるね

僕の苛立ちが通じたのか、言い合いを

やめる敦ちゃんと海咲ちゃん

最近もの分かりが良いね

急にどうしたのかな？

「『わあ、流石は学園都市』『色々あるね』」

外に出て適当に彷徨っているんだけど、
これがまたカラフルで電気がピカピカ光ってる

ゲームセンター、ファミレス、ショッピングモール、
デパート、その他色々

放課後の学生達で辺りは溢れていた

夕方な分、部活の無い帰宅部の
子にとっては遊ぶ時間なのかな？

これはまた賑やかだ

「球磨川さんは学園都市に来たばかりなんですか？」

「『先週ここに来たばかりなんだよ』 『だからこの
文化や常識とかが一切分からなかったんだ』 『そういうところは
よろしく頼むよ？』」

この学園都市の名物とかに行きたいなあ

まだ観光なんてまったくしていないし

旅行気分だよ

「それならゲームセンターとかどうだ？ 学生と
言ったらゲーセンだろ？」

へえ、それはいいね

でも敦ちゃんは学生じゃないよね？

まあ敦ちゃんは始めて会ったときから制服を着ていたし違和感は無いけど

着替えないのかな？

僕もいつも同じ学ランを着ているけど

ちなみに学校に通ってからも

この世界に来てから着ている学ランを使用しているんだ

捨てるのはもつたいないし

「『いいねえ』『うん、とても学生っぽくて
プラス幸せ染みているよ』『じゃあ早速行こうか』『」

目的地を決めた僕らはそのまま歩き出す

バスとかには乗らないで、この学園都市を見回りながらノンビリと行こうか

その方が僕も地理を学べるしね

「『ちなみに二人のお勧めは？』『」

「俺はガンシューティングゲームがお勧めだぜ！」

良い笑顔で僕に言ってくれる

相変わらず攻撃的な趣味だね

戦闘狂って実際に居ると気持ち悪い

「私は音楽系のゲームがお勧めです」

逆に温厚(?)な海咲ちゃんは至って

平和的な音楽ゲームがお勧めらしい

太の達とかかな?

女の子っぽいところもあるじゃないか

「おいおい、なんでそんなもんを球磨川先輩に勧めんだよ!」

さつきは大人しかった敦ちゃんが海咲ちゃんの提案が気に入らなかったのか、喧嘩腰で怒鳴る

「なにをお勧めしようが、私の勝手です」

「でも球磨川先輩がそんなもんに興味持つわけねえだろ!少しは頭を使えよ馬鹿野郎!」

おいおい、僕はどんなイメージを持たれてるんだよ?

僕はこれでもかなり得意だという自身はあるぜ?

まあ自分でも負完全って名乗ってるから

そんなイメージは持たれないと思うけど

「一応は教鞭を受けているつもりです。少なくとも貴方みたいな単細胞よりは学力や知力は上と自重していますけど?」

ワオ、海咲ちゃんって何気に毒舌だよね?

「んだとてめえ! ぶっ殺すぞ、あア?」

「殺せるものなら殺してみてくださいよ。ま、貴方には無理だと思えますけど」

「上等だ! てめえのそのちっこい頭を俺が握り潰してやるよ!」

道のと真ん中で睨みあう二人

まったく…憂鬱だ

仲良くしてくれないかなあ…

「『喧嘩するんなら連れて行かないよ?』『二人も偶には仲良く遊ぼうよ』『同じ過負荷なんだから』」

しばらく睨みあった後、お互いソッポを向く

敦ちゃんは舌打ちをし、海咲ちゃんは僕の方に少しだけ寄る

世話のかかる子達だ

「『お、着いたよ』 『さ、二人共』 『機嫌直して思いつきり遊ばうぜ！』」

無理矢理テンションを上げて一人中に入っていく僕

それに少し遅れて二人が店に入ってくる

「『わあ、いつぱいあるんだね』 『流石は世界最先端の技術だ』」

元の世界からは考えられないようなぐらい
高性能のゲームが沢山並んでいた

僕にとっては最高の遊び場さ

お金だつて初日にあの男の子たちに
親切に分けてもらったし

「ここはこの学園都市では特に人気の
場所で、毎日多くの学生達で賑わっています」

海咲ちゃんがご丁寧に説明してくれる

ゲームも安く、食事もここで
済ませることからかなり人気らしい

正直並ばず入れたのはラッキーだ

「『あ、これやるじよ』」

僕が指差したのはコインを入れると
写真が取れる、いわばプリクラ的なものだった

ま、最初は記念写真でしょ？

「『記念に写真撮影でもしようぜ?』」

「いきなりプリクラって、球磨川先輩らしいっちゃらしいが…」

「女の子みたいですね…」

そこ、気分を台無しにしない

「『ほら入って入って!』」

無理矢理二人を中に入れて、コインを入れる

すると、何回か音を鳴らした後、シャッター
の準備の合図がした

ポジションは僕が真ん中、敦ちゃんが
右で海咲ちゃんが左

僕は二人の肩に手を回して笑顔

敦ちゃんは不器用で照れ臭そうな笑顔

海咲ちゃんは女の子らしくかわいらしく笑顔

過負荷のはずなのに三人とも笑顔って、

他の過負荷から見れば滑稽な光景だね

写真を撮り終わり、現像した
ものを皆で見る

「へえ、上手く撮れてるじゃねえか」

「さすがは学園都市屈指のゲームセンターですね」

二人も満足みたいだ

「『あはは、写真の中じゃ二人共仲良さそうじゃないか』
出来れば普段もこんな感じで居て欲しいんだけど…』」

「寝言は寝て言え」

「寝言は寝て言うてください」

声を揃えて二人共拒否している

こういう時だけ何気に合わせないでくれよ

「『ああ楽しかったなあ』」

ゲームセンターから出ながら僕は満足気にそう言う

空はもう夕焼けに染まっていて、
入ってから結構長い時間が経過している

夕方になつたにも関わらず、
部活を終えた学生が加わつたのか
さっきより全然人数が多かつた

色々といっぱい遊んで、生まれて始めて友達と仲良くできた
本当に楽しかつたよ

「次はもうどうします？ 時刻は遅くなっていますが」

「『じゃあ適当なファミレスに行こうよ』 『そこで
ご飯でも済ませて返ろうか』 『海咲ちゃんは僕たちが寮まで
送るから安心していいよ？』」

女の子一人で家に帰らせるわけにはいかないし

海咲ちゃんは結構可愛いんだし、たとえ
過負荷だろうと心配なんだよ

「そんな…私一人で帰れますって！」

「『これは僕の自己満足と思ってくれよ』
『その方が僕も安心して帰れ』 『…！』」

突然後ろに気配を感じ、僕は

一旦会話を止める

ただの気配ならいつも感じ慣れている

僕らに対しての軽蔑と恐怖の眼差し

それならまだ分かる

でも、この視線には、殺気が含まれている

それも明らかに僕らを殺すつもりだ

いや、僕を殺すつもりだ

「『ゴメン敦ちゃん』『先に海咲ちゃんを連れてファミレスで待っていてくれないかな?』」

「はい? いきなりどうした、ッ!」

どうやら敦ちゃんも気付いたらしい

「一人で大丈夫か球磨川先輩?」

「『安心して』『これでも曲者の過負荷の一応リーダーだぜ?』『簡単に勝つ気は無いよ』」

いかに胸糞悪く負けるかが過負荷だ

「『敦ちゃんは死んでも海咲ちゃんを護ってくれ』『現在じゃ君以外に戦闘タイプは居ない』」

「了解したぜ。じゃあ、頑張ってくれよ球磨川先輩」

「『がんばる』」

そう言った途端、僕は近くの路地裏へと駆け出した

それとは反対の方向に敦ちゃんと海咲ちゃんは走る

案の定、あの視線は僕の方へと向かってきた

しかも一つじゃない、四つぐらいの視線だ

路地裏に入りしばらく走ると、行き止まりに差し掛かる

あはは、どうやら僕はここまでみたいだね

ゆっくりと後ろを振り向く

「『やあこんにちは』 『僕になにか用かな？』」

目の前には、一人の小学生ぐらいの女の子

殺気の正体って、これか？

「貴方は超気付いてるんじゃないんですか？ これでも殺すっていう雰囲気は超出してるんですけど」

超って、そんなオーバーな表現…

「『君みたいな子に殺されるほど僕は最弱じゃない…よね?』」

「超疑問符になってますよ?」

どうだろう…

人類最弱の過負荷でも、流石に小学生よりは強いよね?

どちらかと言うとあまり自身が無いけど、こんな貧弱体質

「でも、こちらを貴方を殺せって命令なんで…

超殺しますよ?」

突然、彼女の顔が目の前まで迫っていた

さっきまで数メートルは先に居たはずだ

なのに、直ぐ目の前まで迫っている

「『えッ?』」

そのまま吸い込まれるように彼女の拳は僕の顔面に食い込まれた

こんな小さい子からは考えられないような
パワーにより、僕はまるで人形の如く吹き飛ばされた

「『ちょ…』 『そんな小さいのにこんな
パワーって反則だろ…』」

「そんなこと言っても超余裕そうですね」

まあそりゃ余裕はあるよ

「『だいじょーぶ』 だって君の努力なんて、
僕がぜーんぶ『無かったこと』にするから』」

オールマイクッション
大嘘憑きにより、傷がみるみる内に『無かったこと』になっていく

「ッ！？（治癒能力？）」

さつきまで顔面が思いつきりヤバイことになっていたのに、
直ぐにまた無傷になったことにより女の子は驚いていた

さあ、今度はこっちからも反撃だぜ

僕は両手に螺子を構える

「『君を社会的に殺してやるよ』 『もちろん、
てっぺん過負荷的にね』」

満面の笑みでそう言う

七話 『はあ…憂鬱』 (後書き)

主人公を襲った人が誰なのかはバレバレ(笑)

八話 『不愉快かなあ〜!』 (前書き)

二日も空けてしまってすみません

プライベートが忙しかったです

八話 『不愉快かなあ〜!』

血塗れになりながら、僕は路地の壁に
寄り掛かるように座っている

それも、今回は返り血ではなく自分の血

両手に持っている螺子に力を加える
ことが殆ど出来ないまでに、僕は弱っていた

立ち上がるも足が疲労と痛みで震えている

破けている服からは血が滲み出していた

そんなボロボロの状態にも関わらず、
目の前の女の子は涼しそうな表情で無傷だ

「貴方、超弱いですね」

「『へッ…伊達に人類最弱を名乗っていないぜ』」

大嘘憑きは使っていない

いや、使っても無駄って感じかな

幾ら大嘘憑きで傷を無かったことにしても、
直ぐまたボロボロにされる

何回も使って、ボコボコにされていくうちに
気付いてしまった

つまり、僕は詰まれたのかな？

却本作りを使えば話は別だけど

「『君、女の子なのにとても力が強いね』『さっきから
吹き飛ばされてばかりだよ』」

「そっちが超弱いからじゃないんですか？」

中々に響くような言葉を言ってくるじゃないか…

って僕に心なんて呼べるものは無いか

「『僕の弱さを甘く見るなよ』『その気になれば
蟻一匹に殺されることも出来る』」

「なにそんなことを超威張ってるんですか…」

僕の発言に呆れると、再び彼女は

目の前まで迫ってくる

蹴りを僕の腹に打ち込み、そのまま

僕は壁に激突する

「『う…ゲホッ…』」

咳に混じって血を吐き出す

さっきのだけで肋骨が数箇所折れたかな？

これは流石に無かったことにしないと不味い

「『だから無駄だつて』 『君の努力なんて、

僕にとつちや労力を無駄にするだけでしかないんだ』」

「…またその治癒能力ですか。超厄介な能力ですね」

「『治癒能力？』 『あは、それは勘違いだぜ小学生』」

『僕みたな屑マイナスにそんな前向きな能力が備わるはずが無いだろ？』」

「…治癒能力じゃないんですか？」

「『おいおい、さっき言っただろ？』 『治癒能力なんて

お門違いだぜ』 『まあ、超能力者プラスの君には最低マイナスの僕なんて理解できないと思っけど』」

僕の発言に困惑し始める小学生ちゃん

プラスがマイナスを理解するなんて、

それこそ荒唐無稽だぜ

僕らは”マトモ”じゃないんだ

論理的な考えじゃ到底理解できない

「例えどんな能力でも、戦闘で役立たなきゃ

超役立たずですよ」

再び僕の顔をぶん殴る小学生

骨が碎けるんじゃないかって思わせる

ぐらい拳が顔面に食い込むと、僕を遠くへ
吹き飛ばしていった

さっきからずっと吹き飛ばされるのは疲れるぜ

まあ、最弱だからこれは逆らえないけど

「しかし…アンタ超弱いですね。なんでこんな
奴なんか暗殺の依頼が…？」

僕を暗殺って、なんで僕が狙われなきゃいけないんだよ

僕はまだ何もするつもりは無いんだけど

「これなら放っておいてもなんも害になんて
超なんないと思うんですよ。ただの超雑魚ですし」

へえ

「え!？」

その瞬間、彼女の周りに無数の螺子が突き刺さっていた

さっきとは考えられない攻撃に、
小学生ちゃんは一ひどく驚愕していた

「別に貶されるのは気にしない」いつものことだし』『でも…』『僕はともかく他の仲間の目的を馬鹿にされるのは』

『流石にちよつと不愉快かなあ〜!』

自分でも分かるぐらい僕は怒りの表情を露にしていると思う
僕が貶されるのはまだいい。耐えられる

でも、友達の目標を貶されるのは、
ガマン強い僕でもすこ〜し限界力ナ?

「くっ…! (なんなんですかこの人!? 超怖いんですけど!?)」

僕の急な表情の変化のせいなのか、少し怖がりながら
後退りしている小学生

「『どうしたんだい馬鹿力?』

『急に反撃されて怖くなったのかい?』

『人類最弱の僕に怖がるなんて情けな〜い』

さらに周りにも螺子を突き刺し、逃げ道を塞いだ

幾つもの巨大な螺子が列を成し、
行く手を阻む壁のように通せんぼしている

「『あはは』『逃がさねえよ』『僕はこつ見えても
結構優しいんだぜ?』『謝れば今ならまだ間に合ったりするかもよ
?』」

「超謝りませんよ。球磨川みたいな人に
謝ることなんて、私の人生で超恥になるんですよ」
間を居れず即答してきた

気が強そうに言ってるけど、僕には分かるぜ?
君は僕にかなり怯えてる

僕のが気持ち悪くて、気味悪くて、
怖くて、憎くて、みっともないと思ってる目だ

そんな目こそ、僕は一番慣れていて、一番大嫌いな目だ

「『そうか』『じゃあ教えてやるよ小学生』
『過負荷相手にルール無用で戦う愚かさを…!』」

徐々に彼女に歩み寄る

僕の手にあるのは一本のマイナス螺子

僕がそれを構えると、その螺子は

急に刀身代まで伸び始めた

手に収まったのは、一本の長い螺子

これこそ僕の第二の過負荷、否

僕が禁じた過負荷

『ブクメーカー
却本作り』だ

目の前までたどり着くと、僕は歩くのをやめる

彼女は恐怖で動けないのか、抵抗すらしていない

たとえ暗殺者でも、まだ子供か

「『君みたいな女の子を過負荷こいひずのは

心が痛むけど』『許してね?』」

「球磨川に心なんかあるんですか?」

おいおい、最後の最後で痛いところを突いてくれるじゃないか

そつえばなんで僕の名前を知ってるんだらう?

まあ僕って彼女の暗殺対象だから

名前ぐらい調べてると思うけど

「『あばよ』『過負荷として元気で

』」

突然、通せんぼしていたはずの螺子が全て弾け飛んだ

まるでダンボールのように無造作に吹き飛ばされる螺子に、僕は思わず却本作りを貫かせるのを忘れてしまった

その隙に彼女は僕を殴り飛ばし、距離をとる

おいおい、一体次から次へなんだよ？

僕、幾らなんでもこんなに恨まれることはしてないと思うんだけど…

煙が晴れると、さらに三人の女の子らしき影

僕ってこんな人気者なのか？

あ、”人気者”と書いて”あんさつめたいしよつ人気者”って読むか

「麦野…」

中央のリーダーっぽい子に向かってそう言う

どうやら彼女がリーダーらしい

高校生ぐらいかな？

僕と同じか少し下だね

「まったく…一人で任せたのに、なに追い詰められてるのよ」

「だってこの人超卑怯なんですもん。傷とかダメージを全部一瞬で回復されるんですよ」

麦野さん（仮）が小学生ちゃんに呆れていると、すかさず小学生ちゃんは反論している

仲間がまだ三人も居たのかよ

これじゃあ彼女を過負荷マイナスにしてもまだ三回も戦わなくちゃいけないのかよ

疲労を『無かったこと』にすればまだ分からないけど多対一はまだ慣れていないし

「『おいおい、こんな展開は週間少年ジャンプだけにして欲しいなあ』『理不尽なんだけど』」

「アンタみたな漫画脳に人権なんて無いでしょ？」

全世界の漫画愛読者に謝ってくれ

「でも、アンタのその能力、見させてもらったけど、見るからに回復タイプの能力よね？」

なんで皆は僕の大嘘憑オールフイクションきを見ると回復能力だと思うのかな？

まあ、一番多く使用しているのは傷を『無かったこと』にすることだし、当たり前かな？

「『何回も言わせないでくれよ…』 僕の能力はそんな前向きな能力じゃない」

「まああなたの能力がなにであろうと…」

一瞬

まさにそれぐらいの速さで白い閃光が僕に向かって打ち出された

それは瞬く間に僕を飲み込み、僕を吹き飛ばした

「『え？』」

「回復させる暇さえ与えなきゃ、そんなの大したこと無いわよ」

血塗れな僕に向かってそう言う

回復暇さえ与えなきゃ、ねえ

これは一回死んだかな？

あの能力から見て今回は死体の破片も

残らないと思うから、生き返るのに時間は掛かるけど

「死ぬ最後に名乗っておくわ。学園都市レベル5、メルトダウン原子崩しの
麦野。レベル5に殺されるんだから、死んだ後は言い訳にでもなる
んじゃないの？」

心に傷付くことをどうも

やっぱり僕はレベル5には勝てないのかな？

まあ、少なくとも今はだけど

それに、レベル5の素性を一人突き止められたんだ

それで得さ

「『んじゃ』『さよなら』『』」

「それアンタの台詞じゃないでしょ」

再びあの閃光が僕に向かって放たれる

それは血塗れの僕を消し飛ばす

そこで僕の意識は途絶えた

~~~~~

「死亡を確認するまでもないわね」

麦野は死体となった球磨川を見てそう呟く

ただの路地だった辺りは血飛沫に

包まれ、地獄絵図と化していた

球磨川の死体は無残にも体中がバラバラに吹き飛ばされていた

腕や足といった肉体の部分などは判別できないほどぐちゃぐちゃにされ、唯一残ったのは殆ど吹き飛ばされている胴体だけ

そんな惨状にも、”アイテム”の四人は得に動揺もしていない

「暗殺完了。目標、球磨川雪の死亡を確認、っと。はい、これでお終い。行くわよ」

殺人現場に長く居座るほどアイテムの四人は馬鹿ではなく、すぐさまこの場を後にする

「なんだよ…これ…？」

それから直ぐ、現場へ駆けつけた木更津敦はその惨状を見て唾然としていた

琴吹海咲をファミレスへ送った後、援護へと駆けつけた木更津だが、時は既に遅し

無残に死体となった球磨川を見下ろす

「おい…マジかよ…なあ…？」

ヨロヨロと球磨川だった死体に歩み寄る

「そんな、ふざけるなよ！ おい！球磨川先輩！

アンタ、死なないはずじゃなかったのかよ！ オールマイクシヨン 大嘘憑きは死をも『無かったこと』に出来るんじゃないのかよ！」

一向に生き返る素振りを見せない球磨川に向かってそう叫ぶ

「球磨川先輩…」

応答を見せない球磨川に、木更津は膝をついた

「球磨川先輩イ！！！」

~~~~~

「『ここは…何処かな？』」

一方、死んだ球磨川はというと

「『またここか』」

周りは真っ白な世界

天井や壁の存在すら疑問視される
ほど純白に包まれているような世界

球磨川が転生する前に居た部屋だった

「またここで悪かったかよ、えエ？」

「『久しぶりだね、赤髪さん』」

目の前には長い赤髪を持ち、
少々苛立ち気味の荒い口調の持ち主

「久しぶり、じゃねえよ！ お前なにやってくれてんだよ！」

球磨川に向かってそう叫ぶ赤髪

怒りを露にし、球磨川の胸ぐらを掴んでいた

「『おいおい、なにをそんなに怒ってるんだい？』」

「てめえ、送る前に言ったこと忘れたのかよ！ あっちの
世界で起こす行動一つでてめえの天国行きと地獄行きを決めるんだ
よ！」

地獄行きと天国行き

それぞれにポイントがあり、0以上であると天国、
0以下であると地獄と決まっていた

「『それがどうしたの？』」

「どうした、じゃねえよ！ てめえ、ここままじゃ地獄行きだぞ！」

「『？』『なんで？』『』」

「なんでつて、窃盗に暴行に殺人未遂！ どれもてめえの点数をジェットコースター並みに降下させてんだよ！」

自身の点数が危うい状況になっていると聞かされても尚、球磨川はあっけらかんな様子をやめなかった

余裕というよりも惚けの色が強い球磨川の間抜けな表情に、赤髪は益々怒りを増幅させた

「『別に点数が減ろうと、僕は自分のやり方を変えるつもりはありません』『』」

「ふざけやがって！ まったく、とんだ見込み違いだぜ！」

「『いや、僕は悪くないよ』『』だって、たとえ他人が悪と認識しようとして』『』」

『過負荷のあの子たちにとっては正しいことなんだぜ？』『』」

「『…！？』『』」

球磨川の発言に言葉が詰まる赤髪

正義と悪

一見明白な違いを持つているその二つの概念は、
実際はかなり曖昧な関係を持っていた

他人から見れば正義な行為は、
別の人にとっては悪に感じられる

逆もまた然り

故に自分が正しいと信じ、人間は戦争を行う

「『誰が正義と決めて、誰が悪と決めるんだ？』

『僕にその基準は分からない』『でも、少なくとも
僕にとっては自分の行いは正しくは無いけど、悪とは
思っていないよ』『」

「てめえ、本気らしいな」

「『本気じゃなかったらここまでしないさ』

『おっと、そろそろ生き返る時間だ』『それじゃあ
赤髪さん、また会おうね』『」

白い空間から蒸発するように消えていく球磨川

そんな彼を、赤髪はただ見つめているだけだった

「…とんでもねえ奴だ」

最後にそう彼女は呟いていた

~~~~~

「なッ!？」

死体現場で啞然としていた木更津は驚愕の声を上げた

さっきまで血塗れだったこの路地裏は、

肉塊で溢れていたこの路地が、まるで何事も

無かったかのように」元の路地に戻っていた

「『あれ?』『どうしたの敦ちゃん?』」

そして、木更津の目の前に立っているのは、

さっきまで無残な死体となっていた球磨川だった

「く、球磨川先輩!？」

「『なにをそんなに驚いているんだい?』『この前も

言っただろ?』『大嘘憑きは死をも「無かったこと」に出来るって

」

あまりにも理不尽で現実離れした球磨川的能力に、

木更津はただ啞然としていた

「『まあでも今回は死体すら残ってなかったから

』生き返るのに時間が掛かっちゃったけど」

「…カンベンしてくれよ…心臓に悪すぎるぜ…」

無事戻ってきた球磨川を見て、木更津は

拍子抜けしたように地べたに座り込んだ

「『じゃあちよつとゴメンね敦ちゃん』 『僕、少し用事があるから』」

そんな木更津を他所に球磨川は路地を抜け出し、どこかへ歩き出す

「用事？ 用事ってなんだよ？」

「『そんなの決まってるだろ』」

そんな質問をする木更津に、球磨川はクルリと振り返り、笑顔でこう言った

「『僕をこんな目に遭わせたアイツ等に、報復しに行くんだよ』」



九話 『それが過負荷だ』 (前書き)

駄目文注意 (いつものことorn)  
( )

九話 『それが過負荷だ』

仕事を終えた”アイテム”の四人は、いつも行っているファミレスへと向かっていた

先ほど殺人を犯したにも関わらず、全員が涼しい表情だ

まるで殺した球磨川など既に忘れたかのように

「今回は珍しく超簡単な仕事でしたね」

「まあ、相手が相手だったから。なんで球磨川なんかに暗殺依頼が入ったのかしら？」

あまりに呆気無く死んだターゲット

実際に戦闘を行った絹旗にさえ一撃も決定打を与えていなかった

予想外の弱さ

誰一人と球磨川の危険性を理解している者は居なかった

「実は、あの球磨川にこんな噂があるんですよ」

「噂？」

「はい。あの超電磁砲に攻撃されたにも関わらず、無傷で立ち上がったそうです」

「無傷で？」

学園都市レベル5第三位、レイルガン超電磁砲

第四位の麦野より高位の存在であり、その実力は学園都市で上から三番目

それほどの能力者の攻撃を無傷で受けた

考えられないような内容に、麦野は呆れていた

「まったく…噂にも程がある。球磨川あの雑魚がそんな真似できるわけないでしょ？ あの回復能力は確かに異常だったけど」

鼻で笑いながらそう言った瞬間、後方から突如巨大な螺子が麦野に向かって放たれた

頭部ギリギリを通り過ぎた螺子は、そのまま壁に突き刺さる

突然のことに驚きながらも、戦闘には慣れてる

アイテムの四人は即座に警戒態勢に入った

「『回復能力じゃないって何回言えば分かってくれるかな？』」

後ろから歩いてくるのは、学ランを来た少々童顔の高校生

両手に持っているのは巨大な螺子

「く、球磨川!？」

人類最低、球磨川雪

先ほど惨殺されたとは思えないほど  
無傷且つ綺麗な笑顔で四人を出迎えた

「久しぶり四人さん」 『僕だよ』 「

「(こいつは私が自ら殺したはず! なんになんで...!?)  
あなたの回復能力、死からも回復できるってわけ?」

「『もう説明するのも面倒だよ』 『しょうがないなあ』

『特別に教えてあげるよ』 『僕のコレは、回復能力なんかじゃない』  
」

「ならなんだって言うのよ!」

もったいぶる球磨川に、麦野も段々とイラついた様子を見せる

嫌味に、子供の悪戯のように曖昧に答える球磨川

は、「『はあ』」と溜め息を吐いた

「『君が僕を殺したって事実を、無かったこと』 にしただけさ』 「

「は? ふざけんじゃねえよ!」

堪忍袋が切れたかのように激怒しながら

麦野は自身の能力を球磨川に向かって放った

「そんな戯言を訊いてるんじゃないやねんだよ！  
こっちが聞きてえのはてめえの能力についてだ！」

煙が晴れると、そこには無傷の球磨川が立っていた

攻撃が通用していないと分かると、麦野はさらに怒りを増幅させる

「クソがあ！」

先ほどの攻撃を軽く超えるような規模の閃光を球磨川に向かって放つ

くらえば一瞬にして死を与えられるような

攻撃が迫って来ているのにも関わらず、球磨川は笑顔で立っていた

「なッ!？」

だが、球磨川に当たる直前で、その閃光は掻き消されたかのように消えていた

「(演算ミスか? いや、私がミスするはずが無い。となると…) てめえ、なにしやがった！」

「『なにをつて』『僕はこの学園都市に来てから勉強をしたんだ』『超能力はなにか』『どうやって超能力者は超能力を発動してるか』『原理や成り立ち、使用の条件を調べて分かったこと』『それは、超能力が”演算”というもので成り立っているっていうこと』『」

「それがどうしたっていうんだよ！」

未だに言っている意味が分かっていない麦野に、  
球磨川は呆れたのか溜め息をもう一度吐く

そして、邪悪の笑みを浮かべながら驚愕の事実を告げた

「『君の演算を「無かったこと」にした』」

あまりにさらりと放たれたこの言葉

一瞬間き流してしまいそうなほどの戯言に

感じられるこの言葉は、超能力の常識を破るような発言だった

”演算を無かったことにする”

これはつまり、学園都市全ての超能力者を無力化できるという意味  
だった

「私の演算を…無かったことに…だと？」

「『そう』」

『「すべて現実を虚構にする」、それが僕の「オウルフィクション大嘘憑き」だ』」

現実を虚構にする

最低で、理不尽で、最悪の過負荷マイナス、大嘘憑きの能力

そんな球磨川の能力に、アイテムの四人は呆然としていた

全てを無かったことに出来るとはつまり、たとえ何回攻撃しようと、球磨川を殺そうと、それを無かったことにされるという意味

「『この能力って気をつけないといけないんだよね』  
『だって』 『気をつけないと世界そのものを「無かったこと」にしちやうから』」

あまりにも規模の大きすぎる能力だった

自身は起動スイッチを押して、離せば核爆発を起こせると言ってるようなものだった

世界そのものを『無かったこと』に出来る

つまり、その気になれば世界を滅ぼせるような能力を球磨川は持っていた

「『さて、反撃といこうか』」

両手の螺子を構えながら、球磨川はそう告げた

「ふ、ふざけるなア！」

麦野の原子崩しが球磨川に向かって放たれ、  
オフエンステーマー  
空素装甲を纏った絹旗が拳を振るう

フレンドは爆弾に火を点け、それを球磨川に向かって投げる

「アンタみてえな雑魚に私たちが負けるわけ」

だが、文章を終わらせることも無く  
彼女ら三人は地面に貼り付けられていた

細い螺子により全員の服が地面に縫い付けられ、  
動ける状態ではなかった

「『うん』 確かに僕は雑魚だ』 だから、弱さという弱さを  
知り尽くしている』 何処をどう攻撃すれば人間は死ぬとか』  
『そういうマイナスな面だけだけどね』」

フレンドが着火した爆弾は”着火という事実”  
を無かったことにされ、炎は消されていた

「『さて』 残りは君一人だね』」

ただ一人攻撃してこなかったアイテムの構成員を見つめる

ピンクのジャージを着た見るからに  
気ダルそうな人物

それに球磨川は少し呆れながらも、螺子を構えた

「くまがわのその能力は超能力じゃないの？」

「『超能力？』 『あはは』 『全然違うぜ？』 『よく分かったね』」

「くまがわからAIM拡散力場を感じない。だから超能力じゃない  
と思う」



「『僕はレベル0』『なんの能力も備わってない』『だってこの能力は』」

だが、文章を終わらせようとした同時に、  
滝壺の周りに幾つもの螺子が突き刺さる

「『あは!』『なに期待しちゃってるの?』『これは  
週間少年ジャンプのバトル漫画じゃないんだ』『僕の能力  
の本質を教えるわけないだろ?』」

「『でも大嘘憑オウルライクシヨンきの能力は教えてくるんだね』」

からかう様にケラケラと笑う球磨川に、滝壺は冷静な突っ込みを入れる

「『おいおい、中々痛いところを突いてくれるじゃないか』」

「それに、さつきからくまがわは実際に私たちに攻撃してない。  
まるで戦う気が無いみたいだ」

「『君、そんなに痛いところ突くのが好きなのかい?』『でも、  
ソレは事実さ』『今日の僕はとても機嫌が良いんだ』『そんな日に  
人殺しなんて嫌だよ』『僕はただ殺された報復が出来ればそれで良  
いし』」

そう言つと、球磨川は滝壺を後にし、地面に螺子伏せられている  
三人の場所へ行った

球磨川がたどり着いた瞬間、あの閃光が球磨川を襲う

それと同時に、地面に突き刺していた螺子が吹き飛んだ

「『さすがはレベル5』 『これぐらい簡単に抜け出せるよね?』」

「てめえ、絶対に許さねえ！ 殺してやる!!」

だが、球磨川は既に彼女に一度殺されていた

その事実をあえて突っ込まなかった球磨川だった

原子崩しを球磨川に放つが、再び当たる寸前で消える

「『だあかあらあ〜!』 『演算を無かったことにしてるから何回攻撃しても無駄だつて』 『まあ、永続的に能力が発動する超能力じゃこの戦法は無意味だけど』 『その証拠に小学生ちゃんには使つてなかっただろ?』」

「私って中学生なんですけど？ 超間違えないでください」

「『そんなの大差ないだろ』」

球磨川は螺子を構え、麦野は再び演算を開始する

怒りで球磨川の言葉は耳に入らないのか、演算を無かったことにされるのにも関わらず、高度な演算を開始していた

そして、両者が攻撃を放とうとした瞬間、パトカーのサイレンが辺りに鳴り響いた

今までの戦闘を目撃した一般人が通報したそうだと

「『おいおい、警察に御用つてのだけはカンベンしてくれよ』  
『じゃあねレベル5さん』 報復は出来なかったけど、それでも結構楽しかったぜ』」

もう一度風紀委員の支部へ向かうのは御免なのか、  
球磨川はサイレンを聞いて早々逃げ出した

「待ちやがれ！」

だが麦野は逃がさんとばかりに原子崩しを放とうとする

「むぎの。もう行かないと私たちもまずい」

たとえ暗部組織であろうと、殺人を犯している  
彼女らは同じく風紀委員とは関わってはいけなかった

目をつけられ、行動を制限されるとアイテムの四人でも不都合な  
ため

出来るだけ目立った行動を起こさないようにしていた

「ちッ、行くぞ！」

絹旗とフレンドの拘束を解き、球磨川と同じくこの場を後にする

「球磨川を徹底的に調べるぞ。次会ったら  
本当に殺してやる。能力で蘇生できないまでにな！」

殺意を球磨川に抱きながら、アイテムの四人は闇へと消えていった

~~~~~

「『お待たせ敦ちゃん、海咲ちゃん』」

僕は二人の待つてるファミレスにやっと着いた

色々巻き込まれて遅くなっちゃったけど、

まあレベル5の情報が一つ集まっただけでもいいよね？

「大丈夫なんですか球磨川さん？ 一度死んだって聞きましたけど」

「『うん殺されたよ』 『それなのに報復も

出来ないって、酷い話と思わないか？』」

普通は殺されると死んでるから報復できないんだけど

そこは過負荷のお陰だ

「球磨川さんが無事ならそれでいいですよ。まあ、

その単細胞が援護に間に合っていれば一度死なずに済んだと思いますけど」

「てめえを送るのに時間が掛かったんだろっが！」

どの道死んでたと思うけど

いや、それどころかもし敦ちゃんが間に合ってたら二人とも殺されてたと思うし

僕ら二人がかりでもレベル5には勝てないだろうし

幾ら僕が死に慣れていても、敦ちゃんにとって臨死体験は少し酷い

僕も仲間が死ぬのは嫌だし

「『もう済んだことはいいさ』『それより何か食べようよ』
僕、おなか空いちゃった」

さっきまで殺されそうになっていたのに、おなか減ったって言える僕も狂ってるんだらうけど

「なんで球磨川さんは笑ってられるんですか？ さっきまで殺されそうになっていたんですよ？」

海咲ちゃんも不思議に思ったのか、ごもつともなことを訊いてくる

「『それはね海咲ちゃん、僕が過負荷だからだよ』」

「過負荷だから、ですか？」

「『うん』」

『思い通りにならなくても』

『負けても』

『勝てなくても』

『馬鹿でも』

『踏まれても蹴られても』

『悲しくても苦しくても貧しくても』

『痛くても辛くても弱くても』

『正しくなくても卑しくても』

『それでもヘラヘラ笑うのが過負^{ほくたひ}荷だ』
「

九話 『それが過負荷だ』（後書き）

Q： 主人公の容姿って原作球磨川と同じなの？

A： 違います。童顔と学ランだけです。少し似てるなあって感じだと思えます

十話 『どっちつかず』（前書き）

ようやく応募された過負荷を登場させることが出来ました

現段階の状況で一番使用し易い能力を登場させただけなので、これから先にまだまだ多く出そうと思っています

かなり早めに投稿してくださった方、すみません

ちなみに六話で書いたつもりが上手く伝わっていなかったと思うので、もう一度書いておきます

今話をもちまして過負荷の投稿を終了させてもらいます

皆さん、ご協力本当にありがとうございます

十話 『どつちつかず』

僕たちは友達が少ない

唐突にこんなことを言ったけど、事実さ

僕と海咲ちゃんは確かにちゃんと学校も行ってる

授業はそれなりに聞いているけど、やっぱり

過負荷だから点数なんて言えたもんじゃない

成績も最低

でもなにより言いたいのは、僕たちは
友達が居ないんだ

まあそれは仕方の無いことだけど

僕はこの学校の制服ではない、別の
学校の学ランを着ているんだ

思い入れが出来てしまつて学校に無理に頼んだんだ

でも、その所為か部外者みたいになつて、
誰もあまり話しかけてこない

まあ、この括弧付けた喋り方も理由だと思つけど

そして、海咲ちゃんもまた友達が居ない

無意識に拒絶するあまり、近寄ってきた

もの全てを弾いていた所為か、誰も話しかけてくれないそうだ

今は僕が過負荷を制御できるように手伝って

コントローラブルになってるけど、それでもまだ

近寄ってこないらしい

過負荷だと気付かれていない以前は友達は普通に

居たらしい。でも、徐々にその異常性に気付かれて、

気が付いたら一人だったんだって

酷い話だよ

それに重なり、僕と同じく海咲ちゃんもまた

ここの学校の制服を着ていない

何故かこの学園都市は男子に比べて女子の制服に
妙に拘っている

男子はシンプルにワイシャツ

なのに女子は色々と色や生地などに

気を遣っているらしい

それなのに、海咲ちゃんは男子の制服みたいに

ワイシャツとスカートというなんともシンプルな姿だった

なんでも、制服は着るのが面倒臭いそうだ

でも普段から僕や敦ちゃんと同じで制服（？）姿だから他の服も買うのが面倒なのかな？

まあ、本人の自由だしいいよね

でもこうやって他の人とは違う格好をしてると、やっぱり部外者のような扱いをされる

別に友達が少ないのは苦じゃない

過負荷だし、慣れてる

でも、一番問題はこうだ

休み時間が暇でしょうがない

ボーッと窓から見える学園都市の景色を眺めるだけで一日中過ごしてるけど、そろそろそれも飽きてきた

せめて、気さくに話せる人を同年代に欲しい…

「ほら、全員席に着け！」

授業前、生徒たちが友達と話しているのを、教師が黙らせ席に着かせる

「球磨川！ お前もボーッとしてないでこつちを見る！」

「『はあ…』」

溜め息を吐きながら、僕は視線を先生に向ける

ちなみに三年のクラスの担任は初日僕の
身体測定を担当してくれたあのテンションの高い
先生だった

まあ、僕を気持ち悪がらない分気楽だけど

「転校生が来るぞ！ まだ学園都市に来て
直ぐだから仲良くしろ！」

教室がザワザワし始めた

僕には関係ないけどね

でも僕がついこの間転入してきたばかりなのに、
また転校生が来ても大丈夫なのかな？

ほら、クラスの人数とか

「入ってこい」

「はぁーい！」

とても元気な声が教室の外から聞えた

本当に純粹で、綺麗で、
幸せプラスそうな声だった

まるでこの世の悪党、殺人鬼、テロリスト、強盗、

社会主義者など知らないような、そこまでプラスな声

朗らかでも元気のあるその声の主は扉を開けて教室へと入って来た

「新しくこのクラスに入ることになった

清瀬真希きよせ まきです！ 皆よろしくお願いします！」

入ってきた転校生

女子であると同時に、容姿も良かったためか

男子の連中が小さくガッツポーズをしていた

そんな中、僕は窓の景色をポーッと眺めている

あのプラスのような声が聞えた瞬間、僕は思考をシャットダウンして再び窓を眺めるのに戻っていた

だって、幸せ者プラスになんか興味無いもん

この学校に居るってことはレベル0だし、

敵対対象でもない

つまり、本当に無関係者だ

多分あの子は皆から好かれるような人気者タイプだ

嫌われ者の人類最低マイナス、つまり僕とは正反対のような子だ

同じ過負荷かもしれないって期待した僕が悪かった

窓を眺めるのも飽きてきたから、ボンヤリと先生と
転校生のやり取りを眺めている

「席は」

先生が席を決めようとするが、彼女は
聞かずにどこかの席へ向かう

何故かゆつくりと歩いて、
僕の席の隣に腰掛けた

さっきまでボーっとしてた僕も意識を覚醒させて、
無表情だけど彼女をチラッと見る

「よろしくね」

無言で頷く僕

すると、教室がざわめき始めた

《おいおい、アイツの隣かよ…》

《球磨川の隣って、危ねえだろあの転校生》

《席替えないと拙いんじゃないの？》

そんな声がクラスメイトの中から聞える

いかにも近寄りたくないような最低な雰囲気マイナスを
出してる僕に、笑顔で近付いて隣の席に座ったんだから、

当たり前だよな

「全員静かにしろ！ 清瀬がそこがいいって言うんなら、お前等は口出しするな！ 授業を始める。起立！」

そんな感じで、今日の授業が始まった

「ねえねえ！」

授業を適当に聞き流して放課後、彼女は僕に声を掛けてきた

普段、筆記用具なんて机に仕舞ったままで出すことなんて無いから鞆すら持っていない

つまり手ぶらで僕はいつもこの学校に着ている

見るからにやる気が無い

そんな僕にも、彼女は省みなく、それどころか積極的に関わろうとする

僕は不思議でしようがない

「名前は？ 席が隣同士なのに、自己紹介もしてないのはおかしいと思うよ？」

関わりたくない人には嫌がらせ以外では喋りかけない僕なんだ

そういうところは黙認してくれよ

「『僕は球磨川雪』」

「ハハ、個性的な喋り方だね。もう知ってると思うけど、ボクは清瀬真希。少しお茶目な女子高生でえーす！」

僕、こういうタイプの人は苦手なんだ

なんというか、鬱陶しい

それより、初対面で僕のことを気持ち悪がらないし、この括弧付けた喋り方もただ”個性的”だけで済ませる彼女はある意味すごいと思う

「『じゃあまた放課後…』」

「いやいや！折角知り合っただから、一緒に遊びに行こうよ！」

面倒臭い人だなあ…

僕は帰ってジャンプを読みたいんだよ

今週は特に楽しみだったんだから

主に某異常生徒会長の漫画が急展開ばかりだし

「『分からないのか？』 『僕は人類最低だぜ？』 『そんな僕が、正反対の幸せ者である君と遊ぶのは』 『猿とナマケモノが一緒に居ると同じぐらい違和感があると思うぜ僕は』」

「まったく、堅い人だなあ君は。」「ぷらす」とか「まいなす」とか
は何かは知らないけど、ボクと君が遊んじゃいけない理由にはなら
ないと思うよ?」

「『君は別の意味で頭が堅いんじゃないのかな?』」

「それって何気にボクを馬鹿だつて言ってるの?」

「『そう聞えるなら訂正しよう』『君は馬鹿だ』」

「今度はハッキリと言っちゃったよ!?!」

あれ? いつの間にか僕は彼女と会話を成立させちゃってるよ

なんだろう?

なんだろうなんだろうなんだろう?

分からない分からない分からない分からない分からない
分からない分からない分からない分からない分からない

僕は過^{マイナス}負荷のはずだ

彼女は幸^{プラス}せ者のはずだ

なのに、彼女は僕を気持ち悪く思うどころか、
誰よりもまず先に交流を持つとしている

意味が分からない

頭が痛い

コノコハキモチワルイ

「あれ、どうしたの雪くん？ 顔色悪いよ？」

「『……』 『なんでも無いよ』 『ゴメン、僕用事があるんだ』」

その場から逃げるように僕は校舎を後にする

フラフラと自室へ戻り、布団へ倒れこむ

先に帰っていた敦ちゃんと海咲ちゃんは
僕の状態に驚いたのか声を上げてる

「だ、大丈夫かよ球磨川先輩!？」

「顔色が優れないようですが、体調が悪いのですか？」

「『……』 少し頭が痛いかな』」

あまり重い症状ではなく、安心したのか
二人はホッと息を吐いた

「一体なにがあったんですか？」

「『僕のクラスに転校生が来たんだ』 『見たことのないような、
プラスの見本のような子だった』」

「そいつがどうしたんだよ？」

「『あの子と会話していると、頭が痛くなる』 『気持ち悪い…！』
『過負荷の僕にも気持ち悪がること無く接してきた…！』」

「まただ…！」

彼女のことを考えると、僕の頭に激痛が走る…！

「とりあえず落ち着けて！ 先輩は過負荷の
リーダーになるんだろ！ そんな奴はしっかりしねえと
いけねえって！」

「『うん…そうだね』 『ゴメン敦ちゃん』 『もう大丈夫だよ』」

汗がダラダラと流れていたけど、今は少し落ち着いた

とにかく、彼女には極力関わらないようにしよう

あんな幸せ者^{プラス}、嫌、あんな異常になんか^{プラス}

すると、僕たちの部屋の扉がコンコンと鳴った

誰かがドアを叩いているんだ

「あ、はい！ 今行きます」

海咲ちゃんが扉を開けに行く

僕たちの部屋を訪れる人？ そんなやつ…

「球磨川さん、お客さんですよ。なんでも球磨川さんと話をしたいと…」

入って来たのは、あのプラスのような瞳の持ち主

「体調はどう雪くん？」

転校生、清瀬真希

「『君のお陰で死に際の夜神月並みに取り乱してしまったよ』
『僕のキャラをどうしてくれるんだよ』」

「マイナス過負荷にもキャラってというのがあるんだね」

「「なッ!?!」」

僕たちは耳を疑った

彼女は過負荷という存在を知ってる

つまり、この前僕を殺したあの四人組みみたいな子かな？

「てめえ…!」

敦ちゃんが警戒してナイフを構える

「『やめて敦ちゃん』『こんな狭い部屋で君の過負荷を使われるとアパート自体が崩壊しかねないから』」
それを僕は制する

彼なら運悪くこのアパートを全壊させられると思う

不運にも全ての螺子が切れ、不運にも

この建物を支える柱が腐って、運悪く皆死んでしまう

まあ僕は死ねないけど

「このアパートを全壊って…他の過負荷はそんなに理不尽な能力を持つてるの？」

「『まあね』『僕の無能力もそれなりに最低だし』」

『だからこんな狭い部屋で暴れてもらうと困るんだよねえ』」

「がはッ!？」

すると突然、先の丸まった、ものを貫くことが出来ないような螺子が清瀬さんを直撃し、部屋の外まで吹き飛ばす

「『暴れるなら、外でやろうぜ?』」

僕も部屋の外へと出る

アパートの外はそれなりに広い駐車場のような

場所があつて、戦うにはそれなりにスペースがある

それなら部屋で暴れるより多少はマシだろ？

「不意打ち、まさに過負荷らしいね」

「『正々堂々の戦いを望んでるならお門違いだぜ？』」

『僕ら最低がそんな公平な戦い方をするとでも思ってるのか？』」

「思っていないよ。君、本当に気付いてないの？」

気付いていない？ なにをだよ？

「『僕は別に気付きたいことなんて無いんだけど』」

「はあ…なら一応言つてあげるね？」

ボクも君たちと同じ過負荷だよ？」

「『え！？』」

思わず括弧を外してしまいそうになるぐらい

僕は驚愕の声を上げた

この子も…僕たちと同類…？

「『そんなわけあるか！』』過負荷は他の過負荷を感じられるん

だぞ！』

『なのに僕は君からなにも感じていない！』 『それは明らかに不自然だ！』』

「だって、ボクはどっちつかずなんだもん」

聞き慣れない単語だ

なんだソレ？

「『どっちつかず？』』

「うん。過負荷を持つてるし、無才能だけど、

ボクは世界に絶望してなんかいない。ボクも自分は結構性格が明るいほうだって自重してるし、自分でも過負荷だって信じられないよ。でも、ちゃんと無才能だしエリートも憎いよ？ だから君に近付いたんだ」

過負荷を持つてるのに、世界に絶望していない…か

プラス
マイナス
幸せ者であって不幸せ者でもある

そんな曖昧な彼女

だから僕は彼女に対して無意識に拒絶反応を起こしたのか

同じ最低マイナスなのに、幸せを掴めている彼女を見るのに
絶えられなかったんだ

「ネットで君達のことを知ったんだ。学園都市には

過負荷って呼ばれる存在が居るって統括理事会の記事に載ってた。現在はその存在の確認をしようとしていて、進めば調査や実験も始めるらしい」

僕たちの存在は既に統括理事会にばれているのか

学園都市全てを支配するような連中だけあるね

情報力が圧倒的に強い

なら、僕たちのエリート抹殺計画も…

「ボクも君達と同じ過負荷なんだ。初めて会った過負荷なんだ。だから力になりたい。君達の手助けをしたいんだ」

自ら僕らの仲間になる過負荷なんて始めて聞いたよ

でも、彼女のマイナス性を確かめないとなあ…

「『なら僕を殺してよ』」

「え…?」

僕の条件に彼女は首を傾げている

「『だから』僕を殺してみなよ』 『僕たちの目的はこの学園都市に存在する超能力者^{エリート}の皆殺しだ』 『なら人を殺せないと話にならないんだよ』」

「でも…雪くんを殺すのは…」

怯えながらそう言う

やっぱりまだ純粹すぎる

罪、悪、憎悪、怒りなどの負の感情にはまだ抵抗があるらしい

しょうがないなあ…

「『あはは』『もし過負荷なら僕を普通に殺してくれるのに、清瀬さんは殺してくれないんだね』『それはそれで君の魅力だと思っけど、

僕が能力を確かめる点では欠点かな？』
マイナス

『よし、ここは一つ』『僕が悪役になって清瀬さんを挑発してみる

よ』

「挑発？ 幾ら挑発してもボクは君を殺したりなんか…」

『お前、女の癖になに自分のことを”ボク”って呼んでんだよ？』
『正直男みたいで引くよ（笑）』

清瀬さんが固まった

虚無の表情のまま、僕をジッと見つめている

あの時の男の子たちみたいだ

で、やはり徐々に硬直が解けてくる

「ふ、ふざけるなよオオ！！」

怒りが爆発した

まあそれでも女の子だからまだ
やっぱり覇気に欠けるけど

「この一人称だけはスルーしてくれよ！ 男子ばかりの四人
兄妹の末っ子なんだから一人称は自然とこうなるんだよ！」

へえ、こういうのって理由とかあるんだね

「別にいいじゃないか”ボク”でも！ 昔なんか
”オレ”って一人称だったんだけど流石に拙いって
思っで必死で変えたんだよ！」

うわあ、怒り方が理不尽過ぎる

こういうところだけ過負荷なんだから

「『あはは』『うん、良いマイナス性だよ』」

『でも、流石に突っ立つてる相手を殺すのは気が引けると思うからこっちから先に仕掛けてあげるよ』」

僕は螺子を取り出し、彼女に向かって駆け出す

そのまま顔面に向かって螺子を突き刺す

けど、その攻撃は何故かまったく別の場所へと行ってしまった

しっかりと彼女の顔面を意識して突き刺したのに、気が付けた隣の壁を突き刺してた

それに、説明できないような憎悪感を、僕はその壁へ感じていた壁に憎悪感って…

自分で自分を呆れた

「『あれ？』」

もう一度彼女に向かって螺子を投げる

「うわぁ!?!」

それは何故か彼女ではなく、玄関から見守っていた敦くんたちに投げた

なんだろう？

壁の次は敦くんが憎い

いや、なにかもが憎い

空も、雲も、大地も、敦ちゃんも、

海咲ちゃんも、世界も

なにかもが憎い

なのに、僕は清瀬さんだけは憎めない

「どう？ 意味不明だろ？」

これがボクの過負荷、ノットクリアー『偽良性』の能力さ」

コレが過負荷？

「ボクに対しての憎悪などを他の物や人に移す能力さ」

なるほど、かなり他人迷惑で自分勝手なスキルだね

だから彼女は過負荷のように精神に異常が無いのか

誰も彼女を悪くしないんだもん

「『痛いなあ…』」

血塗れになりながら僕はそう言う

彼女は僕になにもやっていない

これは全部、僕が自分でつけた傷だ

彼女への憎悪を僕自身に移して、
自分を攻撃させてる

ある意味完全無敵な過負荷だ

「ハハハ！ なに自分を攻撃してるの雪くん？ アハハ！」

ケラケラと可愛らしい顔で、でも狂気の
声で僕を笑う

もうマイナス性全開だね

つまり、彼女は普段から仮面を被っている

幸せ者のような表、でも裏は相手が
無関係の人を傷付け喜ぶような狂気を持っている
女の子

表裏の激しい人だ

彼女の本性こそ、あの狂気だ

「『あはは』 『ム力つくなあ…!』」

螺子を彼女の顔面に突き刺そうとする

「じゃあね、雪くん」

でも、その怒りは僕自身に向けられる

自己憎悪、怒り、憎しみ

自分が嫌いだ、憎い、殺したい、死にたい、
傷つけたい、苦しめたい、呪いたい、惨殺したい

僕は彼女に向かって駆け出すのをやめる

そして

僕はその螺子を

自分の頭に

突き刺した

彼女の目の前に居た所為か、返り血が
顔に飛んでいた

返り血を浴びて徐々に正気に戻ってきたのか、清瀬さんは青白い顔を始める

「あああああ！　そ、雪くん…！」

だが、そんな声も虚しく、僕の頭を貫いている螺子から血が流れ出る

糸が切れたかのように僕は倒れ込んだ

意識を失う前に見えたのは、涙を流しながら倒れている僕の顔を揺さぶっている清瀬さんだった

「ボクが…ボクが雪くんを…！」

「でも死んでいないんだよなあコレが」

「うわぁ!?!」

螺子を頭で貫き、流血状態にも関わらず僕は立ち上がった

死んでいるはずの僕が起き上がったのを

見て、清瀬さんはゾンビを見るような目だった

まあ、死んでないっていつても一回死んでるんだけど

「そんな…雪くんの心臓は完全に止まっているはずだ！」

それ以前に頭を螺子で貫いて生きてるなんて…ありえない！」

「『そうやって常識に囚われてるようじゃ』」

『まだまだ過負荷として甘いぜ？』 『僕たち相手に常識を使おうなんて、それこそ荒唐無稽さ』」

と、格好良いことを言ってみるけど、彼女は疑わしい目で僕を見て
いる

あはは、ノリの悪い人だなあ

笑いながら頭から螺子を抜きとると、彼女を
僕なりの真面目さで見つめる

まあ笑顔のままなんだけど

「『とまあ冗談は置いといて』 『うん、実際に死んでるよ？』」

『ただその死を、僕は「無かったこと」にしただけさ』」

「…無かったことに？」

「『そう』 『すべて現実をなかつたこと虚構にするのが僕のマイナス無能力、オールマイティ大嘘憑きさ』」

何回もこの台詞を言ってるけど、驚く顔がいつも
見えるから飽きないんだよなあ

まあ彼女は対応が良さそうだから驚いても
混乱はしないと思うけど

「つまり、自分の死を君は『無かったこと』にしたの？」

「『うん』その事象が現実なら、僕はそれを虚構として処理できる」

『僕にとつては全てが”フィクション”、つまり絵空事』 『なんでもかんでも』

嘘と信じ、現実として受け入れない』 『それこそ僕の最低で最悪で理不尽で凶悪な過負荷の無能力さ』

大嘘憑きの能力は『現実を虚構にする』と書いて、
『現実を虚構にする』って読むからね

まさに書きの通りの能力だよ

嘘吐きの僕にはピッタリな名前だ

「…ボクの無能力もそれなりに理不尽だとは思ってたけど、君の無能力の方がよっぽど理不尽だね」

さつきから”マイナス”って言うてばかりだね

それだと飽きるんじゃないのかな？

「『でも、これでも君はオツケーだ』 『僕を殺せるなら、超能力者だって普通に殺せる』 『それに、一旦人を殺すと最初が辛くても後が楽になるしね』」

「これからよろしくね、雪くん」

「『こちらこそ、真希ちゃん』」

三人目の過負荷

『ノックリアー偽良性』の清瀬真希

十話 『どつちつかず』（後書き）

いつもいつも厨二で本当にすみません

入院中、病院から抜け出した厨二病患者です

過負荷を投稿してくださったあられ様、本当にありがとうございました

移せる対象を人だけでなく物も、という設定に勝手ながら変更させてもらいました。許可無く変えてしまつてすみませんでした

（過負荷の説明コーナー）

『ノットクリアー
偽良性』

他人の自分への悪意や殺意などの負の感情を周りの人へ移す能力
たとえこの過負荷を使っていると頭ではわかつていても気づけば
周りの人へ攻撃をしていて本人への攻撃はできなくなる。むしろ
そのことを意識して「攻撃をしなければ」と悪意を強めれば強める
ほど

周りの人へ負の感情が募り抑えきれなくなり強力な攻撃をしてしま
う。

無関係な人へ攻撃をしてしまい、後悔するのを楽しむ性格から
生まれた過負荷。その姿を笑い、さらに自分への悪意を増長させ、
より強い攻撃をさせるも他人に押し付けられ（以下ループ）

完全無敵の過負荷

相手からの攻撃は通用せず、こちらは

思う存分攻撃できる

負の感情を向けてきた相手に直接返すことも
できれば自己憎悪のあまり自分を攻撃させることも出来る

原作の『不慮の事故』のような能力です

十一話 「恩返ししてえんだ」(前書き)

前回の前書きでも自分の説明が下手で伝わっていなかったようです

迷惑掛けてすみません

ですのでもう一度書きます

今話を持ちまして、過負荷の募集を終了します

沢山の投稿、およびご協力、本当にありがとうございました

十一話 「恩返ししてえんだ」

「『皆、今日は出掛けるよ』」

あれから更に数日経っていた

この数日間は新しく過負荷の一人になった

真希ちゃんに僕たちについて説明することで手一杯だった

過負荷の世界観、目的、価値観

まあ、そんな複雑なことじゃないけど

ちなみに一つ豆知識だけど、僕ら過負荷は

偶然にも全員がジャンプ愛読者だ

楔さんのマイナス十三組と同じモットーにはしないけど、

それでも偶然は凄いつて思った

で、その後はノンビリしていたけど、今日は違う

「出掛ける？ 急になんだよ？ しかも

何処に行くっつーんだよ？」

敦ちゃんが僕にマシンガンのように

質問を投げかけてくる

そこまで出掛けるのに不満なのか？

「貴方は黙って説明を待つことが出来ないんですか？」

「うるせえな！ こっちは気になってることを

言っただけなんだ、イチイチ口出しすんじゃないよ！」

「まあまあ、二人共」

言い争いを始める敦ちゃんと海咲ちゃんを、
真希ちゃんが落ち着かせようとする

はあ、三年生がもう一人居るだけマシかな？

「『敦ちゃん静かにして』『出掛けると言っても、
今回は遊んだりしないよ』『真剣なことさ』」

「へえ、ソレはなにかな？」

「『敵状視察さ』」

僕たちの所属する第七学区は、ある意味
色々と混雑してる場所だった

他の多数の学区と隣接してる所為か、ここには普通の学校からエリート校まで幅広い学校がある

場所によれば綺麗なところもあるし、不良や無法者で支配されてる箇所もある

だからある意味かなりややこしい

その第七学区の中でも屈指のエリート校、常盤台中学のある箇所に、僕は来ていた

常盤台は学園都市有数の名門エリート校だ

主に超能力者の研究で有名だ

在学するにはレベルが3以上でないといけない、たとえ大統領の娘だろうが姫だろうが、超能力が無ければ入れない

学園都市に七人しか居ないレベル5が二人も在学していて、レベル4も多数存在している

そんな学校のある箇所に何故僕らが居るのかと言うと、さっき言ったみたいに敵状視察だ

唯一レベル5の中で能力の情報や顔写真を公開してるのはこの常盤台に所属している

学園都市序列第三位のレベル5、レベルガン超電磁砲の御坂美琴みさか みこと

今回は彼女の偵察みたいなものだよ

他のレベル5は顔写真どころか本名も公開していないし、ターゲットとして一番選びやすかった

まだ交戦はしない

あっちから挑まれたら戦うけど、まだ殺さない

今は時期じゃない

レベル5を殺せば、敵に回る連中はかなり多いと思う

そうなるに分かっているのなら、まず始めにもっと仲間を集めないといけない

少なくとも対抗できるような

「しかし…綺麗なところですね」

「まあこの学園都市でも有数の女子中学校のあるところだからね。お嬢様たちが住むようなところが汚いわけないだろうし。ボクはこういうところは苦手だけど」

僕たちに住んでいるところとは大違いだね

まあ学力の低い僕らの学校には当然の扱いだけど

「『よし、ここぐらいでいいかな』」

しばらく歩くと、噴水のある広場
のような場所を見つけた

集場所にいいと思い、ここでとまる

「『二手に分かれよう』 敦ちゃんと海咲ちゃんは
この辺りを調査』 重要な地点とか、どこに人が多くて、
どこが少ないとか、そういう感じの』 僕と真希ちゃんは
見学と装って常盤台自体を偵察してみる』」

「ちよつと待て！ なんで俺と琴吹なんだよ！」

僕の提案が不満なのか、クレームをつけてくる敦くん

はあ、こういう時は協力的になろうぜ？

「『均等に人数を分けてるから、仕方ないよ』」

「それなら俺と球磨川先輩でもいいじゃねえか！」

「『はあ、分かっているなあ』 『ここは一応は常盤台女子中学
の生徒だけでなく、他の女子校の生徒が住む地域なんだぜ？』」

「それがどうしたってんだよ？」

「『だあかあらあ！』 『女子』 校の生徒なの！』 『分かる？』」

ここに住むのは教師以外は殆どが女子だ

理由は、この辺りの学校の殆どが女子校で、男子なんて殆ど居ない

それはつまり、僕と敦ちゃんが道を歩いているだけでもかなり珍しいんだ

さつきから物珍しそうに僕たちをチラ見してる人がいっぱい居るしでも、僕たちが一人で歩いたらどうする？

女子が殆どのこの地域で男子二人で歩くなんて、変態だと思われるよ

そんなの僕は嫌だし

だからお互い、女子である海咲ちゃんと真希ちゃんと一緒に行動してそれを回避しようとしてるんじゃないか

「…あ、そうか。なるほどなるほど。球磨川先輩の言うことも一理ある」

「『だろ？』君だって変態って思われたくないだろ？』」

「でも、それだったら俺と清瀬先輩でも…」

「『年齢だと君と海咲ちゃんの方が近いだろ？』」

『もし高三の僕が一年生の彼女と一緒に歩いてると、僕がロリコンだって勘違いされるじゃん？』」

僕は断じてロリコンではない

楔くんとは違う

僕は出来るだけ同い年か、一番妥協できて二年年下かな？

年上はちょっと御免だけど

「『はい、そうと決まれば即行動！』『なにかあればお互いメールなり電話なりして連絡を取り合って』」

四人ともお互い携帯は持ってるし

ちなみに僕は先日真希ちゃんに携帯を選んでもらった

学園都市は世界最先端の技術を持つてるから、携帯も最新の機種や、見たことの無い機種でいっぱいだった

まあ、お金が足りなくて普通のになったけど

「ちツ、精々足を引っ張るなよ」

「貴方の方こそ地に這い蹲ってるゾンビより足を引っ張りそうですよ」

例え方が少し怖いんだけど？

忘れてたね、彼女、僕には音楽系のゲームを

進めたくせに自分はガンシューティング系が大好きだった

こういつところだけ何気に敦ちゃんと趣味があつてる

二人はギヤーギヤーと争いながら去つていった

「さて、ボクらも行こうか」

それを見届けると、真希ちゃんも僕に行こうと腕を引っ張り、常盤台へ向かい始めた

~~~~~

ちッ、なんで俺がこいつと一緒に行かなきゃいけないんだよ

これかなら清瀬先輩の方がよかつたぜ

しかもこいつの過負荷は厄介で殴ることすら出来ねえんだ

ひでえと思わねえか？

「なに嫌そうな顔をしてるんですか？ さっさと歩いてください」

てめえはいつも俺に突っかかつてるよな？

俺に恨みでもあんのか？

「お前、なんで球磨川先輩に着いて行こうと思ったんだ？」

「はい？ いきなりなんなんですか？」

「球磨川先輩を慕う理由はなんなのかって訊いてんだ」

同じ過負荷として、少しは気になるよな

こいつはこの前、突然球磨川先輩が連れて帰ってきたんだ

最初は俺も意味が分からなかったが、球磨川先輩はこいつが新しい過負荷の仲間だって言ってくれた

俺も最初は同類が増えてよかったって思ったさ

でもこいつと来たら…

『貴方、頭悪そうですね』

俺を見て一言そう言った

信じられるか？ 人を見て第一声が”頭が悪そうですね”だぞ？

それ以来、俺はこいつが大嫌いになった

「貴方にしては、少しは知的な質問ですね」

「んだとてめえ！」

なんでコイツはそんなに俺を嫌うんだよ！？

「でも、まあなんででしょう？ 正直、私自身も分かりません。でも、気がついたら球磨川さんを慕っていました。先輩は、初めて私を過負荷として受け入れた存在なんです。だから私は先輩の仰ることならなんだってします」

球磨川先輩には、何気にカリスマ性があったからな

こうなんというか、自分と同じ存在を引き付けるような雰囲気は球磨川先輩は持つてるんだ

「あ、そういえば」

琴吹はポンと手を叩くとなにかを思い出したようなことを言った

「この前は家まで送っていただきありがとうございました」

「はあ！？」

ペコって俺にお辞儀してる

ってこいつが俺に感謝してる！？

こんなもん、2012年の地球滅亡説よりありえねえことじゃねえか！

「なんの風の吹き回しだ？ お前が俺に礼を言っただけ、考えもしなかつたぞ？」

「人の親切を切り捨てるなんて…貴方は本当に最低ですね。ほら、



私も涙目になってしまったじゃないですか」

後ろを向いてしくしくと言ってる海咲

嘘吐けてめえ

さっきまで無表情だったじゃねえか

「そんな戯言なんか言ってるんじゃないよ」

「貴方はノリが悪いですね。こういう時は動揺するのが、  
なんか漫画っぽくていいじゃないですか」

「俺はそんな恋愛漫画みてえな展開は知らねえよ」

そもそも俺は球磨川さんみたくそついう漫画は  
好かねえんだよ

気持ち悪いったら仕方無い

「でも、感謝の気持ちは事実ですよ。貴方が送った  
所為で球磨川さんが一度死ぬことになってしまいましたけど」

「俺を責めてるみてえなこと言うなよ！」

さっき俺に感謝してるって言わなかったか!?

「それよりも…」

「俺の発言は無視なのか？」

琴吹は俺のクレームを無言で切り捨てた

ひ、ひでえ…

「それなら貴方はなんで球磨川さんの仲間になったんですか？」

なんだ、俺のことかよ

はあ…なんでだろうな？

ぶっちゃけ、あんま分かんねえ

俺も気が付いたら球磨川先輩と一緒に居たんだ

思えば、あの時から球磨川先輩のカリスマ性に俺も引き込まれていたんだな

『僕と居れば、君は世界一不幸せかわいそうになれる』

あの一言からだ

俺は球磨川先輩の魅力マイナスに魅かれた

自分こそ最低だと自負していた俺よりも底辺で、屑だった球磨川先輩

アイツのあの圧倒的な負完全マイナスの前に、俺は思わず安心してしまった

”俺より下が居る”

そんな安心感を与えてくれた

今まで俺を化け物としてしか扱っていなかった  
連中を、全員どうにかしてくれそうと思った

まあ実際は何一つしてくれたいんだが

それでもそれぐらいしてくれそうだった

「俺は球磨川先輩の負完全さに引き込まれた。あの圧倒的な  
マイナス性。」自分より最低な人間が居る”ってだけでこれほど  
頼もしいやつは居なかった。

なにより嬉しかったのが、球磨川先輩が俺達のことを友達って  
呼んでくれたことだ」

俺は生まれて一度も”友達”なんて存在は出来なかった

この過負荷を持つてる所為で、俺の近くで遊んでる  
連中は転んで怪我をしたり、時には事故に遭って大怪我を  
負ったりする連中も居た

それを気持ち悪がって、大人の連中は自分の子供を俺に近づけな  
かった

本当に孤独だった

両親なんて物心持った時から居なかった

多分俺の過負荷を恐れて捨てたんだろ

そんな中、球磨川先輩は俺を”友達”だと言ってくれた

”家族みたな存在”だと言ってくれた

人生であんなに嬉しかった言葉はなかった

ただの言葉でも、とても温かくて、穏やかだった

過負荷なんか関係なく、負完全なしで本当に温かい言葉だったんだ

俺たち過負荷にとって、友情、家族、努力なんてくだらねえことだ

でも、それでも俺たち嫌われ者マイナスにとって、そういう存在は本当に嬉しい

嘘も、戯言も、仮面も抜きで

「私たちにとって球磨川さんは恩人です。これだけは貴方と賛同できます」

珍しく意見が合うな

俺は琴吹を見直した

こいつだって、俺と同じぐらい球磨川先輩に感謝してるんだ

意見こそ違つが、やりたいことは感謝の気持ちは同じだ

俺もこいつも、球磨川先輩には計り知れないほど感謝してる

「そうだ。だから、俺は恩返しがしてえんだ。俺達マイナスに目的を、居場所を、温もりをくれた球磨川先輩に」

幸せプラスじゃねえのは分かつてる

でも、それでも俺達は嬉しい

「もし球磨川先輩になにかあつたら、俺たちで過負荷の連中を支えなくちゃいけねえ。その時は、よろしく頼むぞ」

俺は琴吹に向かつて手を差し出す

嫌味とかじゃなくて、嫌がらせとかじゃなくて、

悪意も無く、嫌悪も無い、純粹に手を差し出す

改めて自覚した

俺とコイツは、所謂副リーダーみてえな存在だ

つまり、球磨川さんになにかあれば俺たちが仕切ることになる

その時にこいつと仲悪かつたら球磨川さんに顔向けできねえ

これはその始まりだ

「…貴方こそ、突っかかつてこないでくださいよ？」

あいつはその手を受け取った

お互い握手を交わす

「よろしく頼むぜ、海咲<sup>みづな</sup>」

「そちらこそですよ、敦<sup>あつし</sup>さん」

十一話 「恩返ししてえんだ」(後書き)

次回はくまーと清瀬サイド

十二話 『僕は悪くない』（前書き）

連続投稿がストップしてすみません

あの名言、やっと登場です

くまーといえはやはりこの言葉でしょう！

…なのに今話はバトルがありません（おい

申し訳ない！

ちなみに明日も更新できなさそうです

はあ…面目ない…



## 十二話 『僕は悪くない』

「うわぁ…これはすごく広いね」

「『まあ、お嬢様の通う学校だから』」

常盤中学校の校舎は規模が違った

数多くの施設に、巨大な校舎

生徒なんて何百人も受け入れられそうな  
ぐらいの面積を誇り、綺麗な塗装の建物が並ぶ

僕たちの高校とは大違いだね

中学生の分際でこんなに良質な…

まあ僕も大人だ、中学生相手に嫉妬するつもりは無い

そんなお嬢様学校に圧倒されながらも、  
僕と真希ちゃんには校舎を散歩する

ここでの基本的な戦力や生徒たちの実力、  
そしてレベル5の能力についての情報

これらを探し出さなきゃいけない

ここでの基本戦力は大体分かってるけど

基本はレベル3の生徒、少数のレベル4、二人のレベル5、そして警備員アンチスキルに所属してる教師数人だ

警備員アンチスキルっていうのは、この学園都市というSWATやSATみたいな部隊だ

教師や大人だけで構成されている最新鋭の銃火器や防具を装備した戦闘部隊

主に暴走した超能力者の鎮圧を担当していて、機銃の扱いはかなり優れている

国際的な問題になれば学園都市外にも派遣されるような危険性もある

そんな彼等を相手にするのは少し厳しい

幾ら過負荷のスキルを持っていても、銃や防具相手じゃなにも出来ない

射殺されて終わりさ

だから、できるだけ教師の少ない日に攻め込みたい

後はレベル5の存在だ

確か御坂美琴さんは二年生だったはずだ

なら二年のクラスを調べないとね

「ここなんじゃないの?」

「『君の勘がそうなら合ってるんじゃないの?』『君の勘はよく当たるしね』」

僕たちが来たのは一つの教室

中には中学生たちが授業を聞いている

「なんか、平日に別の学校に行くのって変な気分だね」

「『まあ僕たちは実質的には学校をサボってるんだから』  
『変な気分になるのは仕方無いよ』『それより、真希ちゃんが良いの?』」

今日は平日だ

つまり普通の授業がある

それなのに、僕たちは学校をサボってまで  
ここを偵察しに来たんだ

居ても居なくても同じなんだけど

元々真面目に受けてるつもりはないし、そんな  
生徒って感じでもないし、そこに居るだけの存在

そんな僕と違って、真希ちゃんは一応はプラスで通ってる

皆に明るく振舞って、授業も真面目に聞き、  
成績もそこそこ良い

そんな彼女が僕たちと一緒にサボるのは、ちょっと変な気分だよ

「そのの二人！ 待ちなさい！」

廊下の前を歩いている僕らは呼び止められた

何かと思い振り向くと、そこには一人の警備員みたいな人

「一体どちら様ですか？ 今日はずいぶん平日ですよ？」

やばい

不法侵入って気付かれたら、後に警備が強化されて  
もう一度ここに入るのが少し厄介になる

かと言って許可なんてもらってないし、  
見学だって伝えても多分信じてもらえない

そもそも過負荷の僕の戯言を信じる人なんて居ないけど

「『ああ…』『その…』」

「この人不法侵入です。ボクが捕まえました」

なにか言い訳を言おうとすると、突然真希ちゃんが  
僕の腕を掴んでそう言った

まるでさっき僕を捕まえたって伝えてるかのよう  
え？ なにこれ？

「なに！？ それはご苦労でした。その坊主は  
我々で処分しますので、貴方は気を付けて」

「はーい！」

そのまま真希ちゃんを僕を警備員に差し出した

耳元で、「ゴメンね雪くん？」って言った

あはは…僕、身代わりにされたのかな？

「ほら、さっさと歩け！」

どこかへ連行される僕

後ろを向くと、片手でピースサインをして  
悪戯っぽい笑みを浮かべてる真希ちゃん

「『はあ…』』君は色んな意味で最低だよ』」  
マイナス

~~~~~

連行されていく雪くんを見つめた後、僕は再び教室の中を覗く

「ゴメンね雪くん？」

でも、ボクは捕まりたくないの

だって、それだと将来ボクが大変になるじゃないか

君なんてロクな未来が無いと思うし、

自分でもそう宣言してるんだから許してね？

雪くん風に言うなら、『ボクは悪くない』かな

「あの…なにをしていらっしやるのですか？」

すると突然教室が開けられ、さっきまで授業をしていた先生が顔を出した

さっきのやり取りでボクたちに気付いたらしい

後ろでは生徒達の視線がボクに集中している

「見学ですよ。妹がここに通う予定なんです」

「へえ、それなら教室に入っても構いませんよ？」

生徒達の授業の邪魔にならないのなら、幾らでも見学してください」

お言葉に甘え、ボクは教室へと足を踏み入れる

それなりに広い教室

そして、まだ顔から幼さの取れていない
中学生たちの顔が見える

この中にあの超電磁砲レールガンが居るのかな？

まあ、堂々と名前まで公開していたんだから、
簡単に見付かると思うけど

「皆さん、見学をしたいと入っただけなので、
気にせず授業を続けてください」

ボクは礼儀正しくそう言う

それに従ったのか、皆ノートを書くのに戻っていく

全員が真面目な態度で、熱心に勉強に取り組んでいる

あはは、ウチの連中とは大違いだね

「今日は見学ありがとうございました」

授業が終わり、放課後になるとボクはお礼を言う

そこまで役に立つ収穫は無かった

まあ皆の授業態度からの性格とかは得られたけど

「いえこちらこそ。妹さんによろしくお願いします」

そういえばそんな設定だったね

本当は今ただの一人っ子なんだけど

「は〜い」

そういえば雪くんはあれからどうなったのかな？

連行されてからは連絡が何一つ無いんだけど…

拷問とか？

あは、さすがにそれは無いよね

でもここはレベル5が二人も居る学校だし、

事情聴取という名の暴力は受けてるかもしれないね

いや、高確率で受けてる

だってボクら、過負荷だもん

理不尽なんて付き物さ

「すみません…」

雪くんの捨てられてる場所を探しにいこうとすると、

突然声を掛けられる

振り向いてみると、ボクに声を掛けたのは一人の中学生だった

茶髪の髪の毛に、どこか気が強そうな目

敬語で話すのがあまり慣れて無さそうな子だ

「ん？ どうしたの？」

「いや、少しお話を伺ってもいいですか？」

初対面だけど、敬語はかなり違和感がある

まあ、それは気にしないでおこうか

流石に初対面でそんなことを言うのは失礼だし

「いいよ。まあボクに用なんて殆ど出来ないし、寧ろ嬉しいくらいさ。喜んで行くよ！」

少し軽い気持ちで彼女に着いていく

そんな軽い話ではないと思うけど

その証拠に、この子のボクを見る目は、
長年の憎き敵を見るような瞳だった

~~~~~

とある中学生に連れられ清瀬が来たのは、  
人目のあまりつかない校舎の裏

そこで誰も居ないのを察知すると、清瀬はさっきとは違い  
ふざけた態度を改め、友好的な笑みを冷徹で、気味の悪い笑みへと  
変える

一瞬にして豹変した清瀬の表情に、その中学生は若干身震いしていた

「…単刀直入に訊く。アンタ、何者？」

頭部をビリビリと発電させながら中学生はそう訊いてきた

威嚇のつもりか、所々静電気が漏れている

敵意で固められたその瞳に睨まれながらも、  
清瀬はその笑みを崩さない

「何者って、どういう意味？　ボクはただの  
か弱い女子高生だよ？　なんの能力も持たない、  
ただのレベル0の無能力者で…」

「嘘吐くな！」

中学生から電撃が清瀬に向かって放たれるが、  
それは辛うじて意図的に右へ逸らされ、当たることは無かった

後ろではバラバラと壁が崩れる音

威力は通常の発電能力者とは比べ物にならないほど大きい

清瀬は直感した

彼女こそ、この学園に存在するレベル5の第三位、  
超電磁砲の御坂美琴だと

「いきなり能力使っつてどんな実力主義者なの？  
もし当たってればボクなんか一撃で死んでたよ？」

「正直に質問に答えれば、当てないわよ」

まるで脅すかのように手を清瀬へ向けた

少しでも怪しい動きをすれば打ち抜かんと  
言わんばかりに突き出されたその手は、まるで  
銃口を突きつけられているようだった

「アンタ、あの螺子の奴とどういう関係？」

「螺子の奴？ 一体なんのことかな？」

”螺子の奴”と言われ、清瀬は一瞬で球磨川だと分かった

螺子なんていうものを特徴として使うのは、  
球磨川以外に清瀬は考えられなかった

だか、学園都市の敵となる存在にその存在を

知られるのは宜しくないと思い、清瀬はその関係を否定した

「とぼけないで！ アンタだって、アイツと同じなんですよ！」

”アイツと同じ”

球磨川のマイナスイオン性と負完全を目の当たりにした

御坂は、同じオーラを纏う清瀬に声を掛けていた

悪夢のようなあの男への報復を、御坂はまだ諦めていなかった

「…わあ、君スゴイね。彼でもボクの過負荷性は見抜けなかったのに、君は分かるなんて」

御坂は無意識に常に一定の電波を回りに張り巡らせている

それのお陰で、レーダーのような作用を施し、

他人を感知できるようになっている

清瀬を感知した時、球磨川を感知した時と

酷似した気持ち悪さを感じ、御坂は清瀬が

球磨川と同類だということを見抜いていた

「やっぱりアンタも…！」

「強いて言うならそうかな。ボクはどちらかと言うと微妙なところ  
なんだけど」

「微妙でもなんでもいいわ。アンタ、あの

螺子の奴が何処に居るか知ってる？」

簡単に予想できた問いに、清瀬は慌てることなく、笑顔を崩すことなく答えた

「君、彼になにか恨みでもあるのか？ それの報復のつもりなら、一言だけ言っておいてあげる。

やめときな

君じゃ彼には敵わない」

きっぱりと”自分は負ける”と言われ、

御坂は少し怒りを感じていた

だが、それを清瀬で発散させるのを抑えながらも、言い返した

「やってみなきゃ分からないでしょ？ これでも私、レベル5なんだから。アイツに負けるなんて思ってないわ」

自信気にそう言った

学園都市最強の超能力者の部類であるレベル5

それに属している自身が負けるはずが無いと

御坂は言った

そんな彼女に、清瀬はただ呆れんとばかりに首を振った

「その認識自体が甘いのだ」

彼はそんな君の認識の遙か下を行く」

清瀬も誇るように球磨川のことを話す

「随分自信満々なのね。何者なの、あの螺子の奴？」

「彼の名前は球磨川くん。」

悪でもなく、邪でもく、言うなら澄んだ川のように、濁ってもいない

でも、そんな彼は人間の負の側面を集約したような人だった」

清瀬は始めて球磨川と会った時を思い出しながら、語りだした

「負ふ」

一言そう告げた

まさに球磨川の特徴を現した一文字だった

「彼は誰に対しても負けていて生まれながらの敗北者でだからこそ誰よりも強かった」

奇想天外な人物の説明に、御坂は半分混乱していた

言っている意味が分からなかった

敗北者でありながら強者

強者であり勝者でもある御坂とは正反対な人間だった

「呼吸するように他人を傷付け

食事をするように破壊活動に勤しみ

己を含めた全人類を一人残らず滅ぼそうとか

悪夢みたいなことを至極真面目に企んでいそうな

大胆に破綻した人生そのものが荒唐無稽の破滅型

ありえないほどの影響力を持って周囲を

否応なく巻き込む

それが、ふかんぜん負完全、くまがわ そそぎ球磨川雪だよ」

途切れることなく言い抜かれた球磨川の人物像

まさに人間の負の側面全てを物語るような人物

人類最低の過負荷、それが球磨川だった

「ッ……！」

そんな人物像に、御坂は言葉が詰まった

「まあ、彼は今頃この学校のどこかに居るんじゃないのかな？  
本当はついこの間まで一緒に居ただけで、捕まって連行されちゃ  
ってね。」

未だに警備室で取り調べを受けてるんじゃないのかな？」

それを聞いた瞬間、御坂は駆け出した

警備員が連行した

つまり、あの球磨川に自ら近付いたという意味だった

”警備員が危ない”

そう直感し、御坂は警備室へと全力疾走していた

「ちょ、引つ張らないでよ！」

未だに清瀬を連れただまま走り、警備室の前まで  
来ると止まる

そして、扉を半ば蹴り開けるような勢いで開けた

そこに広がっていたのは、地獄絵図だった

壁や床は血と思われる液体の後が大量に付着している



中の監視カメラを確認するための  
テレビなどはスクリーンが割れ、無残にも  
壊れている

机や椅子は幾つも倒れ、その惨劇を物語っている

そして、壁にはそれぞれ、手や足、胴体などを  
螺子で貫かれ固定されている警備員たち

「なによ…これ…?」

あまりにも悲惨な状態に、ただ啞然とする御坂

「『うわあ』『これは酷い』『うん、こんな  
極悪非道なことが出来るなんて人間の仕業じゃないよ』」

警備室の奥から聞える声

それに続き、こつこつと足音が聞えてくる

「『幾ら超能力者である可能性があっても  
自分で自分を壁に刺せるような能力は無いよ』  
『同士討ちなんてありえなさそうだし』『これは  
明らかに第三者の仕業に違いない』」

段々と声は近付いてきていて、足音も次第に大きくなっていく

「『あれ?』『なんで君は僕を疑わしい目で見てるのかな?』  
『僕が来たときには既にこうなっていたんだよ』『それなのに

僕を犯人みたいに扱うなんて、君は横暴な人だなあ』 『まあ要するに』

御坂の目の前に現れる男

顔を返り血で汚し、両手には血塗れの螺子

「『僕は悪くない』」

十二話 『僕は悪くない』（後書き）

今回は美琴とくまーの対決です

駄目文確定ですが、どうかお付き合いください…

ちなみに美琴のリーダーもどきが本文で登場した  
ような使い方が出来るかはわかりません

作中では出来るって設定にしておいてください…（泣）

十三話 『世の中は決定的に不公平』（前書き）

二日も更新できなくてすみません

連続投稿が段々と無理になってきました…

ちなみにタイトルは分かる人は分かると思います

次回の更新は…明日できるかどうか分かりません

ちなみに伝わっていないようなのでもう一度書きます

過負荷の募集を終了します

皆さん、ご協力本当にありがとうございました

十三話 『世の中は決定的に不公平』

「『あはは…』」

僕はこの惨状に、思わず乾いた笑い声を漏らす

目の前には激怒してる中学生と、  
苦笑いを浮かべてる真希ちゃん

君は笑ってないで僕を助けてくれよ…

まあ、無理だと思うけど

彼女の過負荷は他人の自分に対しての負の感情を  
別の人に押し付ける能力だから、僕には使用できない

これは彼女のある意味最低さいていの過負荷だから  
穴だつてそれなりにある

自分に憎しみとか負の感情を抱いていなかったら  
効果は無いし、海咲ちゃんみたいに無感情の人には滅法弱い

でも、今回の場合、この中学生ちゃんは僕に  
憎しみや怒りといった負の感情を抱いている

肩代わりできないのがあのスキルの欠点だね

「『わ!?!』 『ちょ』 『危ないって!』」

さつきからガンガン僕に電撃を放ってくる中学生ちゃん

って、電撃ってこの前会ったあの中学生ちゃんじゃないか

あのことをまだ根に持っていたのかな？

あの時は正当防衛だって言ったのに…

「『はあ…』 人気者は辛いぜ…』」

あの四人組に恨まれたり、この中学生に恨まれていたり、僕は結構な人気者らしいね

「アンタの所為で、どれだけの人が傷付いたと思ってるのよ！」

僕に向かってそう叫びながら、再び

大きな雷をぶっ放してくる

「『でも実質的には誰も殺してないだろ？』 『全員生きているし』 『傷も残ってない』 『それなのに、なんて僕は怒られなきゃいけないのかな？』」

「たとえ傷が無かったとしても、アンタの所為でアレを受けた人はちゃんと苦痛を感じてるのよ！ そんなことも分らないの！」

はあ、物分りの悪い人だなあ

彼女の言ってることは確かに善だよ、  
正しいよ。とても善良な<sup>プラス</sup>ことだ

だからそんな君に教えてあげるよ

善良なんて、善悪でかければ簡単に不幸になるってね

「『なら君に訊くよ』 『それならそいつらはまったく悪くないって言い切れるの？』 『君の言ってることは』 『あちらにまったく非が無いって言ってるのと同じことなんだぜ？』」

僕の発言に言葉を詰まらせる中学生ちゃん

「『それに、僕たちだって正当防衛みたいな理由ぐらいあるんだぜ？』 『人権って知ってる？』 『人間は全て平等に創られていて』 『決して犯すことの出来ない権利というものがあるって』 『ならなんで僕たちは反論の権利も認められないの？』 『過負荷は”人間”に入らないの？』」

僕たちを殴つても、睨んでも、貶しても、暴力を振るっても、誰も文句を言わない

全ての人間が平等に創られているのなら、なんで過負荷はこんな理不尽で最低なスキルを持っているんだ？

人間が平等なんて嘘だ

生まれた時点で僕たちは過負荷という不利があるんだぜ？

これは平等じゃないよねえ

「人間が平等だっていうのは綺麗言さ」 「人間は才能に恵まれている人と」 「恵まれない人で大きく分かれる」 「君だってそうだろ？」 「才能があるからレベル1からレベル5まで上がれて」 「才能があるから超電磁砲なんてものを使える」 「

彼女の正体は真希ちゃんが連れてきた時点で分かったよ

御坂さんにとって、僕みたいな

負完全は初体験だろうね

だからイライラや怒り、憎しみが倍増されてる

こんな気持ち悪い僕なんて、さっさと殺したいんだと思う

「枯れない花は無いけど」 「咲かない花はある」 「

」世の中は決定的に不公平だ」 「

とどめ

そう言わんばかりに僕は笑みを浮かべてそう告げる

彼女は呆然と立ち尽くしてる



「『その不公平をどこまでも受け入れるのが』 『過負荷だ』」  
ほくたち

螺子を取り出し、両手に構える

レベル5といっても、やっぱりまだ子供だね

僕がちよつとだけマイナス性をぶつけただけで、  
まるで耐え切れていない。これじゃあ倒す時は簡単に  
倒せそうだよ

「『もう手加減は無し』』こっちからも攻撃させてもらっつね』」

僕は彼女に向かって螺子を投げつける

呆然として、避ける気配はまったく無い

まあ殺す気なんてまったく無いけど、  
少し威嚇かな？

でもここでありえないことが起きた

うん、僕の螺子は確かに彼女に一直線で向かっていた

だがその螺子は彼女に当たることなく、まるで  
意思を持ったように右へ逸れて近くにあった鉄の門にくっ付いた

ちなみに場所は攻撃を避けてく内に校庭にたどり着いていた

「『？？？』」

「…頭の悪そうなアンタに分かり易く説明してあげる」

キリッとした表情に戻って、僕を睨んでる

「鉄つていうのは電気を送り込んで+極と-極を

纏わせることができる。それである門には+極を、アンタの螺子には-極を与えた」

「『それがどうかしたの?』」

「+極と-極はお互い引き寄せられる働きがある。これがどういう意味か分かる?」

…-極を浴びた僕の螺子は全て門に引き寄せられるってわけ?

「『僕の螺子は君には当たらないって意味かい?』」

「そう。もうアンタの攻撃は私には当たらない!」

…伊達にレベル5を堂々と名乗っていないね

磁石の原理を利用して僕の螺子に-極を

埋め込むなんて…

電気能力ならではの応用方法だ

でも、そんなことしたって僕が自分で近付けばいいだけじゃないか

あまり肉弾戦は得意じゃないけど、

中学生程度に負けない自信はある

「『でも』『肉弾戦には対応できないんじゃないのかなあ？』」

彼女に向かって走り、螺子を突き刺そうとする

「『最初は少し遊んであげるね御坂さん！』」

だがそれを御坂さんは軽く避けると、僕の  
鳩尾を思いつきり殴った

幾ら女子中学生程度の力しかなくても、急所を  
殴られた僕は少々飛ばされ、地面に倒れこんだ

「『ゲホツ…ゲホツ…』」

吐き気を押さえ込みながら、僕は立ち上がる

螺子を放り投げるが、それはやはり

門に引き寄せられ、くっついて取れなくなる

やっぱりまだ忘れていないね

「『くッ…！』」

迫ってくる電撃を辛うじて避け、彼女に接近する

再び螺子を顔に向かって刺そうとする

目の前からの攻撃はさすがに避けられないとは

思ったけど、彼女は不自然なまでにそれに反応し、避ける  
避けられた瞬間、僕は大きな雷によって吹き飛ばされた

「言ったでしょ、アンタの攻撃はもう当たらないって」

「『…君』 喧嘩強いんだね』 『どこかの不良みたいだよ』」

「人聞きの悪いことを言わないで！ そう思ってるほど強くないわ  
よ」

でも、明らかに反射神経が良い

喧嘩慣れしてるっぽいし、僕が攻撃した  
後の隙に的確に反応して素早く反撃してる

力だって中学生とは思えないし

「私はただ、自分の脳を活性化させてるだけよ」

脳を活性化？

「人間の体っていうのは電気信号で行動のやり取りを  
行ってる。私はただ、自分の能力を使ってその電気信号  
のやり取りをちょくちょくだけ早くしただけよ。あまりに  
早すぎると体が着いて行けないしね」

それでその異常なまでの反射神経か

素早く反応し、俊敏に避け、的確に反撃する

今の彼女には、身体能力の低い僕なんかテレビのスローモーションのような遅さを感じていると思う  
なんてチート能力だよ…

僕が言えたもんじゃないけど

「後、人間の体は通常は”全力”の三割程度しか  
体は動かせないって知ってる？」

確か人体って抑制が掛かっていて、実際に  
使える力のほんの少ししか出せないんだろ？

それ以上は体に負担が掛かり過ぎて悪影響が出るって聞いたし

「これも電気信号の都合でやり取りされててね、  
その抑制も少しだけ緩くさせてもらったわ。まあ、  
ほんの一割程度多くしたただけけどね」

つまり、今は実質的に人体の四割の力を出せている

それだけの違いでここまで身体能力が上昇するなんて…

はあ、やっぱり電気能力って応用が広いなあ

羨ましい

なんたってチート能力は少年のロマンだから！

「『…はあ』君のその能力はとことん有利だね  
『マイナス不利の僕がまるで齒が立たないよ』」

溜め息を吐くと、僕は自分の惨状を確認してみる

何度か殴られ口が切れて血が少々流れてる

鳩尾も殴られてるから少し呼吸し難い

雷撃を喰らった所為で体中が痺れ

動かしにくく、さらには傷から血が流れてる

それに対して彼女は無傷

僕のマイナス性に当てられて少し精神が不安定になっていたけど、それも今はかなり回復してる

落ち着きを取り戻し、僕を翻弄してる

はあ、僕の負けかな？

「『また勝てなかった…』」

そう呟く

「は？」

彼女はそれが聞えたのか、意味が分からず首を傾げている

「『僕は素直に勝つことを諦めるよ』』やっぱりレベル5に勝とう

なんて無理があつたかな？」

『僕は素直に』

『フェアに』

『公平に』

『勝利の可能性を捨てよう』

徐々に傷口が塞がっていく

血も蒸発するかのように消えていき、

呼吸も次第に整ってくる

「でもだからって」 『僕は負けるつもりなんて無い』

そして、服も新品のように綺麗になり、  
傷が全て消える

「ッ……！（どうして！？ こいつの能力、回復系だと思ったけど、これは異常すぎる！ 傷ならまだしも、服まで治るなんて！）」

「『なにもかもゼーんぶ台無しにしてあげるよ』」

そして僕は数本の螺子を取り出し、御坂さんに投げつけた

「なッ！？」

普通ならそのまま磁力によって門に向かうはずだけど、

なぜか方向を変えず彼女に一直線に向かっていた

だが、強化された反射神経のお陰で間一髪で避けていた

「そんな、まだあの門は磁力を纏っていたはず！

それにアンタの螺子にだって投げられた瞬間・極を埋め込んだのに！　なんで通用しないのよ！」

「『あはは』『滑稽な光景だぜ』『過負荷相手に戦略的にマイナス勝とうなんてそれこそ荒唐無稽な話だぜ』『僕たちは理論も論理も定理も』『ぜーんぶ台無しにするのに』」

自分の作戦が破られ、混乱する御坂さん

さっきまで門にくっ付いていた螺子は全て

地面に落ちていて、明らかに磁力が発生していない

「『君は常に演算を行ってあの門の磁力を保っていたんだろ？』  
『そんな脳に負担が掛かりそうなこと』『態々ご苦労さんだね』  
『でも』『そうと分かれば破るのは簡単だ』」

「アンタはなにをしたっていうのよ！」

「『君の演算を「無かったこと」にした』」



そう彼女に告げる

啞然とし、呆然とし、愕然としている

僕の過負荷の場合、原理なんて関係ない

全部一瞬にして台無しにするんだから

「『<sup>すべて</sup>現実を<sup>なかつたこと</sup>「虚構にする」、それが僕の<sup>オールマイクシヨン</sup>大嘘憑きだ』」

もはや使い慣れた無能力<sup>マイナス</sup>の正体を明かす

「『ついでに教えてあげるよ』『僕のもう一つの過負荷の正体を』」

僕は懐からさらにもう一つの螺子を取り出す

今まで使っていた+の螺子ではなく、-の螺子を

少しずつ、彼女に近付いていく

「ひッ…!」

負完全の、マイナスの、最低の僕に怯えている

さっきまでの威勢はどこに行ったんだろう？

地面に座り込んで、後退りしてるが、僕は

それ以上に早く歩いているため、少しずつただけど近づいている

「『僕の禁断の過負荷』『この世で一番最低な過負荷』」

校舎の壁にぶつかり、もう逃げ場は無くなってる

そして、僕はその螺子を振り上げる

「『ブックメーカー却本作り』」

「『フフーン』『フーンフーン』」

常盤中学校を出ながら、僕は鼻唄を唄う

「あれ、珍しく上機嫌だね。それほど御坂ちゃんを倒せたのが嬉しいの？」

隣を歩く真希ちゃんがそれを不自然に思い、疑問符に僕に訊いてきた

「『いや、あれは僕の負けだよ』 『僕たちは  
どちらも死んではないし』 『倒せてもいないよ』  
『だから戦いの展開でいうと』 『彼女の大勝利さ』」

「そう？ ならどうしてそんなに上機嫌なの？」

「『だって』 『初めて却本作りブックメーカーを使えたんだぜ？』  
『嬉しいに決まってるじゃないか』」

あの過負荷こそ、レベル5の抹殺に一番有効なスキルだ

それを試しにレベル5に使用したんだ、かなり大きな進歩だと思う  
ぜ？

「知らなかったよ、雪くんが二つも過負荷を持っているなんて」

「『僕は特殊だからね』 『却本作りブックメーカーの説明はまたいつかするよ』  
『だからその時までこの過負荷の存在は秘密にしてくれよ？』」

あの二人をビックリさせたいし

過負荷なんて一つだけで不便なんだし、  
二つも持つのはある意味かなり無謀なんだ

でも、僕は特殊な過負荷だからね

「その却本作りブックメーカーって使ってもよかったの？ まだ  
レベル5を殺すのは時期が悪いって言っただけ？」

「『一応は手加減したからね』 本来の効果の一割も出してないよ』」

『彼女ほどメンタルが強いなら一時間ぐらいで立ち直れるさ』」  
たとえ一割程度しか使わなくても、常人じゃ精神が崩壊しかねないスキルだ

それほど凶悪で、理不尽で、最低なスキルだ

効果を試したいから使ってみたけど、散々な結果だった

あのスキルをくらった御坂さんは、ほんのちよつとの時間だけどとんでもないぐらい心が折れていた

もし手加減してなかったら、完全に崩壊していたね

まあ、今日の出来事の所為で彼女の僕に対しての憎しみがかなり増幅したと思うけど

「それにしても、もうこんな時間だね」

辺りは日が沈み始めていて、綺麗な夕焼けだった

周りには部活を終えた学生たちが賑わっていて、さつきまで死闘が繰り広げられていたとはとても思えない

「どうする？ 敦くんと海咲ちゃんを探す？」

「『あの二人なら自分で帰れるんじゃないの？』 僕たちだけでも

「このちょっとした休日を楽しもうか」

「それってデートみたいだね。ボク、同い年の男の子と遊ぶのって始めてだよ」

真希ちゃんは何故かこういうのに敏感なんだよね

なんとなくか、愛情に飢えてるっていうか

まあ、そういうところは可愛らしいんだけどね

「だから、雪くんが全部おごってね」

綺麗で、プラスな笑顔でそう告げた

僕は自分の財布の危機を直感的に感じる

「『はあ…』 『やっぱり君は色んな意味で最低だよ』<sup>マイナス</sup>」

十三話 『世の中は決定的に不公平』（後書き）

人類最低vsツンデレ、呆気なく終わってしまいました

くまーは本当に扱いが難しいです。勝つてはいけないので、  
いかにどうやって胸糞悪く負けさせるかでかなり苦労します

十四話 「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」(前書き)

タイトルは分かる人は分かると思います

いや、ぶっちゃけ木更津は零崎人識の性格を

イメージして書いたので、一度は言わせてみたかったです

ちなみに今回は本当に今までで一番駄目文です

十四話 「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

「『もしもし?』」

いつも通りの放課後、僕は自室で寛いでいた

一度も片付けていない布団に座りながら、  
漫画を読んでお菓子を食べる

典型的なニートの生活さ

他の三人はそれぞれ予定があつて部屋には居ず、  
今は僕一人だけさ

そんな駄目駄目な一日を送っていると、僕の携帯が鳴り響いた

《もしもし、球磨川さんでしょうか?》

「『ああ、海咲ちゃんか』 『どうしたの?』」

《上条当麻くんが行動を起こしました》

忘れてた、彼女に上条くんの監視を頼んだの

だから今日は居なかつたんだ

「『へえ』 『行動つてどんな?』」



《彼の住んでいるマンションで火災が発生しました。ただの人災ならまだしも、なんの前触れも無く突然》

なんの前触れも無く？

その言葉に僕は意味が分からず首を傾げた

普通火事っていうのは、タバコの消し忘れや  
コンセントの不具合によって発生する

そういうのだと小さな炎が段々と燃え移って  
巨大な火事へと変化するはずだ

でも、海咲ちゃんの話によるとマンションは  
なんの前触れもなく巨大な火事が発生した

恐らくは発火能力者だろうね

「『直ぐそつちに向かうよ』 『だから海咲ちゃんは  
先に行つて見てきてくれないかな？』 『もし超能力者  
だったら直ぐ逃げて』 『たとえ君がどれほど最低な能力  
を持っていても』 『超能力者には勝てない』」

たとえば彼女の『絶対禁止』が完全無比の過負荷であろうと、  
マイナスは勝つことはできない

出来るのは胸糞悪い敗北か、曖昧な引き分けさ

引き分けなんて僕が許さない

同士討ちなんて僕以外の人間がするもんじゃない

~~~~~

「いきなりの発火…明らかに不自然ですね」

上条くんのマンションを監視していた私は、
そんな独り言を漏らす

元々は球磨川さんの頼みごとのために監視していましたが、
監視するにつれ、彼には呆れました

困っている人がいれば助け、自分の身を危険に晒す

とても正義感の強い、プラスの塊のような人です

そんな彼を監視してからそれなりに経ちましたが、
特に変わった様子はありませんでした

それなのに、今日だけ明らかに不自然です

突然マンションから火の塊が噴出しました

それも、生き物かのような形を保ちながら

現実離れしていて、超能力とも過負荷とも呼べないその

炎は、まるでおとぎ話に出てくる怪物のようでした

さすがにこんなことは球磨川さんには伝えられず、今はまだ秘密にしていますけど…

球磨川さんは見て来いと言いましたし、
現在私はマンションの階段を上っています

階を一つ上昇するたびに、その炎の熱が徐々に強まってきました

まるで近くに溶岩があるような、
それほどの灼熱が広がっている

上条くんの階へとたどり着いた私は、愕然とした

目の前に見えるのは化け物

一言で片付ければそうなる

体は溶岩で出来ていて、腕や
口など動物のような箇所も見える

私がよく遊ぶゲームの敵キャラとして出てきそうな
ぐらい化け物らしいソレは、上条くと相対している

化け物の後ろ、つまり私の前に立っているのは
一人の赤い髪の男。見た目はこちら辺ではあまり見かけない
格好で、背も私よりは数十センチ高いと思います

その人物は気配に気付いたのかこちらを振り向きま

「誰だ、お前？」

疑問符にそう私に尋ねてくる

それはこちらが訊きたいんですけどね…

「名を訊く場合、まず自分から名乗るのが礼儀なんじゃないんですか？」

「それは失礼した。僕はステイル・マグヌス、ただの神父さ」

明らかにただの神父じゃないですよね？

どこの神父が背後に灼熱の悪魔を従わせてるんですか

「貴方は頭がおかしいんじゃないんですか？ どこの神父が背後に溶岩の化け物を従わせるんですか。それに、たとえそれが普通である^{ノーマル}と、過負荷^{マイナス}である私にとって普通^{ノーマル}なんてあまりにも滑稽に見え、聞こえ、感じ、思います」

「へえ、ただの小さな高校生が、随分威勢の良いことだね。逆に感心するさ、コレを見ても取り乱さないなんて。こういう光景に慣れているのか、それかかなり鈍感かい？」

「生憎とそんな化け物程度ではもう驚かないんですよ。私はこれまでそれ以上に出鱈目な過負荷^{もの}に会ってきましたからね」

球磨川さんの大嘘憑きの能力を知った後、もう大抵なことでは驚かなくなりました

だって、現実を虚構すべてなかつたことにする能力ですよ？

出鱈目にも程があります

「なにやつてるんだよ琴吹！ 逃げろ！

そいつはただの怪しい奴じゃねえんだよ！」

「いや、そんなの見れば分かりますよ。なんで貴方達は分かり切っていることをまた繰り返しに発言するんですか？ はっきり言って息の無駄使いですよ？」

ただの怪しいやつならまだ変態で片付けられます

でも彼のあの化け物を見た時からこれは超能力なんて生易しいものではないと確信しました

「随分生意気なんだね。僕は彼に従った方が得策だと思うよ？ もっとも、これを見たからには逃しはしないけどね」

ああ、一般人は見られたら抹殺なんていうお決まりな展開ですか

なんで見逃してくれないんでしょう？

過負荷わたしたちにバレたつてもなにも不利にはならないのに

私たちの戯言を信じる人なんていると思いませんか？

「素直に見逃してくれないんですね。はあ、まったく…プラスというのは皆こんなに面倒な方なんですか？」

マグヌスさんは上条くんから私へと標的を変える

それに従い、あの化け物も私を向きます

「待て！ ソイツは無関係だ！ 手を出すんじゃないわねえ！」

それを上条くんが止めようとしますが、彼は耳を傾けません

「貴方は自分の心配をしたらどうなんですか？
相変わらず呆れるまでの善良者プラスですね」

「やれ、イノケンティウス魔女狩りの王」

イノケンティウスと呼ばれたその灼熱の悪魔は、私に向かってその巨大な腕を振り上げる

それを一直線に振り下ろしてきます

「『来ないでください』」

私がそう言うと、その腕はなにか透明な壁に当たったかのように弾かれ、近くの壁にぶつかる

予想外のことにマグヌスさんは驚きの声を上げる

「なッ！？ 君、なにをした…！」

「なについて、私はただ痛いのが嫌なので、

来ないでくださいって言っただけですよ?」

曖昧に返答する私に、マグヌスさんは少々苛立ちを見せ始める

「君の超能力かなにか?」

「超能力?」冗談は止してください。私みたいな
無才能にそんな高位な技術が備わるはずが無いでしょう?」

ただのレベル0です、と付け足す

不思議そうにマグヌスさんは疑問符になり、
上条くんは驚いた表情のまま固まっています

恐らく彼は私になにかの能力者だと思っただけでしょうね

残念、私は超能力者ではなく、マイナスですよ

「マイナス?」

「はい、マイナスです。この世で一番の負け組みであり、
敗北者であり、屑であり、社会の塵である嫌われ者集団です」

「…マイナスか。興味深いものだね。でも、そのマイナスとやらの
お陰でイノケンティウスが通用しないみたいだね。なら…」

なにか詠唱のようなものを唱え始めると、彼の手の
周りに炎が集まり始める

それは徐々に形を成してゆき、固まった

「炎の剣…どこのロープレゲームの武器ですか？」

手に持ったのは、炎で出来た剣

まるでファンタジーゲームに出てきそうなものです

「どこまでも僕を馬鹿にするのが好きらしいね。直ぐに喋られないようにしてあげるさ」

剣を振り上げ、私に向かって突っ込んできます

はあ…何度やっても同じだっていうのに…

「やめろ！」

上条くんが取り乱したような勢いで私に向かって走ってきます

途中にあの化け物が居るのにも関わらず、私を助けようとしているのか手を伸ばしている

「大丈夫ですよ上条くん。私にこの程度のものなんて」

だが、そこで予想外のことがありました

確かに私は彼の剣を”認識”しました

認識し、拒絶したはずです

にも関わらず、その剣は弾かれることなく私に向かってくる

まるで、私の『絶対禁止』が発動していないかのように

「ッ…！」

間一髪で頭を後方に逸らす

鋭い痛みが頬を駆け巡り、指で触ってみると血が付着する

完全に斬られています、私の過負荷がまるで発動していません

「どうしたんだい？ 斬られて不思議かい？」

「くッ…！」

「まあ、僕も実際は分からないんだけどね。イノケンティウスが通用しないなら、恐らくはこれも通用しないとは思っただけど、良い意味で予想を裏切ってくれたよ」

この人はなにもしていない

ならどうして…！

私の過負荷は拒絶さえすれば弾くことが出来るのに…！

「っ…！」

再び剣を向けられる

このままじゃ…殺される…！

「おいおい、さっきまでの威勢はどうしたんだい？」

一度退き、球磨川さんと呼ばないと…

この場を後にし、階段を駆け下りようと思いますが

階段の正面まで来ると、炎の壁が

入り口を遮る

「さつき逃がさないと言っただろ？ 本当は僕は紳士だ、君のような女性は殺したくは無い。でも、彼女の…インデックスのためだ…！」

こちらに向かって歩いてくるのは

あの炎の剣を持ったマグヌスさん

「勘違いをしている人は…嫌われますよ？」

「君の知ったことではないだろ…！」

斬られ、殴られ、蹴られ、刺される

…痛い…

これが本当の傷、致命傷、苦痛

今まで攻撃は全て弾き、当てられたことのない私にとっては気が遠くなりそうなぐらいの激痛

血があちこちから流れ出ているのが自分でも分かります

「くそッ！ 琴吹！」

マンションの廊下の奥から上条くんの声が聞えます

彼は私に駆け寄りたいののに、あの化け物によってそれが邪魔されているようです

恐らく彼はなんらかの方法で能力を無効にする能力を持っているはずです

でも、それをもってしてもあの化け物は倒せませんか…

あれは生き物ですからね

そう簡単に倒せるとは思いません

「なにか言い残すことはあるかい？」

地面に平伏している私に向かってマグヌスさんはそう問う

「…言い残す言葉なんて…なにもありません…私たちマイナスに未練というものは…この世に存在しないのだから…」

最後に、あの球磨川さんの言葉が頭に思い浮かぶ

『もし超能力者なら逃げて』『たとえ君がどれほど最低な能力を持っていても』『マイナスは超能力者には勝てない』
プラス

あの忠告は、どうやら本当のようですね

それに従わなかった私に非があるんでしょう

この人は超能力者でなくても、なにかしらの
異能な能力を持っている能力者^{プラス}

私は不利になるような能力しか持っていない無能力者^{マイナス}

マイナスはプラスに勝てない、球磨川さんが言っていた世界の真理

それは本当でしたね

私はここでプラスに殺され、マイナスに終わるんですから…

「グハッ!？」

突然マグヌスさんがうめき声を上げる

その所為か、間一髪で突き刺そうとしていた
剣は逸れ、僅かに頭を掠れた

閉じていた目を開けると、そこには
拳を彼に向かって突き出している人物

「…敦さん…」

マグヌスさんを突き出したのは、同じ過負荷の先輩

ミスフォーチュン
負運性の木更津敦さん

「『大丈夫…じゃないよね』『生きてる海咲ちゃん？』」

そして、私に駆け寄ってくれたのは私たち過負荷を纏める人

負完全、球磨川雪さん

「先輩方…遅いですよ」

安心と痛みの所為なのか、私の意識は遠くなる

そして、そのまま闇へと落ちていった

~~~~~

「『こりゃ酷いね』『裂傷に打撲』『火傷も酷い』  
『かなりの大怪我だよこれは』」

「そんなのみりゃ分かる」

僕は海咲ちゃんの介護をはじめ、

敦ちゃん海咲ちゃんを殺そうとした  
人物と相対する

それにしても、なんで戦ったんだろう？

はあ…あれほど戦うなって言ったのに…

ま、この子の負けず嫌いな性格を考えると、  
あまり期待はしていなかったしね

過負荷なのに負けず嫌いなのはかなり珍しいけど

「誰だよ…アンタら？」

巨大な化け物と相對している上条くんは  
僕たちを見てそう言っている

「『あれ？』『覚えてないの上条くん？』『ほら僕だよ僕』  
『結構前に転校して君のクラスに乗り込んできた球磨川だよ』」

上条くんはなにが思い出したのか苦い表情をする

「ッ…！」

「まったく次から次へと…面倒だ」

あの背の高い男性が僕たちに駆け出す

彼が持っているのは、大きな炎の剣

おいおい、どんな厨二の武器だよ？

まあ、僕はそういう週間少年ジャンプみたいな武器が一番好きなん  
だけど

「おいおい、お前の相手は俺だぜ？」

それを敦くんが顔面を殴り、吹き飛ばす

さすが喧嘩慣れしてるだけはあるね

御坂さんみたいに能力を使うんじゃないかも、

この敦ちゃんの身体能力の高さは純粹に鍛えてるからだ

僕みたいな貧弱体質の高校生とは大きい違いだ

「くっ…！ 君も僕の邪魔をするわけだね」

その問いに対して敦くんは鼻で笑った

この距離からでも分かる、彼はかなり怒ってる

いや、激怒してる

どうやら敦ちゃんはブチ切れると怒鳴るのではなく、

テンションがかなり上がり、上機嫌になるタイプのようだね

「はッ！ 人の友達殺しかけてなにぬかしてんだよ？」

悪いが俺は球磨川さんみてえに優しくはねえ、

てめえを殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」





十四話 「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」(後書き)

やっと原作に入れた…

これからは急展開がかなり勃発すると思います

主に過負荷勢力が凄い勢いで増えたり…

次回は敦くん大活躍です(笑)

十五話 「不運だったな」（前書き）

実はあまり魔術サイドはやらない予定です

くまーの目的はあくまで超能力者<sup>エリート</sup>を抹殺することなので

ですのでこの後はしばらく魔術サイドはやらないと思います

十五話 「不運だったな」

自分の殺人の意思を晒した木更津

下品に笑い、満面の笑みでそう告げる

木更津に、ステイルは戦慄していた

たかが高校生がこんな表情を出来るのか…？

そう疑問に思うステイルだが生憎と彼は過負荷だった

”マトモ”に育つてなく、何人もの人間を不運にも殺してる殺人鬼

あの球磨川でさえ、一度は木更津に殺されていた

「（こいつは拙い！）」

素早く炎を木更津に向かって放つが、

それはただなにも無い空間を燃やすだけだった

「何処狙ってやがる？」

「ぐっ…！」

ステイルの直ぐ真横に現れた木更津は、  
その拳を振り下ろす

戦闘慣れしているステイルは辛うじて

その攻撃を回避し、持っている炎の剣で斬りつける

「おっと」

頭を後ろに後退させそれを避ける

そのまま天井へと剣は直撃する

「君も殺し合いには慣れてるんだね…！」

「まあな。それより、そこに居ると危ねえぞ？」

瞬間、ステイルの立っている箇所だけの天井が崩れ落ちてきた

間一髪で後ろへ逃げその災害を逃れたが、炎の剣は瓦礫の中へ埋もれてしまっていた

「おつとわりいな。不運にもお前の刺した箇所が天井を崩して、運悪くお前だけが巻き込まれそうになったな」

それを木更津は、ケラケラと笑って見ていた

「ちツ、なにをやったかは知らないが、この程度で勝った気にはなるな！」

木更津から見れば、なにか書かれた紙を取り出しているだけだったが、それはステイルから見れば隙に過ぎなかった

「なッ!？」

直後、火球が木更津に向かって放たれる

予想外の出来事に一瞬反応が遅れ、

致命傷にはならなかったものの腕を焼かれる木更津

「どうだい、初めてくらった魔術は？」

挑発的にそう言う

「魔術？ なんだよソレ？」

「君たち学園都市の連中には決して理解できないようなものだ」

再びステイルは紙を取り出す

すると、徐々に炎が手のひらに集まっていき、

灼熱の温度が木更津にまで広がっていた

「はぁ、あつちいなぁ…」

すると、地面に俯きなにかブツブツと言い出す木更津

それを見て、気味が悪いと思ったのか、

顔を顰めるステイル

「ククク…」

不気味に笑い出す木更津

すると、突然顔を上げる

「ギャハハハハ！ おもしれえなあ！

最高だよてめえ！ 魔術がなんか知らねえが、おもしれえ！

てめえがたとえ魔術だろうが神の能力を持っていようが、そんな  
高位の能力者を殺せる俺は最高にツイてる！」

狂気の籠った目でステイルを見つめていた

まるで、生肉を見詰める獣の如く、

興味深い獲物を見つけたかのように、

木更津はステイルを睨んでいた

その様子にステイルは呆然としていた

これまで何度も殺し合いを経験したステイル

そんな彼にとっても、木更津のような

人間は始めての経験だった

「『おい敦ちゃん！』 厨二病発言はいいからさ」

『さつさとそいつを倒してよ』 『それに殺しちゃ駄目だからね』

『殺人とか犯して目を付けられたらたまったもんじゃないよ』

後ろからこの場に似合わない球磨川の声が響き渡る

「ちツ、なんだよつまんねえなあ…でも

悪いな球磨川先輩、そいつあ負けちまうわ」

この言葉に、ステイルは疑問符になる

自身の実力に自信が無いのか？

そう思っていた

「殺したら駄目なら俺の負けだわ。いや、寧ろそれが良い」

不可解な発言を繰り返す木更津

過負荷として、最低として、殺人鬼としても  
圧倒的なマイナスイキ性を持つ彼の言葉は、ステイル  
にとってはこの上ないまでの気持ち悪さだった

「おれたち過負荷は負けることしか出来ねえ。今回の場合  
”勝つ”条件がこいつを倒すことであって、殺すことじゃ  
ねえつつうんなら、好都合だ。

お前を殺して負けれるからなア！」

ポケットからナイフを取り出す木更津

何度も人を殺していながらも、  
殆ど錆びついていないその凶器

それを指の間でクルクルと回すそれは、

まるで木更津の手足のように自在に動いていた

「おら、続けようぜ魔術師<sup>プラス</sup>。てめえを  
殺して解して並べて揃えて晒してやんよ！」

ステイルに向かって駆け出し、ナイフを突き刺そうとする

その速度は、人間とは思えない速さで接近していた

あまりの速さに反応できず、ただナイフが自分の心臓  
に迫るのを見詰めるステイルだったが…

「ゲフツ!？」

何かに吹き飛ばされ、球磨川の座っている

位置まで飛ばされる木更津

ステイルは目の前に立っている人物に驚く

「神裂…」

長い太刀を持っている神裂と呼ばれたその女は、  
無言で球磨川ら過負荷を見詰めていた

「『ん?』『どうかしたんですか?』」

しばらく呆然としていた木更津に代わり、  
球磨川が話しかけていた



「『ああ』展開から見れば仲間って感じですね』  
『まったく…』死亡寸前で仲間が助けるなんて展開は  
週間少年ジャンプだけにして欲しいですよ』」

呆れたように首を左右に振る球磨川

そんな球磨川を、まるで汚物を  
見るかのように神裂は見詰める

「『おいおい無視はカンベンしてくれよ』それじゃあ  
僕傷付いて泣いちゃうよ?』」

そんなことを言うが、笑顔の球磨川には説得力が皆無だった

「『ああなんだ』怪我人の海咲ちゃんを  
心配してくれてるの?』それなら大丈夫だよ』」

血塗れで気を失っている琴吹の顔を  
球磨川は手で覆うと、みるみる内に傷が消滅していった

傷も塞がり、流血も収まり、血で汚れていた  
制服でさえ元通りになっていた

まるで、今までの戦闘を『なかったことにした』かのように

「ツ…! (馬鹿な! 魔術による傷は簡単には  
癒えないはずだ! それなのにこいつは…!)」

「『え?』君は僕が黒幕かと思ってるの?』『うわあ、

想像力の豊かな人だなあ』 『僕みたいな最低マイナスが黒幕なわけないだろ？』

『僕はただの屑で』

『最低で』

『理不尽で』

『塵で』

『低脳で』

『マイナスな偽善者マイナスですよ』』

それだけ聞き、神裂は球磨川に背を向ける

そして、階段を下りていった

それに便乗し、ステイルも階段を下りていく

「…なんだったんだよ、アイツ等…」

しばらく唾然とし戦いを見ていた上条がそう漏らす

「ちツ、途中で逃げやがって」

不機嫌そうにナイフをポケットに戻す木更津

「『まあまあ』』 『皆無事だったからいいじゃないか』」

「それでも俺はアイツを殺せなかった。ちッ、  
やっぱ過負荷でも負けるのは気分がわりいな」

「それ以前にまず、お前等は何者なんだよ！  
いきなり現れやがって！」

球磨川たちに向かってそう怒鳴る上条

急に琴吹が現れ、ステイルと戦闘し敗北すると、  
また直ぐに今度は木更津と球磨川が現れた

あまりの展開に上条は着いていけなかった

次から次へと非日常に巻き込まれる上条

魔術師と接触し、さらには過負荷とも接触する

やはり上条当麻は不幸少年だった

「『僕たちは別に何者でもないよ』 『ただの  
理不尽な人類最低』 『過負荷だよ』<sup>マイナス</sup>」

球磨川は当麻に”マイナス”と告げる

聞いたことのない単語に、上条は疑問符を浮かべる

「マイナス？ なんかの組織か？」

「おいおい、俺たちをそんなもんと

勘違いするんじゃないよ。そもそもそんな  
ややこしいことなんか出来ねえし」

「単純な奴らだ…」

木更津の発言に呆れる上条

「『ま』『僕らはただ海咲ちゃんを  
迎えに来ただけだから』『色々と変なこと  
になっちゃったけど』」

「ッ…！　そういえば…！」

上条は何か思い出したのか、  
後ろに倒れている一人の人物へと駆け寄る

今までその存在に気付かなかった球磨川は興味深そうに後を追う

「『うわあ…』」

思わず声を上げる

球磨川の目に飛び込んできたのは、一人の人間

純白の修道服を来たその小柄な人間の周りには、  
血が広がっていた

さっきまで致命傷を負っていた琴吹  
に及ぶほどの傷

放っておけば絶命は確定だった

「『誰これ？』」

「インデックスっていうんだ。今日の朝に初めて会ったんだけど、帰ってきた時に血塗れで倒れてたんだ。早くなんとかしねえと…！」

「『まあまあ落ち着いて』『そんなに焦られちゃこつちも対応できないよ』」

そつと上条を落ち着ける球磨川

「お前、治せるんじゃないのかよ！ さつき琴吹の傷だつて元通りに治したじゃないか！」

言葉が詰まる球磨川

確かに、オールマイクシオン大嘘憑きならどんなこともなかつたこと出来る

たとえ魔術によつて負われた傷であろうと、神によつて与えられた病であろうと、それが現実であるのならなかつたこと虚構に出来る

だが、それは普通の人間に使えば、の話だった

インデックスは見たところ魔術サイド

なんらかの魔術が体に施されていれば、

大嘘憑きに不具合が生じ暴走してしまう可能性があった

普段他人が傷付こうと構わない球磨川だが、今は違う

後ろには後輩であり同じ過負荷の仲間が二人いる

もし不具合によりなにかあったら、それこそ

球磨川は許せなかった

たとえ自分が過負荷であろう、同じ

過負荷である仲間を傷つけるなんてありえない

だが今日の前にいるのはなんの能力も無いレベル0

球磨川のもットーは”弱い者の味方をする”だ

レベル0の頼み言を、そんなもットーを持つてる球磨川は叶えたか  
った

だが、もしその所為で同じ仲間が傷付くとなると、  
少し考えなければならぬ

「『……』」

「お願いだよ、球磨川先輩！」

「『分かった』『君の願いを叶えてあげよう』『』」

表情を笑顔に戻し、そう告げる

それに上条は喜びの笑みを零した

「『その代わり』 『なにがあっても僕は悪くないからね？』」

そう言うとき大きな螺子を球磨川は取り出した

そして、その螺子をインデックスに振り下ろそうとするが

「『わつと』」

「なにやってるんだよ!」

上条が刺さる寸前で球磨川の腕を止めた

「『なにつて』 『この子を治そうとしてるんじゃないか』」

「ならなんで螺子で刺そうとする!」

「『僕の無能力むじりゆうりきのためさ』 『それとも僕が信じれないの?』」

そう訊かれると、無言になる上条

球磨川の手を放した

「『じゃあ改めて』」

再び螺子を振り上げると

「ッ!」

インデックスに深く突き刺した

その様子に、上条は思わず顔を顰める

それを見た球磨川は、笑いながら上条に言った

「『安心して』『僕は人なんて殺せないから』」

疑わしそくに球磨川を見詰めるが、

上条はインデックスを見ると驚愕した

なんと、彼女の傷がまるで初めから『なかったかのように』消えていた

「嘘だろ…」

啞然とする上条

球磨川は満足気に立ち上がり、

木更津のところへ向かう

階段の入り口には、琴吹をおんぶした  
状態の木更津

「『帰ろうか』」

そうつげ、階段を下りていった



「おい球磨川先輩」

「『なに？』」

自身のアパートへ向かう途中、木更津が球磨川に問いかける

「なんでアイツを治したんだ？ あんな

魔術師プラスの能力者なんか…」

「『弱者レベル0の頼みだからね』 『僕はそれを助けたに過ぎない』」

「でもだからってマンションまで元通りにしなくたってもいいだろ？」

球磨川はインデックスの傷だけでなく、マンションの損害までもなかったことにしていた

火事によって焼けた痕や、崩落によって

崩壊していた階なども全て元通りだった

すると、球磨川は満面の笑みを浮かべ、片手でピースサインをしなから告げた

「『サービス』」



十六話 『甘えよ』 (前書き)

連続投稿です

超急展開連続です

十六話 『甘えよ』

明るい朝の道を、僕は歩いている

小鳥が心地よい鳴き声を発し、朝っぱらから  
公園で遊ぶ子供の笑い声が聞える

涼しい風が袖から服を通り、髪の毛も揺れる

穏やかで平和な朝

軽く背伸びをし、辺りを見回す

今日は日曜日だ

日曜日とは誰もが楽しみに待つ最高の休日であり、  
老若男女問わず誰もがリラックスできるような夢の日

子供は友達と遊んだり、終わっていない宿題を終わらせようとする

大人はそんな子供を見守りながら、どこかへ出かけたり、  
家でダラダラと過ごすと一日を送る

勿論、僕も例外ではない

珍しく朝早く起きて、あまりにも心地よい朝だったため散歩している

現在僕は一人暮らしだ

この前は敦ちゃんと一緒に住んでいたけど、今は別の部屋を借りてそこで生活をしている

最初は少し寂しかったけど、次第に慣れてきた

そんなことにより、一人で散歩を

しているわけだけど、関係ない

寂しさなんか吹き飛ばぐらい快適な朝だった

あまりの平和と穏やかさに心を癒され、マイナスをも忘れそうになる

だが、僕のそんな朝も一瞬にしてブチ壊されることになる

「『え？』」

突然の出来事

計り知れないほどの衝撃を受け、

僕は数メートル吹き飛ばされた

鋭い痛みにつき、激痛が体中を駆け巡る

衝撃を感じた腹の部分が気になる、

手で触ると、赤い液体が手に付着した

倒れている僕の周りに広がるのは同じく赤い液体

《き、きゃああ！！！！！！！》

この惨状を見た近くの女の子がそう叫ぶ

おいおい、こういう展開って大人の女性が  
叫ぶ方が様になると思うよ？

まあ、学園都市だから大人なんて殆ど居ないからしょうがないけど  
僕は後ろに聳え建っている一本のビルの屋上を見る

その箇所だけ、一瞬ガラスに光が反射したかのように明るく輝いた  
戦争に詳しい人なら知っているだろう

そう、スナイパー狙撃手だよ

それを確認した瞬間、僕の意識は途絶えた

~~~~~

穏やかだった朝は瞬く間にパニック状態に陥った

突然何者かに狙撃された球磨川

腹部を一発撃たれ、それに続き頭を銃弾で貫かれている

即死だった

通報を受けた警備員は、速やかに行動した

アンチスキル

あちこちに警備員が散開し、警戒態勢になる

銃を構え、辺りを搜索する

球磨川は病院に緊急搬送されるが、それも虚しく搬送中の救急車の中で息を引き取った

「なんてことだ…」

救急隊員がそう呟く

見るからにはまだ高校生の少年

この先の人生をこれから決めるといふ時期に殺された少年を弔い、救急車の中に居た隊員全員が血塗れの少年に黙祷を捧げる

涙を浮かべ、目を閉じている

車両に輸送された時、大半の者はもう諦めていた

出血多量に加え、頭部を貫通した銃弾

とても生きているとは思えなかった

だが、それでも少しでも希望を持ち、人工呼吸を続けたが、それも虚しく死亡

尊い命が消えた

悔しさのあまり、涙の呑む隊員たち

その時だった

「「「なッ!?」「」」

全員がおもわず驚愕した声を上げる

「『あれえ?』『ここ何処お?』『」

なんと、ついさつき死亡が確認された少年が、
突然起き上がったのだ

「馬鹿な! 君は頭を撃たれたんだぞ!
生きてるはずが…ましてや意識があるなんてありえない!」

一人の救急隊員が球磨川に向かってそう言う

「『そんなに焦らなくてくれよ』『僕だつて
いきなりなことビックリしちゃって』『思わず
一度死なないといけなかったじゃないか』『」

その言葉を聞いた隊員たちは、益々混乱した

一度死んだ

つまり、死亡したのにも関わらずまた生き返った、という意味だったとえここが超能力の、科学の街であろうと死人を蘇生させるのは不可能

そのはずなのに、少年はいとも簡単に蘇生を果たしていた

「君は…一体何者なんだ？」

「『球磨川雪』『お茶目な高校生です！』」

笑顔でそう言う球磨川に、冷たい視線を送る救急隊員

「…とまあ冗談は置いといて」

それになにか感じたのか、少し

悲しそうな表情で発言を訂正する球磨川

「『僕は本当にただの高校生さ』『レベル0のね』」

「レベル0!? なんの能力も無いのか!?!」

なにかの能力者だと確信していた隊員は、

球磨川の言葉に驚愕の声を上げる

「書庫で確認しろ！」

隣に座っている隊員に備え付けのパソコンを起動させ、確認させる

「本当です…球磨川雪、レベル0の無能力者…」

「馬鹿な…」

”この少年は何者なんだ”

救急車の中の誰もが思ったことだった

~~~~~

うわぁ、ビックリしたなぁ

僕は救急車から降りながらそう思う

その後、本当に無傷か確認され、  
さらにはレントゲン写真で銃弾も体内に  
残っていないかを検査された

救急車の中でもレントゲン写真が取れるなんて、  
さすがは学園都市の技術だね

で、本当に無傷だったため僕は開放された

救急隊員全員に感謝する

あの人たちは良い人たちだった

過負荷である僕を恐れず、仕事を真つ当して僕を助けようとしてくれた

そんな人たちには賞賛する

しかし、誰が僕を殺そうとしたんだろうね

僕はまだ目立った行動はしていないはずなのに

色々ありすぎて疲れたからなのか、僕はそのまま帰ろうとする

でも、そこに一人の人物が立ち塞がった

「ターゲットの生存を確認。生存方法は不明、とミサカは驚愕の現状を報告します」

暗視ゴーグルのようなものを頭につけていて、茶髪に生気の無い目

まるで、生きた動く人形みたいな人だった

着ているのはいつかの常盤台中学の制服

ってこの人、完全に…

「『常盤台の御坂さん？』」

この前初めて却本<sup>ブックメーカー</sup>作りを試した人、御坂美琴さんにそっくりだった

いや、そっくりじゃない。完全に瓜二つなんだ

一卵性双子よりも似ていそうだ

「違います、とミサカは曖昧に返答をします」

「なにそのナレーション風の喋り方？」 「変な喋り方だなあ」

「貴方の括弧付けた喋り方の方が奇妙です、とミサカは的確に突っ込みを入れます」

なんか話し難いなあ

僕、この子ちょっと苦手かも

「『あはは』 『本当に無表情だ』 『なんの感情も見せないで…』 『きつもちわるゝい!』」

『でも、それも君の個性さ!』

『僕はそれを受け入れよう!』

すると、僕は一瞬で彼女の目の前まで移動する

そして、顔を真正面まで持っていく

「『無理せず自分らしさを誇りに思おう!』」

『そんなマイナスみたいな表情をするんじゃないよ！』」

だが、僕のこの行動にも特に動揺することも無く、御坂妹さんは冷静に言い返してきた

「気持ち悪いという言葉は一番貴方にお似合いでしょ、とミサカは負けじと反論を言います」

気持ち悪い、か

最近はかなり丸くなったつもりだけど？

全然他人を螺子伏せていないしさ

「『それよりさあ』『さっき聞き流させようとしたけど僕は覚えてるぜ？』『ターゲット生存ってなんだよ？』『」

「そのままの意味です、とミサカは貴方の低脳に呆れながら言います」

わお、ちょっと毒舌だね

ま、顔は無表情だけど

でも知ってる？

笑顔って無表情以上に”無表情”なんだぜ？

だからもうちょっと笑おう

「こちらの命令は球磨川雪の暗殺、およびその仲間の抹殺。ミサカはそれを遂行しただけです、とミサカは説明風に貴方に告げます」

「『へえ〜』 そうなんだ』」

僕は関心したように首を縦に振る

こんな幼さそうな子がそんな暗殺なんて物騒なことを出来るなんて、凄いじゃないか

それは純粹に賞賛に値する

でもね

「ッ…！」

直後、御坂妹さんの周りに巨大な螺子が突き刺さる

「『僕だけを暗殺するならまだ許せる範囲さ』  
『でもね』 『僕の大切な過負荷しんぷうを殺すのは流石に  
ちよ〜つとガマンの限界かなあ？』」

笑顔のまま、マイナス性全開にする

僕の直ぐ真正面ってことも重なり、御坂妹さんは始めて無表情から”戦慄”という表情に変わった

「貴方を殺せとの命令です。それを遂行します、  
とミサカは戦意を表しながら告げます」

「『僕は悪くない…』」

銃を構え、暗視ゴーグルを目に装着する御坂妹さん

それに対応し、僕も両手で螺子を構える

「『うわっと』」

僕に発砲しながら向かってくる御坂妹さん

っていつか中学生に銃って全然似合わないんじゃないの？

物陰に隠れ、辛うじて銃撃をかわす

そして、銃撃が鳴り止んだ隙を見て、僕は  
物陰から飛び出し、彼女に向かって螺子を突き刺そうとする

リロードしてる最中が一番の隙だ

それを君に教えてあげるよ…!

「『え?』」

だが、僕のその意表を突いた攻撃を  
軽々と避け、僕は顔面を殴り飛ばされた

「貴方の身体能力の低さには呆れてものも  
言えません、とミサカは色んな意味で愕然とします」

僕、そんなに弱いのか?

ああ、理不尽だなあ

でも…

「『これで銃は無くなったぜ?』」

「ツ!?!?」

突然御坂妹さんの持っていた銃が  
バラバラに崩れ始める

ヒビによって割れていく、その銃をただ呆然と見詰めていた

「『確かに僕は人類最弱かもしれない』 『でも弱いからって』  
『死ぬわけじゃないぜ?』」



あの銃の弱い箇所だけを小さい螺子で貫き、破壊した

これで彼女に武器は無くなった

だが、それにお構いなく彼女はこちらに向かって走ってくる

今度は銃でなく、手のひらを突き出しながら

「『やっぱりねえ…』」

あの御坂さんのご親族ってこともあつてか、彼女が使ってるのはレベルの低い電撃能力

正式名称は分からないけど、少なくとも御坂さんの超電磁砲よりは全然威力が低い

幾つもの雷撃を避けながら、僕は路地裏へと入っていく

その後を御坂妹さんが追いかけてくる

はあ、人気者は辛いぜ…

「これで逃げ場を失いました、とミサカは勝利を確信しながら貴方にそう告げます」

とうとう行き止まりにまで行ってしまっ

だが、これで僕の計画通りだ

「『逃げ場が無い？』」

『それはこっちの台詞さ』」

そう僕が告げた瞬間、彼女の後方は幾つもの螺子によって塞がる

「ぐッ…！？」

そして、彼女の腹にも螺子が突き刺さる

「『僕が無計画に走り回っているとでも思った？』」

『ここなら誰も助けに来ることは無いし』 『君をお仕置きしても怒られない』」

一つ、また一つと螺子が投げつけられ、

御坂妹さんは苦痛で顔を歪める

そして、彼女の目の前に立つ

「『愚かだね』 『過負荷相手に”暗殺”なんていうルール無用で戦う愚かさを君に教えてあげるよ…！』」

だが、その時、僕の目の前に手が突き出される

御坂妹さんの手だった

そして、彼女は僕の顔面に向かって雷撃を放とうとするが…

「演算が…できない…?」

「『あははは!』 超能力なんて僕が許すと思ったかい?」

『その螺子が突き刺さってる限り、君の演算は常に「なかったこと」にされる!』

『だから超能力は使えないさ!』」

今まで何度も演算を『なかったこと』にする戦法を

使ってきたけど、どれも常時使用型の超能力には対応できなかった

そこで僕が考えたのはコレだ

大嘘憑きを浴びた螺子で突き刺せば、

常に演算をなかったことにできる常態だって

僕は啞然とする彼女の眉間に螺子をわざと浅く突き刺す

「ぐウウ!」

痛みのあまり苦痛で声を上げる御坂妹さん

「『あはは、どうしたんだい御坂妹さん?』 『さっきまでの

毒舌の面影もないよ?』 『ほら、僕を暗殺して!』らんよ』

『あはは』 『まさか、そんな簡単に僕が殺されるかと思ってたの?』

『僕が人類最弱だから、殺すなんて容易いと思ったの?』

『漫画脳で童顔の僕が脅威なんて思ってなかったわけ？』

『自分は銃を持つてる』『それに比べ相手は丸腰だ』

『だから心配することなんてなにもないって』

『まさか自分は死んでも生き返る、なんて厨二なこと考えてたの？』

『甘えよ』

僕はそのまま、眉間に中途半端にさしてある

螺子を深く突き刺そうと、螺子に蹴りを放とうとするが

『はいっ』

幾つもの螺子が、一瞬にして吹き飛ばされる

いきなりの出来事に、思わず僕は呆然とした

出口を通せんぼしていた螺子は後型もなく  
消し飛んでおり、砂埃が辺りに充満している

「おいおいイ、人の実験動物に手エ出すたア嘗めたこと  
してくれてンじゃねエか、あア？」

煙の中から、こちらに向かって歩いてくるのは、  
純白な白髪に、雲のような真っ白の肌の人物

赤い目で、とても細い体形

「今日の実験の奴がいつまで経っても来ねエから  
俺が見てみたら、このザマだア。てめエ、三下風情で俺の  
時間を潰した責任、きちんと取ってもらうぜエ」

攻撃的な表情

何人もの人を平気で殺してきたような顔

「この学園都市最強の俺に殺されんだ、  
てめエもまんざらじゃねエだろオ？」

僕の前に現れたのは学園都市レベル5の第一位

「てめエも一方通行アクセラレータつつウ名前ぐらい知ってるだろオ？」

学園都市最強の超能力者、  
一方通行アクセラレータだった

十六話 『甘えよ』（後書き）

まさかの一方通行登場

妹達編がもうスタートしてしまいました

ぶっちやけ、幻想御手編をやリたかつたんですけど、  
時系列がまったく分からなく、とりあえず先に時系列の  
わかっている妹達編を始めました

ちなみに暗殺を依頼したのはアレ（ry

十七話 『差別するなよ』(前書き)

駄目文注意



十七話 『差別するなよ』

学園都市最強の超能力者、一方通行が目の前にいる

僕たちがどれだけ調べても素性も能力も一切  
判明できなかった謎の人物

その本名さえ分かっていない

でも、かなりヤバそうな人だっていうのは分かる

「『うわあ』『自分から最強発言ってある意味凄いな』  
『自意識過剰』『』」

「あア？ なら試してみるかア？」

かなり好戦的な人だね

それ以前に表情が僕を殺したく殺したくて  
仕方がないって感じだし

そんなに僕が時間を潰したのが気に食わなかったのかな？

「『とんでもない』『僕が君に敵うわけがないだろ？』『』」

「敵う敵わねエの問題じゃねエンだよ。てめエは俺の  
時間を潰した、それで俺の機嫌も悪い、よって一方的に殺す。」

分かるかア？ てめエの都合は訊いてねエンだ」

殺される

これは確定事項だ

なんか僕の大嘘憑きも役立たずになりそうだよ

殺されるって分かるなら、せめて  
悪あがきぐらいしてやるさ

「『へえ〜』 君が一方通行なんだ』」

僕は興味深そうに彼を見詰める

「だったらどうなんだよ？」

そして、僕は彼に指差し、笑いながらこう言った

「『お前ってなんか』 『ウサギを擬人化したような姿だよな？（笑）』」

彼の表情が固まった

まるで、一瞬僕の発言に頭が対応できていないかのように

「ぶ…す…」

なにかを呟いたけど、僕は聞き取れなかった

体を小刻みに震えさせて、拳も血が流れるんじゃないかって思わせるぐらい強く握っている

「ぶつ殺す！！！」

殺意丸出しでそう叫ぶ

地面を蹴ると、とんでもない速さで僕に近付いた

そして、その拳で僕の顔面を打ち抜く

モヤシみたいな体形なのに、威力は  
トラックに吹き飛ばされたかのような衝撃だった

まるで玩具のように僕の体はそのまま  
壁に叩きつけられ、血反吐を吐く

顔も殴られた所為か、鼻が折れて血が流れてる

「『あははは…』『やっぱそうだね』」

「あア？」

そんな惨状に、思わず笑い声を漏らす

一方通行はそんな僕を奇妙な目で見てる

「『超能力者のレベル5が一般市民を殺しても良いのかよ?』 『それはある意味能力の悪用だなあ』」

「ためエの何処が一般人だよ」

まあ、僕の過負荷と螺子を恐らくは

見てるだろうから、信じられないと思うけど

「『それなら何で僕たちは殺されなきゃいけないの?』  
『たとえ異能な無能力のうりよくを持っていようが』 『僕らだってレベル0なんだぜ?』 『ただ他の人と違うだけで善良な一般市民である僕らを殺すのは高位能力者の横暴と理不尽さ』」

『差別するなよ』」

「…ちッ」

一方通行はなにを思ったのか、後ろを振り向く

そして、この場を後にするよつに去り始めた

既に螺子は抜いてある御坂妹さんは大嘘憑きによって  
無傷なため、そのまま後を追っている

「『油断大敵だぜ?』」

僕はその背後を巨大な螺子で突き刺そうとする

これが決まれば、彼のあの正体不明の能力は  
使用できなくなる

その隙に却本作りを打ち込めば今後の  
対決は何倍も簡単になると思う

「喰らうかよオ、三下野郎がア!」

でも、その攻撃は何故か彼に当たることなく、  
まるでボールのように跳ね返された

なんなんだ、彼の能力は?

瞬間移動みたいに速く動いたり、  
僕の攻撃を跳ね返したり…

「一方通行にそのような攻撃は通用しません、とミサカは  
貴方の不意打ちの愚かさを述べます」

そういうことは先に言ってくれよ…

「『グフツ!』」

あつという間に腹を蹴り飛ばされる

吸い込まれるかのように僕の腹に食い込んで、  
体の中で”ボキボキ”という音が数回響く

「『うわあ、これは肋骨が肺に刺さったかなあ？』

『一生後遺症が残ってるかもねえ』」

「知るかなことオ！」

腕をつかまれ、文字通り投げ飛ばされる

あんなモヤシに投げられてるのに、何故か

彼は異様に力が強い

「三下の癖に俺に騙まし討ちをするとは良い度胸  
じゃねエか。だがなア、これでお前を殺す口実は出来たってわけだ  
ア！」

容赦なしに殴り、蹴ってくる一方通行

苛めだよ、どう見ても…

最終的にはボロ雑巾のようになって  
僕は投げ捨てられた

「ケツ、つまんねエな。三下で俺に挑んで来るンじゃねエよ」

見下すような台詞を吐き捨て、瀕死状態で  
倒れてる僕の腹に蹴りを入れる

不良かよ君は

「『いじめをする人って悲しいよねえ』』他人を見下さなきゃ自分の存在を確立できないんでしょ?』」

「そうかア? 少なくとも俺は自分の存在くらいそんなくだらねエことをしなくても確かめられるけどなア」

「『学園都市最強は話が別さ』」

学園都市最強って時点で既に存在意味が確立されてるじゃないか  
そういう点では、君のその最強は不公平さ

まあ、世の中は不公平で出来上がってるんだけどね

「まあいい。てめエをボコるのもそろそろ飽きてきたしよオ」

一方通行は僕の胸ぐらを掴んで持ち上げた

僕は体が小さいから、軽々と自分の目線まで持ち上げる

そして、狂ったような笑みを浮かべた

「死ねよ」

僕の心臓を彼の片手が貫こうとする

真っ直ぐ向かってくるソレは、まるで矢のような  
速さと威圧感を持っていて、とても腕とは思えない  
死を目前にしても尚、僕も笑みを崩さない

「『甘えよ』」

「なッ!？」

彼にとっては信じられないことが起きていた

確かに腕は真っ直ぐ僕の心臓に向かっていた

速さも威圧感も矢そのもの

そして、僕の胸に到達している

でも、それだけだった

一方通行の腕は、貫通することなく、  
た少し殴るだけの衝撃程度で、殺傷なんて出来ていない  
信じられない、という表情になってる一方通行



僕の笑みは広がるばかり

「『あは！』』どうしたんだい一方通行？』 『最強らしくないぜ！』」

その隙を突き、僕は自分の腕を振り上げ、力の限り一方通行の顔面を打ち抜いた

「がアツ！？」

貧弱の僕が殴ったにも関わらず、一方通行は声を上げ、地面に倒れこんだ

「『あれえ？』 『おかしいなあ…』』 『学園都市最強の一方通行なら簡単に避けられるような攻撃だったのになあ』 『しかも貧弱体質な僕の攻撃』

で倒れこんじゃうって様子がおかしいぜ？』」

僕は立ち上がりながら、彼にそう言う

さっきまでボロボロだった僕の体の傷は、いつの間にか完全に消えている

瀕死状態の僕が一瞬で無傷になったのに、一方通行はさらに驚愕する

「『まあでも！』』 『学園都市最強の一方通行さんにはまったく利いてないよねえ、最低の僕の攻撃なんて！』」

「てめエ、なにしやがったア！」

怒りを露にして吼えてくる

「『言っただろ、「甘え」って』 『君は僕に触れた』  
『それ自体がもう既に甘いって言ってるんだよ』」

「それがどうしたってんだよ！」

「『僕は戦闘中ずっと考えていたんだ』 『螺子を  
跳ね返してる君には僕が超能力者相手に使う戦法なんて  
使えない』 『常時使用型の超能力者の君なら尚更ね』」

『でも、君が僕に触れてくれたから』 『僕はそれを実行できた』

やれやれと言わんばかりに僕は首を左右に振る

それに苛立ちを覚えたのか、睨む力をさらに強くする一方通行

「ワケ分かんねエこと言ってるじゃねエ！」

俺が訊きてエのは、そんなことじゃねエんだ！」

ついには僕の曖昧さにキレる一方通行

表情を荒げ、今にも僕を殺したくて

殺したくて仕方が無いという表情

でも、混乱しているのか向かってこない

「『君が僕に触れている限り』 『僕は  
君の演算を「なかったこと」に出来る』」

「…あア？」

「『だいじょーぶ』 君はその内理解できると思っから』  
『<sup>マイナス</sup>過負荷にとつて”常識”はどれほど荒唐無稽な現実かを』」

僕は螺子を構え、再び臨戦態勢に戻る

彼もそれに対応し立ち上がり、  
警戒し始める

はあ、没頭の繰り返しだね

これじゃあ無限ループになるんじゃないのかな？

「そこまでです、一方通行、とミサカは貴方の好戦的姿勢を注意します」

だが、それを止める声が辺りに響く

一方通行は声のした方向、つまり自分の後ろへ振り返ると、  
僕にとつては予想もしなかった光景が広がっていた

一方通行の背後には、何人も常盤台の制服を着た生徒たち

その全員が、あの御坂さんとまったく同じ姿なんだ

双子なんてレベルじゃない

何人も、最低で七人ぐらいは居る

そんな御坂さんの集団を、僕はただ啞然としながら見ていた

「なんだてめエらか。俺の邪魔をするんじゃないよ」

「無意味な戦闘は実験に支障を齎します、とミサカは貴方のその好戦的姿勢をもう一度注意します」

実験？

これは興味深い言葉を聞いたね

レベル5の第一位がするような実験だ、きっとロクなものではないのは確かだ

「ちっ…」

一方通行はそれに従い、嫌々ながらも彼女たちに着いていく

あの一方通行が素直に従うなんて、よっぽどその実験が大切で、精密なものなんだね

歩き出す一方通行は止まること無く、僕の方を振り返る

その表情は未だに殺気で満ちている

「てめエ、名はなんだ？」

「『ただのお茶目な人類最低』<sup>マイナス</sup> 球磨川雪でえーす！」

人懐っこそうに明るく挨拶するけど、彼はウザそうにそれを聞いた

なんで僕はこつも空振りをするんだろう？

「そうかよ。なら覚えとけ球磨川ア、てめエは俺が必ずぶつ殺してやるよオ！ 分かったかア、三下がア！！」

随分とお怒りのようで

まあ、突然現れた奴に能力を無効にされたあげく、一発殴られたんだからね

それにしても、一方通行の能力はなんだったんだろう？

僕の攻撃を殆ど跳ね返して、パワーも化け物染みていて、速さなんか目で追えるレベルじゃなかった

でも、何故か僕の<sup>オールドフィクション</sup>大嘘憑きには効果があった

大抵の現実になら効果がある過負荷だけど、流石に僕でも”才能”まで「なかったこと」には出来ないしね

つまり、あの身体能力は彼の超能力から来ているって意味だ

常時使用型の超能力…複雑だね

でも、収獲はあった

一方通行はどつやら完全無敵ってわけでも無いみたいだ

<sup>オールドフィクション</sup>大嘘憑きは利くし、攻撃に対しての耐性は皆無に等しい

大抵の攻撃は跳ね返すというなんともチートな能力だけど、穴は少なからず存在する

それなら、実際に戦う時は却本作りだつて効果があるはずだ

ブックメーカー

却本作りさえくらわせれば、僕は

一方通行なんて簡単に殺せる

ブックメーカー

つまり、却本作りさえあれば僕はアイツを倒せる…

それが分かったのは、不幸中の幸いかな？

災い転じて福と為す

まさにそのことわざ通りだね

「『もしもし？』」

僕はすぐさま電話を掛けた

《ああ？ もしもし？》

向こうの声の主は機嫌が悪そうに電話に答えた

「『あ、敦くん？』 『ゴメン迷惑だった？』」

《いや、別に迷惑じゃねえんだが、なんというか  
タイミングが悪いつていうか…》

タイミングが悪い？

どういう意味だろ？

「『タイミングが悪い？』」

《そういうところなんだが…うわっと！

悪い球磨川先輩、ちよっと切る！》

銃声が聞え、敦くんの焦ったような声が聞えると、

電話は通話が終了した

まさかとは思うけど…

他の二人にかけても同じ対応

今まさに暗殺されようとしてるよね？

十八話 「まいっとな…」 (前書き)



十八話 「まいったな……」

「まいったな……」

そう呟くのは、建物の物陰に隠れている過負荷

周りの人間を不幸に陥れ、何人もの人間を  
実際に殺害している殺人鬼、木更津敦

現在は負運性という無能力マイナスを持ち、球磨川雪の仲間である

そんな彼は、苦笑いを浮かべていた

木更津の隠れている建物の向こう側には、  
銃を構えたとある人物

無情、まさになんの感情も表さず木更津を銃撃しているのは、  
球磨川を襲撃した人物と瓜二つ

常盤台中学の制服を纏い、茶髪の短い髪

ミサカと名乗ったそれは、容赦なく木更津に銃弾の嵐を浴びさせて  
いる

一体なにがなんだか彼には分からないのだが、  
一応は敵と認識し、現在は反撃のチャンスを伺っている

木更津はナイフ一本に対し、あちらは突撃銃

新型のF2000R突撃銃だった

殺傷能力、性能、信頼性、その全てが

元の銃であるF2000より強化されていた

高性能の銃による銃撃により、木更津は  
まったく身動きが取れなかった

だが、隙はかならずある

一旦銃撃が止まるのを確認すると、

木更津は建物の影から車の影へと接近する

少しずつ接近していった

「まったく…俺がなにしてたってんだよ…」

面倒臭そうに呟くが、それは再び再開した銃撃により掻き消された

現在、彼は弾切れを狙っていた

通常の突撃銃のマガジンは一つにつき20発から  
50発の銃弾が装備可能である

襲撃が開始されてから十五分も経っていた

つまり、それに従い

「（よし…！）」

弾もとうとう底をついた

銃撃が終了したのを確認し、木更津はゆっくりと面影から出て行った

「よお、クソ餓鬼」

ミサカは無言で彼を見詰める

「なに無視してくれてんだ？ まあいい。なににより大事なのは、てめえが俺の命を狙ってるってことだ」

ナイフを取り出し、手で遊ばせながら言う

「俺の命を狙ってるんなら、俺がお前を殺しても正当防衛ってことだよな？」

ケラケラと笑いながらそう問いかけた

「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

ナイフを強く握り締め、ミサカに向かって走った

それに応戦するべく、体に電気を纏わせ電撃を放つミサカ

「へえ、発電能力者かよ？ それなら殺す理由ももう一つ出来たなあ！」

能力者を殺す目的を持つ木更津にとって、

彼女は絶好の獲物<sup>てき</sup>だった

「木更津敦、やはり情報通りの殺人鬼ですね、  
とミサカは貴方のバトルジャンキーに少し引きます」

「言ってくれるじゃねえか！」

電撃を避け、ナイフをミサカに振り下ろした

一方通行との実験用に創られたこともあり、  
とてつもない反応力でかわした

そのまま当たることなく、ナイフは地面に深く突き刺さる

「終わりですん、とミサカは武器を失った  
貴方に電撃を放ちながら言います」

「終わり？ 誰がだ？」

突然、ミサカの立っている道路に巨大な亀裂が入った

それは見る見るうちに広がり、やがて  
巨大な幅の浅い穴が出来ていた

それに足を取られ、バランスを崩すミサカ

「わお、アンラッキーだな。運悪くその地面が  
道路を支えてたみてえだ。残念残念」

足が抜けず、その場を動けないミサカに、

木更津は少しずつ歩み寄った

ナイフを手に、狂気で満ちた笑顔を向けている

「くツ…！」

「わりいなあ、でもこれでも俺は殺人鬼なんだ。

自分の命を狙った奴を許すほど、俺は優しくねえんだ」

目の前まで接近すると、ナイフを振り上げる

「じゃあ、あばよ」

そのナイフを振り下ろした

短く声が発せられると、辺りはシーンと静かになった

木更津の顔には、返り血が飛び散っている

「ちツ…折角洗った制服が台無しじゃねえか…」

返り血によって赤い点が付いてしまった

ワイシャツを見ながら、彼はそう呟く

目の前の死体になど目もくれず、

とても中学生を殺した後の態度ではなかった

「はあ…説明すんのがめんどくせえ…」

頭を掻きながらそう呟き、彼は帰路へと着いた

この日、何者かによって頭を刺された死体が道路のど真ん中で見付かったという

その頃、駅でも騒動が起きていた

駅で待っていた人間は全員避難され、通常の電車も止められている

車での通行も止められ、警備員への出動要請が下っている

現在は、特別に配備された電車により近くの警備員の部隊が現場に駆けつけようとしている

そんな閉鎖された駅の中に居るのは、一人の少女

「まいったな……」

自動販売機の後ろで身を隠すのは、過負荷の清瀬真希

電車を乗ろうとしたところ、何者かに銃撃され、現在に至っていた

自身の過負荷である偽良<sup>ノットクリアー</sup>性もまったく通用せず、途方に暮れていた

偽良性は自分への負の感情を他人に押し付ける過負荷である

通常ならどんな敵でもその感情を別の人に

向けさせ、自分は手を下さず倒すことが出来る

でも、今回は違っていた

相手は清瀬を殺そうとしているのにも関わらず、

まったく負の感情を向けていた無かった

敵意も無く、憎しみも無く、怒りも無い

そんな状態でも尚、清瀬を殺そうという意思はあった

つまり、彼女の過負荷はまったく無意味だった

隠れながら思考を繰り返す

「（いやあ、まいったなあ…この子にボクの

過負荷が通用しないなんて思いもなかったよ。過負荷が  
役立たずになるとボクは普通の何の力も無い女の子なのに）」

過負荷が無ければ、清瀬はただの無力な人間

戦闘能力なんて勿論なく、いわば摘み状態だった

球磨川の螺子のような武器も無く、木更津の

ような戦闘に関する知識や身体能力も勿論皆無だった

丸腰状態で武装した相手に勝つ

清瀬にとってはほぼ不可能なことだった

「（これなんて無理ゲー？ はあ…せめて  
雪くんの大嘘憑きオウルライクシオンみたいな出鱈目な過負荷があればなあ…）」

打開策が見付からず、諦めたような溜め息を吐く清瀬

だが、それを相手が許すはずも無く

「うわあ!?!」

隠れていた自動販売機が突然嵐のような弾丸に襲われる

「目標を見つけました、とミサカは隠れていた  
貴方に対し多少イライラしながらも、攻撃を開始します」

「ボクだって死にたくないんだよ…」

益々身動きが出来なくなった清瀬

すると、目の前に大きな物体が落下していた

それは駅の天井に取り付けてあった時計だった

ミサカの銃撃により、鎖が外れ時計が落ちてしまったようだ

「あの銃でも時々に変なところに弾が飛ぶんだね…あ!」



なにかが閃いた清瀬

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、彼女は地面に落ちていたジューズの缶を拾う

それをミサカは不思議そうに見詰める

「おりゃ！」

清瀬はジューズをミサカとはまったく関係ない遙か上空へと投げた

意味が分からず、無視して銃撃を続けるミサカ

「ッ!？」

突然、二羽のカラスがミサカを襲い始めた

まるで子を殺された親のようにくちばしを突きつけるカラスを、ミサカはただ振り払おうとしていた

「ブンゴ」

混乱している中、清瀬はミサカに歩いていき、落としていた銃を取り上げ、遠くへ投げ捨てた

そのまま銃でミサカを撃てば終わらせられるが、清瀬は銃の知識がまったく無い

下手に撃てば肩を脱臼させてしまうほど、軍用銃は扱いが難しい

それを理解していた清瀬は、あえて使用せずそのまま捨てていた  
「よっこいしょっと…」

カラスを振り払おうと暴れていたミサカはホームの端に居る

清瀬はそんなミサカに自身の足を突きつけると、  
そのまま駅のホームから蹴落とした

そして、タイミング良く向かってくるのは警備員アンチスキルの搭乗した電車

カラスを振り払ったミサカはようやく  
自分の状況に気付いたが、時は既に遅し

電車は容赦なく迫ってきている

「バイバイ」

笑顔でミサカに手を振るう清瀬

その瞬間、ミサカの体は電車に遮られ、見えなくなった

「まいりましたね…」

過負荷最後の一人、琴吹海咲も同じ眩きをしていた

だが、二人と違い琴吹は逃げも隠れもしていない  
堂々と道のど真ん中に立っている

そんな琴吹に銃弾の嵐を浴びさせているのは、  
やはり同じくミサカ

だが、弾丸は当たることなく逸れ、  
周りの建物や物へと弾かれていた

彼女の過負荷、絶対禁止

その以前の能力は、『認識したものを弾く』ことだった

物体液体気体人間動物植物創造物自然物問わず、  
問答無用で全てのものを拒絶し、弾くことが出来た

だが、そんな完全無比な過負荷は、数日前に魔術師によって破られていた

琴吹にとってそれは許せない事実だった

唯一の無才能である過負荷が、破られた

自分のアイデンティティを失ったような  
感覚に陥った琴吹は、球磨川にあることを頼んだ

それは、自身の過負荷をもっと駄目マイナスにすることだった

元々過負荷は自分が不利益になるような能力

それをさらに駄目にする事で、その効力をより荒唐無稽に、理不尽にすることができる

琴吹は球磨川こそ最低の過負荷だと信じていた

出来るかどうかは知らなかったが、それでも球磨川に頼んでいた

それを訊いた球磨川は、軽く「『いいよ』」と言っただけだった

喜びに満ちた琴吹だったが、次の瞬間顔を顰めた

球磨川が了承した瞬間、自身に大きな螺子が刺さっていた

意味が分からず混乱する琴吹に、球磨川は優しく「『安心して』」と言った

次の日から琴吹の過負荷は変わっていた

それは…

「鬱陶しい銃弾ですね、いい加減諦めたらどうですか？」

認識せずものを弾く能力だった

球磨川に螺子で貫かれてから、琴吹の全身には常に絶対禁止が掛かっている状態になった

一方通行の反射や絹旗の窒素装甲のような、  
自動防御の能力が備わっていた

つまり、今の琴吹にはほぼ全ての攻撃が無意味だった

「しかし…退化しんかした私の過負荷かふかって本当に最低マイナスですね。  
球磨川さんと同じくらい出鱈目だと自負しています」

ミサカに向かってそう告げる琴吹だが、  
答えは返ってこない

無表情のまま自分を無視するミサカに  
少し苛立ちながらも、琴吹は冷静を保つ

冷静さを少しでも欠けば絶対禁止が解かれる恐れがあった

その瞬間、琴吹は蜂の巣にされる

故に琴吹は一時も緊張を解けなかった

「…弾切れですね、とミサカは自分が弾を無駄使いたことに  
自己憎悪を抱きながらも、貴方との戦闘に集中します」

「そりゃ自己憎悪になりますよね、利かないと  
知っているのに自棄になって弾を打ち続けるんですもん。  
貴方意外と馬鹿なんじゃないんですか？」

「他人を見下すような話し方をする貴方よりはマシだと  
自負しています、とミサカは貴方の毒舌に呆れます」

「毒舌じゃありません、事実を述べているだけです」

自分の毒舌を理解できていない琴吹に、  
呆れたため息を吐くミサカ

それにさらに苛立ちを覚えながらも、琴吹はここから去ろうと歩き出す

「逃げるんですか？ とミサカは貴方の行動に疑問を抱きます」

「逃げてるわけじゃありません、ただもう貴方とのやり取りをするのが面倒になって立ち去るだけです」

「ですがミサカの命令は球磨川雪および過負荷全員の暗殺です、なので逃がす気はありません、とミサカは貴方の行動を却下します」  
立ち去ろうとする琴吹を止めるかのように電撃を打ち出した

それは真っ直ぐ琴吹に向かっていくが

「はぁ…話の分からない人ですね」

まるで一方通行の反射のように電撃はその道を変え、真っ直ぐミサカへと引き返した

「ぐう…！」

それを直撃したミサカは、感電し倒れる

「私は敦さんみたいな殺人鬼じゃないので、これで失礼します」

それを見届けた琴吹は、満足気に歩き出す

感電し身動き一つ取れないミサカは悔しそうに立ち去る琴吹を見詰めていた

~~~~~

「『やつほー！ 皆生きているかい？』」

僕はしばらく時間を潰すと、またあの三人に電話を掛けていた

流石にこの時間になると戦闘は収まったのか、三人とも電話に出ている

今は四人で元気に通話中さ

僕たちの携帯は新しい学園都市製の携帯で、複数の人と一辺に喋れる新機能付きなんだ

こつこつって便利だよな〜

《生きてなかったら電話に出ねえだろ…》

《いやいや敦くん、敵に携帯を取られる可能性だってあるよ…》

《私も清瀬さんと同意です》

うん、全員生きてるね

まあたとえ殺されてたとしても、直ぐに大嘘憑オールフイクションきで生き返らせていたけど

「『いやいや』 『君たちは死なないと思うよ？』 『だって負運性ならまず

戦闘で役立つし』 『偽良性なんてチート級の能力だぜ？』 『絶対禁止なんか

それ以上にチートだし』 『それに比べて僕なんか…』 「

《《お前が言つな！！！》》

十八話 「まいったな…」 (後書き)

作者はあやまりました

はい、まさか二人もミサカを死なせてしまいました

実験番号は19000以上で実験に支障は

出ないということにしといてください…

十九話 『劣等性も優等生も関係なく』（前書き）

駄目文、強引展開、そして急展開に注意してください

十九話 『劣等性も優等生も関係なく』

薄暗い路地

怪しげな建物が複数立ち並ぶこの街の地域を、僕は相変わらず一人で歩いている

真つ昼間にも関わらず、光の進入を一切許さないこの暗黒の空間は、まるで真夜中のような風景だ

最近三人の付き合いが悪い

敦ちゃんは相変わらずどこかを彷徨っていて、真希ちゃんは学校の勉強らしく自分の部屋に籠っている。海咲ちゃんは既に出かけていて電話してみたなら”ゲームを邪魔するな”って怒られちゃうし、本当に寂しいんだ

今回は重要なことなのに、しょうがないなあ

僕が只管この暗い路地を歩くこと数分、一つの空家で止まった

窓は割れ、ドアはほぼ崩れている

電気だけは点いているから、おそらく中には人が住んでいる

でも、そんなことは僕には関係ない

なぜなら、この家から発せられているこの異様な雰囲気こそ、僕の求めていることだからさ

僕は堂々とその扉を開けると、無断で家の中へと進入する

不法侵入？　僕は悪くないよ

中に入るや否や、住人全員の視線が僕に突き刺さる

僕は辺りを見回してみる

うーん：見る限り四人つて所だね

男子三人、女子一人

その四つの視線の全てが僕へと突き刺さっていた
正直少し心が痛いかな

だって、まるで不審者を見るような目なんだもん

「『ええ』　『最悪で災厄で最低で理不尽で
完全なる人類の屑である皆さん』　『こんにちは』」

僕は優しくそう挨拶する

だが、ここの住民たちは一向に動こうとしない

硬直したまま全員が瞬きもせず僕を見詰めていて、
中には口をおかしな子みたいに空きっぱなしの奴までいる

あはは、どうしたんだろう？

「『僕は球磨川雪』『どうぞよろしくー!』」

頭を下げ、礼儀正しくするが、それでも
まったく反応を見せない四人

はあ、せめてなにか答えてくれよ…

いい加減この状況に僕も飽きてきたし

「『あれえ?』『どうしちゃったんですか皆さん方?』」

「……」

すると、ようやく硬直が解けたのか一人が無言で
僕に近付いてくる

やはり学園都市なだけあって制服を着ているけど、
帽子を深くかぶって表情が分からない子だった

体格からすると男子かな?

その子は目の前まで来ると、立ち止まった

「『うん?』『どうしたん』」

直後、僕は家の外へと殴り飛ばされていた

彼の拳は容赦なく僕の顔面へと食い込み、
数箇所を”ボキボキ”と鳴らせながら吹き飛ばした

血を口から少し吐き出すも、この程度の
暴力ならもう既に慣れてる

「な、仲嶋くん！？」
なかじま

家の中からその帽子の少年を呼ぶ声が聞える

仲嶋くんはそれに応答し後ろを振り向いた

「なんだ？」

「い、いきなり殴るのはさすがに拙いんじゃない？」

「こんな怪しさ全開の奴相手にそんな甘えことなんか言ってもらえ
えよ」

弱々しそくに誰かが彼に注意してるけど、
彼はそれを否定している

まあ、仲嶋くんの言うことも一理あるけどね

「『怪しいなんて酷いなあ』『僕はただ挨拶しただけなのにさあ』」

「『ツ…！？』」

大嘘憑きにより顔の傷が『なかったこと』に
されているのに驚く二人

最低でも数箇所は骨が折れていたはずなのに、
無傷で立ち上がったんだから無理も無いけどね

「お前…！」

「やめてください仲嶋くん」

再び攻撃しようとして接近してきたけど、それを制する声が響き、いったん止まった

穏やかで清楚なそれは、礼儀正しさの極み

「『君は？』」

「申し送れました、わたしは春木直人はるき なおとという者です。

自分の同僚が無礼な対応をお見せし、申し訳ございませんでした」

礼儀正しいその話し方は、まるで執事みただった

制服もちゃんとネクタイを綺麗にされていて、かけている眼鏡には汚れが一つもついていない

見るからに紳士って感じの人

今時こういう人も珍しいんじゃないのかな？

「『別にいいさ』『理不尽なんて慣れてるし』」

「改めて紹介致します。隣の帽子をかぶっているのが仲嶋礼二くんなかじま れいじです。あのような態度を取りましたが、実際はとても友達思いの良い人です」

とてもそうには思えないけどね

だって、警告なしにいきなり殴ってくるんだぜ？

「仲嶋くんを注意したのが雛像ひながた涙紗なみささんです。気弱な方ですがとても優しく、争いを好まない方です」

これまた今時は珍しい子だね

最近の子供ってあの御坂さんとか四人組の光線の人とかで好戦的でツンツンしてる子が多いんだもん

だからこんな人も最近恋しくなってくるんだ

真希ちゃんまきちゃんは僕を苛めるし、海咲ちゃんうみさきちゃんは殆ど無感情で毒舌だから意地悪だし…

「最後に一言も発していないのが二ノ宮このみや和希かずきくんです。基本は無害な方なので、安心してください」

おお、そういえば居たね

さつきからずっと部屋の壁に寄り掛かっているだけで一言も発せず、ずっと俯いている

最初は具合が悪いと思ってたけど、素なんだね

「『個性豊かな方だねえ』 『僕は球磨川雪』」

「個性豊か？ お前が一番そうだよ」

僕って個性的なのかな？

ただの過負荷だし、どこも個性的な所なんて無いと思うけど…

「『そんなことよりさ』 『僕はただ君たちに質問がしたくてここに来たんだよ』」

元々の目的を失うところだったよ

本当は殴られた時点でブチ切れてこの場に居る全員を螺子で螺子伏せようと思ったけど、なんとか抑制を利かせた

「はて？ 我々にいつたいなんの用でしょうか？」

「『君たち全員』 『^{マイナス}過負荷って知ってるかい？』」

「なッ!？」

僕がマイナスと言った瞬間、春木くんが驚きの声を上げる

その反応からすると過負荷の存在を知っているんだね

「お前…どこでそれを聞いた!」

敵意丸出しで睨んでくる仲嶋くん

雛像さんは小さく怯えて部屋の隅に走って行って、二ノ宮くんは初めて僕を見上げた

一人を除いて全員が驚愕状態

おそらく過負荷というのはまだ世間じゃあまり知られていない存在で、それを堂々と言った僕を怪しんだんだろう

「聞いたもなにも」 「分からないのか？」

「分かるかよ！ 俺たち過負荷を狙ってるっていうんなら、
知ろつが知らなかつが関係ねえ！ 敵だ！」

あからさまに突っ込んでくる仲嶋くん

それに呼応したのか、壁に寄り掛かっていた
二ノ宮くんもこちらに向かつて走り出す

おそらく”敵”という言葉に反応したんだと思う

この二人の過負荷も戦闘能力も皆無だけど、
まあしょうがないかな？

「待ってください、二ノ宮くん！ 仲嶋くん！」

だが、それを聞かず止まらない二人

雛像さんは目と耳を堅く閉じて見ないようにしている

「『まったく…』 』ただ文章を一つ言っただけなのに
なんでそんな敵意剥き出しで迫られないといけないのかな？」

『これじゃあ 』

『僕が止めないといけないじゃないか』

直後、向かってきた二人を含め家の中の全員が壁や床に貼り付けられていた

向かってきていた仲嶋くと二ノ宮くんは床に螺子で服を縫いとめられていて、他の二人も同じく壁に縫い付けられている

本当はこの二人でも足りたんだけど、まあついでに春木くと雛像さんもかな？

万が一攻撃されたら駄目だし

「「「「「！！！！」」」」」

あまりの一瞬の出来事に全員が啞然としている

まあ、二ノ宮くんはまだ黙っていて分からないけど

「『僕は悪くないよ？』』君たちが突然襲ってきたから反撃しただけで』『わざと攻撃したわけじゃない』

『正当防衛だから』」

無関係な人も攻撃してるけど、それは黙認してくれないと

仲嶋くんにブチ切られると思ったけど、

この状況に啞然としてしまっていて固まってしまってる

でも、まあ友好関係を築くのが僕の目的だから、直ぐに螺子を抜き取る

最初に皆の螺子を抜き、最後に仲嶋くんの螺子を抜き取った

一番最後に抜き取った理由は、彼が一番好戦的でちよつと怖かったからね

「『ガアツ!?!』」

抜いた瞬間、突然僕は”殴られた”

いや、正確に言うと”殴られていない”

彼は一切手を出していない、なのに

僕の鳩尾には拳が食い込むような感触があった

衝撃波じゃない、ちゃんと殴られたって感触なんだ

「やられたままじゃ俺の気が済まないんだよ!」

仲嶋くんが僕に向かってそう叫ぶ

一体なんなんだ、彼のスキルは…？

「へ、驚いたか？ お前、過負荷を知ってるんだろ？
だったら教えてやるよ。俺の過負荷は最低労働^{スカルファクション}。」

”過程を飛ばして結果だけを残す”スキルだ」

過程を飛ばすスキル？

僕はその能力に疑問符を浮かべる

イマイチ理解できない…

「『結果だけを残すスキル？』」

「そつだ。俺はかなりのめんどくさがり屋なんだ、
わざわざ途中のことをするなんてやりたくねえんだ。」

まあいわば、行き過ぎた結果主義者か？」

結果主義者ねえ…

要するに、結果だけを生じさせるスキルか

さつきは僕を殴ったけど、その”殴る”という
過程を飛ばして”殴った”という結果を生じさせたんだ

自らは手を出さなくても、相手を攻撃できる

刃物で”斬る”という過程を飛ばせば、
”斬った”という結果だけを残せる

つまり、戦闘においてはかなり強力なスキルだ

”努力”なんて無視して”結果”だけを残せる
ようなスキル、ある意味かなり最低な過負荷だ
マイナス マイナス

「『ぐツ…！』」

頬に衝撃が走り、床に倒れこんでしまう

またあの攻撃か…

絶対に避けられない攻撃って、どんなチート能力だよ？

「やめてください仲嶋くん。これ以上の戦闘は無意味です。
我々もこれ以上目立つと後が厄介になります」

追撃しようとしている仲嶋くんを、春木くんが止める

「『なにか遭ったのかい？』」

フラフラと立ち上がりながら僕は彼に訊く

ここまでしてでも過負荷の存在は知られたくない理由、
それは迫害や軽蔑なんて優しいレベルじゃない

この雰囲気からすると、もつと重大なことだ

「見たところ貴方も過負荷ですし、お教えしても良いでしょう。わたし達は追われているのです」

「『追われてる?』」

「貴方も知らないのですか? 統括理事会は既に”過負荷”^{マイナス}という存在を知っています」

へえ、なるほどね

でも、何で知られたんだ? 僕たちはあまり暴れていないし、どちらかと言うと結構大人しくしていたつもりだけど?

まあ、時々騒動を起こしてるけど

「『なんで統括理事は過負荷のことを知ってるの?』
『少なくとも僕たちは情報なんて重要なことは一切話していないよ』」

「どうやって知ったかは不明です。ですが、知っているのは事実ですし、現在は我々にとってはかなり厄介な連中です」

厄介だって?

統括理事会は基本、表の世界に関わらないはずだ

いつもは裏で暗躍していて、そもそも僕たち過負荷には無関係のはずだ

「統括理事会は、過負荷の捕縛を開始しました」

「『……』」

過負荷の…捕縛？

「我々の過負荷は彼ら統括理事会にとっては未知の能力、研究対象としては裏ではとても注目されています。ですので、固体を捕縛し研究

するのを目的として行動を起こしています」

なるほど、確かに厄介だね

統括理事会は巨大な組織だ

それこそ僕らでは相手にならないほど

その組織が動き出した今、僕たちはかなり危険な立場に居る

僕たちを何度も殺そうとしたのも、多分死体の解剖などが目的なんだろう

クソ、統括理事はもう既に動き出していたのか…！

なら僕たちももたもたしてられないね

「この場に居る全員はかつて統括理事によって派遣された部隊に追われた人です。我々は監視から逃れ、現在は居場所を転々としな

がら
なんとか生き延びています」

「『…うん』 君たちも大変なんだね』」

「貴方も同じなのでしょう？ 本当に過負荷なら」

まあ、僕たちは基本やばい状況にならない限り過負荷の使用は控えてるから

あまり知られていないし、魔術師の連中ぐらいだよ、僕以外の過負荷の能力を実際に目の当たりにしているのは

まあ、他の三人は分からないけど、僕と一緒に居た時はそうだったな

でも、多分僕の方が過負荷としてのインパクトが大きかったと思うから僕しかまだ狙われないと思うけど

「『ま』 『命は何度か狙われたさ』 『実際に二度以上は死んでるし』」

「ッ…！」

死んだことがあるという事実に関を引攣る春木くん

それに呼応して仲嶋くんと雛像さんも

少し驚いている

まあ雛像さんは益々怯えただけだけ

二ノ宮くんは相変わらずポーカーフェイス

「死んでもなおお生きているとは、貴方は何者なんですか？」

「『ただの劣等な人類最低さ』」

でも、僕はそれだけ言うつと話を切り上げる

まだ決まったわけじゃないから、彼らにはあまり情報を与えたくない

「もしよろしければ我々と共に来ませんか？ その方が貴方も命の安全が保たれる確立が上がるかもしれないよ？」

へえ、あつちから訊いてくれるんだ

それはちよつと予想外かな？

でも、僕はその提案に笑みを浮かべる

「『知らねえよ』」

「…はい？」

僕の言葉にキョトンとする春木くん

まさか、断れるとは思っていなかったんだね

「『知らねえよ君たちの都合なんて』『なんで僕がまだ会って数分しか経って

いない他人にそんなことを言われなきゃいけないのさ?』『うざいんだよ偽善者』」

「お前…!」

仲嶋くんが僕を殺気を込めた目で睨んでくる

「『おいおい』『でもだからって僕はこの提案を断るわけじゃないぜ?』『』」

「どつという意味ですか?」

「『君たちが僕の仲間になればいいじゃないか』」

「はあ? ふざけんな! なんで俺たちがお前の仲間にならなきゃいけないんだよ!」

とうとうブチ切れる仲嶋くん

まあ、ついさっきあんなことを言われた後に僕が
”仲間になれ”って言ったんだから当たり前だけどね

多分敦ちゃんでも怒ってるよ

「『僕には目的があるんだ』 『そのために君たちの手助けが必要だ』 『既に仲間は三人居る』 『人数は丁度二倍になるんだ』 『悪い話じゃないだろ?』」

「その目的とは…お聞きしても宜しいでしょうか…?」

「『統括理事に追われるのが嫌なんだろ?』 『なら殺せば良いんだ』」

『僕は学園都市の超能力者や高位権力者を抹殺しようとしている』
『だから』

「そのために君たちの力が必要だ」

言葉を失う四人

この学園都市には何百人も超能力者が居る

その全員を殺すなんて考えられないと思っているんだろっ

正直、皆そう思うだろっ

「……お前、頭がぶっ飛んでるんじゃないかねえのか?」

「『なら逆に問うよ』 『君たちは許せるか、このプラスで溢れている学園都市を?』」

「ッ…」

言葉が詰まる中島くん

「『この学園都市は僕たちをこんな境遇にまで落としたんだぜ？』
『こんな薄暗い路地のボロボロの家に住まされ』 『実験動物のように
僕たちを追いまわし』 『毎日ビクビクしながら過ごさないとイケな
い』」

徐々に、彼らの仕舞いこんでいた気持ちを解き放とうとする

「『表に出れば迫害され』 『貶され』 『差別される』 『理不尽な
暴力も

当たり前』 『そんな腐った都市を君たちは許せるのか？』

『僕は出来ないね』 『憎くて恨めしくて堪らない』

『だから僕は超能力者^{エリート}を殺すんだ』

『こんな腐った世の中を生きているあの上がり調子の
連中なんて』 『全員死ねば学園都市は等しく平等な所なんだ』

『嫌われ者の僕たちにとってそれほど難しいことはない』

『でも、アイツ等は知らないんだよ』 『数学と同じでプラスは
マイナスでかければ簡単にマイナスになるって』

『つまり、あの連中はただの思い上がりで強くも無い』

『だから、屑で塵で最低な僕らが証明しようぜ？』

『差別格差理不尽不条理不平等底辺下位なんて関係ない』

『^{マイナス}劣等性だつて^{プラス}優等生に勝てるんだよ』

十九話 『劣等性も優等生も関係なく』（後書き）

今回は最低労働が登場しました

（過負荷の説明コーナー）

スカルファッション
最低労働

”過程を飛ばして結果だけを残す” 過負荷

物事の起こすときの途中過程をスキップして
その結果だけを引き起こす過負荷

つまり、努力を完全に無視した最低の過負荷

鉛筆を持つだけで”書く”という過程を飛ばし、
”書いた”という結果を発生させられる

刃物を持つだけで”斬る”という過程を飛ばし、
”斬った”という結果を発生させられる

拳に力を込めるだけで”殴る”という過程を飛ばし
”殴った”という事実を発生させられる

このように、努力もせず結果だけが出せる

攻撃になれば絶対に避けられない
凶悪な攻撃にもなる

投稿してくださったマックスさん、本当にありがとうございます

他の三人も能力は登場するので、お楽しみください

二十話 『それが現実なら』 (前書き)

今回は短いです

それと、読者様の過負荷も登場します

中途半端な話の終わりになってしまいましたすみません

*後半は微グロ注意

二十話 『それが現実なら』

「『つう…』」

相も変わらず血塗れで倒れている僕

ちなみに僕はマゾじゃない、どちらかと言つと
サディストだと思つ

それでも、いつも通り僕は瀕死状態になつてる

理由はとつと…

「やっぱ無理あつたんじゃないのか？」

倒れている僕を見下ろしている中島くんがそつ言つ

呆れたようにポケットに手をつ突っ込んで、
態度悪くしてる

彼がそつなつているのも無理は無いね

仲嶋くんのほかにも周りには春木くん、
二ノ宮くん、そして雛像さんも居る

雛像さんは若干は血を見て引いてるけど

本当に気が弱いんだね

「無謀を通り越して馬鹿だと思えます」

春木くんもそう告げる

少しはフォローしようぜ？

「す、すみません！ ま、まだ手加減できなくて……」

おろおろしながら雛像さんは謝ってくる

無理も無いね

今回、僕は雛像さんの過負荷を調べている

出来れば他の二人の過負荷も確かめておきたいけど、それはまたの機会で待っておくよ

既に皆は僕と一緒に来ることを受け入れたし

で、雛像さんを最初に選んだ理由はというと、

彼女が一番難関に感じるからだ

見たところかなり気が弱い

人を傷つけるのを嫌がり、とてもじゃないけど最低マイナスには見えない

しかもそれは真希ちゃんみたいに仮面でもなく、
本気に素であんな性格なんだ

それは少し迷惑かな…？

僕らの目的はエリートの特殺だぜ？

人を殺せなくちゃ意味が無い

だから、過負荷を確認するついでに他人を傷つけるのに慣れさせるためだ

そのために態々ボロボロになるのが僕なんだけど

はあ、やられ役はいつも辛いぜ…

「きゃ！？」

途方に暮れながらも僕は螺子を彼女に投げつける

不意打ちに驚いてまったく身動きが

出来なかったのか、その攻撃を直撃している

でも…

「『がはッ！』『くッ…』『』」

腹から血飛沫が上がり、大きな穴が開く

調べるとは言ったけど、まさかこんなに
出鱈目で最低な過負荷なんて…

「相変わらず顔に似合わずえげつない過負荷だよなあ、
涙沙の『無実殺人』は……」

彼女の過負荷、無実殺人

文字通り、無実でありながら殺人を犯せる能力だ

その能力とは、『自分の受けたダメージを殺意を抱いている相手に
二倍にして跳ね返す能力だ』

肉体精神問わず、あらゆるダメージを殺意の抱いている相手に与える

一見完全なる平和主義者の彼女とは縁遠い能力でも、そこが性質が
悪いんだ

雛像さんは無意識に他人への殺意を常に感じているんだ

本人は自覚が無い、でも事実彼女は僕に殺意を抱いている

無自覚で無意識に無意味に殺意を抱き、貰ったダメージを
そのまま相手に与えて跳ね返す

傷付くのが嫌で他人を傷つけるのが嫌な雛像さんらしい能力

名前通りまったくの無実

「『ゲホッ……』『なんで過負荷はこんなにチートが多いんだよ……』」

「だ、大丈夫ですか球磨川くん!？」

「『僕を名字で君付けで呼ぶのは君ぐらいだよ…』』でも
『これは僕の自業自得だから』 『君はなににも悪くない』」
「で、でも…」

跳ね返しているため、彼女はノーダメージ

つまり、この子には殆ど攻撃が利かないんだ

唯一の弱点は完全に無視することだけど、
そんなことしたらこの戦闘が無意味になってしまう

基本、こちらから攻撃さえしなければまったく無害だしね

だって跳ね返すダメージが無いんだもん

「『これは君に人を傷つけるのを慣れさせるためだから』
『僕がボロボロにならないと意味が無い』」

オールマイクッション
大嘘憑きも使っちゃ駄目だしね

それだと彼女の他人を傷つける実感が減ってしまうし、
傷付いても直ぐ治ると勘違いしてしまう

「そ、それでも別に球磨川くんじゃなくても…」

尚も僕を攻撃するのを嫌がる彼女

そんな様子には僕は深い溜め息を吐く

「『はあ…』』君にはもうお手上げだよ』』もう駄目だこりゃ』
『僕は諦めるよ』』なにをどうやってても君は僕を殺さない』』」
首を左右に振りながらやれやれと呟く

「『ここは一つ強引な手段を用いて』』続行させてもらつよ』』」
直後、彼女の腹部には巨大な螺子が刺さっていた

それも、彼女の無実殺人では効果を
表せないような特殊な螺子を

「なッ！？ 球磨川、どういうつもりだ！」

血反吐を吐かない僕を見て、
予想外の出来事に仲嶋くんが叫ぶ

「『彼女は自分の殺人衝動を無意識で心の奥底に仕舞いこんでい
る』』」

『だから僕はただその壁を少し取り外す努力をしただけさ』』」

螺子は外れるが、刺された箇所からは血がまったく流れていない
それどころか傷も一つ無い

「『ほら』』彼女の殺人衝動が来るぜ』』」

僕がそう言った直後、なにかが高速で僕の顔面にめり込んだ

拳銃から打ち出された巨大な鉄球のような

出鱈目な速さで突っ込んできたのは、雛像さんの拳

生身の人間からは想像もできない力

それは容赦なく僕に直撃する

一方通行に殴られたみたいに吹き飛ばされる

別の秋やの壁まで吹き飛ばされ、
辺りに瓦礫や木材などが散乱する

そこから這いずり出ると、目の前に立っているのは一人の少女

目は冷酷そのもので、以前の彼女からは想像も出来ない

「球磨川先輩：貴方いったい何をしたのですか！」

黙って見守っていた春木くんも、この
豹変には声を出さざるを得なかった

あその他の仲間たちにとっても、雛像さんの
この豹変っぷりは初めて見たらしい

「さっき言っただろ？」 「僕は彼女が仕舞いこんでいた殺人衝動
の壁を撤去した」

「今はもう雛像さんの殺人衝動を抑えるものは無い」 「つまり暴走
状態だ」 「だから

僕への殺意も比較的に上がって」 「彼女を縛り付けるものも無くな
ったから

あれほど身体能力が向上したんだ」 「

主に大嘘憑オウルフィクションきで彼女のその心の壁を『なかったこと』にしたんだけど

「なんてことを…!」

「『でも』 『僕だって黙って殺られるほど負け慣れていないさ』
『悪いけどこっちも殺す気で戦わせてもらっぜ?』」

雛像さんから返答は無い

恐らく言葉はなにも入っていないだろう

「『え?』」

本気になった僕だけど、次の瞬間思いもしない
光景が目に写りこんだ

さっきまで僕と彼女の距離の間には数メートルぐらい差があったはずだ

それが今は、目の前に立っていて僕の
顔を鷲掴みにしている

正直、ちょっとやばいと思う

「『あはは…』』 『こは穩便に』」

文章を終わらせることなく、僕は意識を失った

誰もがその光景に絶句していた

顔を鷲掴みにされていた球磨川

彼の頭は一瞬にして雛像に握り潰されていた

骨など意味を成さないかのように

簡単に握り潰され、辺りに大量の血が広がる

頭を潰された球磨川の体は、力を無くし地へ倒れる

地獄絵図と化したこの路地裏は、血の海によって

埋め尽くされている

鉄の匂いが強く広がっている

殺した本人は、大量の返り血を浴びながらも

未だに無表情のままだ

罪悪感はあるで無い

それこそが、『無実殺人』ノットキリングの本質だった

「雛像…お前…！」

帽子の少年、仲嶋が呆然とし呟く

だが、それに目もくれず雛像は血塗れの
手を払った

手に付着している大量の球磨川の血が
地面に流れる

高校二年生の学生とは思えない光景だった

だが、直後、糸が切れたかのように雛像は
その場で倒れこんでしまった

電池の切れた玩具のように動かなくなった
雛像に三人が駆け寄り

「安心してください。眠っているようです」

穏やかな寝息を立てている雛像に、
春木は安心した息を吐く

「それより、コレはどうするんだよ？」

仲嶋が指差したのは首の無い死体となった球磨川

新しい仲間をいきなり一人失ったという事実
に三人の思考は着いていけなかった

あれほどのマイナスイ性を持っている彼が、こんなにも簡単に死んで
いる

少し失望しながらも、彼らは残念そうにする

「とりあえずは放置しておくほうが妥当でしょう。

下手に弄れば我々が不利になってしまいます」

「ちくしょう、また警備員とかに目を付けられるのかよ……」

面倒臭そうに仲嶋は地面を蹴る

ただでさえ狙われている彼らにとって、風紀委員や警備員にも行方を追われるのは非常に面倒なことだった

益々捕まえられる可能性が上がってしまう

そんな思いを持ちながら、誰一人球磨川を弔う者は居なかった……

「『ちよつとちよつと』 『せめて一秒でもいいから僕が死んだのを悲しもうぜ？』」

背後から突然そんな声が聞える

括弧付けた台詞

聞いているだけで憎しみや苛立ち、憎悪を抱かせるその声質と口調

「『ま』 『それは先輩として許してあげよう』」

球磨川雪、そこに彼が現れていた

当然握り潰された頭は綺麗についており、
血塗れだったこの路地も新品のように綺麗になっている

あの惨劇が一切起こらなかったみたいだった

「馬鹿な！？ なぜお前が生きているんだよ！
さっき頭を潰されるところを俺たちが見てるんだぞ！」

いきなり生き返っている球磨川に驚きの声を上げる仲嶋

「そつえば仰っていましたね、既に二度も死んでいると…」

先ほどの球磨川の自己紹介をようやく思い出した
仲嶋は納得したかのように頷く

「……………」

二ノ宮は眉を少しビクつかせただけで
無表情を貫き通している

「『僕の過負荷のお陰さ』 『オルフィクション大嘘憑きつていつて』 『すべて現実を虚構に
マインナスできる無能力さ』」

「すべてをなかつたことにする能力だと！？ そんな出鱈目なもんがあつてたまるかよ！
大体、どうやってそれを死後に発動させんだよ！ 発動する本人が死んでるのによ！」

「『話の分からない人だなあ』 『たとえ死だろうが神の
奇跡だろうが悪魔の病だろうが』
」

『それが”現実”なら』 『僕はそれを「なかったこと」に出来る』 『

二十話 『それが現実なら』 (後書き)

今回は骸っちさんの無実殺人ノットキリングの登場です

〈過負荷の説明コーナー〉

ノットキリング
無実殺人

どんな些細なことでも他人に殺意を感じてしまう過負荷
それどころか、相手見るなり殺意を抱いてしまっている

そして、肉体精神問わず自分がダメージを受けると、
その殺意を抱いている相手へ跳ね返す

跳ね返しているので、自分にはダメージは無い

オリジナルより少し変更させてもらいました

最初はただダメージを殺意の抱いている相手へ
”与える”だけであって”跳ね返す”能力では
無かったのですが、話の都合上変更させてもらいました

骸っちさん、許可なしに変更してすみません

過負荷の提供、本当にありがとうございました

他のオリキャラの過負荷はあと二つです

オリキャラはこれ以上増えないと思うので
読者様が考えた過負荷の登場が厳しくなっ
てしましますが、なんとか登場させ続けられるよう
頑張ります

ちなみに過負荷の募集は既に終了しています

二十一話 『僕たちはとっくに終わってる』

「『今から君たち全員にやってもらいたいことがあるんだ』」

早朝、僕の自室は人で溢れていた

この前加入したほかの四人と元々仲間だった三人、そして僕自身も合わせて八人の人間だ

こんな狭い部屋に大勢の人が居るのは正直暑苦しいんだけど、仕方が無いね

「『君たちは超能力の研究について知っているかい？』」

この学園都市は常に新たな能力を発掘しようと研究を行っている

元々ある能力もさらに奥深く研究して進化させたり、より良く理解できるなど

この学園都市の人間にとっては常識レベルの研究

もちろん、僕の問いに全員が頷いた

「『この研究は新たな超能力を生み出すとても利益な^{プラス}ものなんだ』 『もしこれが進むと』 『超能力者はより厄介になる』」

つまり…

「『僕たちはここを叩く』」

「でも球磨川先輩よお、この学園都市には何百もの研究所があるんだぜ？ それを一つ残らず潰すっていうのか？」

敦ちゃんが不満気に言った

「『勿論そんな非現実的なことはしない』 『超能力者を

抹殺するのと同じ方法だ』 『一番大事で大きな研究施設を先に潰す』

『そして後から少しずつ他の研究所を潰そうと思ってる』」

そろそろ僕たちも本格的に活動を始めないといけない

統括理事会、いや、学園都市が過負荷ほくたちの存在を

知っているのだとしたら、攻め込まれるのも時間の問題だ

人数も十分集まった

ここからはレベル5との戦いだ

「でも、そんなので間に合うのですか？」

「『問題ないよ』 『あその研究は門外不出さ』 『それこそ』

『同じ学園都市の研究所であっても渡さないとと思う』 『つまり

コピーや複製などをまったくしていかないはず』 『大事なデータ

ならかなりの痛手で研究も格段に遅くなるはずだ』」

元々同じ学園都市の研究であっても、

やはり成果を公表する人はあまり居ないらしい

特に僕たちが襲撃しようとしている施設はね

あそこの研究は学園都市にとってかなり重要なはず

そこを潰せば多大な痛手になるだろうし

「なるほど、かなり友好的な初手になりますね」

海咲ちゃんも納得したように頭を振る

他の人も理解したみたいだ

「『今回襲撃する施設は二つ』 『確か超能力の研究が初めて行われた

二箇所だったはずだ』 『その施設のデータを全て削除』 『施設自体も破壊だ』

もし研究員を見かけたら再起不能にしておいてもらう

今回は研究に加担してる連中ならレベルを問わない

研究に加担しているっていうことは、

それなりに高位、または知能の高い奴だ

エリートなら、僕たちの敵

これは学校で良い成績を取ってるとかそついう問題じゃない

「『まず一番大きな施設を君たち七人で襲撃してくれ』

『あの施設は警備も厳重で大掛かりな仕事になりそうだ』

「残りの一個はどうするんだよ？」

「『僕が出る』」

時刻は午後四時半

既にあの七人は施設を襲撃し終えたところだ

もちろん、正確な時間なんて僕は分からないけど

ぶっちゃけると今朝別れた後はまったく連絡を取っていない

指揮は一番冷静な直人ちゃんに任せた

彼はリーダーシップもあって冷静な判断力もあるから

一番指揮官として適任だと思う

それに全員は納得だったし

ちなみに新しく入った四人を元々居た

僕以外の三人は意外にも友好的に迎えてくれた

海咲ちゃんも突つかかっていたし、最初の頃の敦ちゃんとはかなり違う

それに何気に敦ちゃんは落ち込んでいたけど

話を戻そうか

既に数時間は経っている

恐らくあの施設は廃墟と化していると

思うけど、僕の襲撃する施設はまだ無事だ

まあ、僕がまだ突入していないだけだけど

二箇所を同時に襲撃するのが普通なんだけど僕はそんなことはしない

一箇所を襲撃すると自動的に他の施設にも警報が鳴る

それだと一人だけの僕は不利だ

だからしばらく経って、少し落ち着いてきたのをまたダメ押しで襲うって寸法だ

時間が経ち油断した隙を狙うんだ

「『よし』『じゃあそろそろ行くこうか』」

ゆっくりとフェンスに囲まれ立ち入り

禁止になっている研究所へと向かった

フェンスをよじ登り、建物へと入ろうとする

「『カードキー……』」

研究所へ入るためにはカードキー式の
ロックを解除しないといけなかった

勿論そんなハッキング技術なんて僕には無く、
打つ手なんて殆ど無い

無闇に過負荷を使うと監視カメラとかに写って
能力が割れてしまう

鍵の存在をなかったことにする方法も使えない

はあ、誰から盗もつかない？

「そこでなにをやっている！」

鉄の扉をガチャガチャ弄っていると、

その物音を聞いたのか巡回中の警備員に見付かる

襲撃の速報を受けたのか銃で武装している

「『あ』『すみませーん！』『』」

頭を下げて謝罪する

「ここは立ち入り禁止だぞ！ 直ぐに立ち去れ！」

「『いやあ』 『あまりにも立派な研究所だったのでつい』」

二本の螺子が警備員のヘルメットを貫き、
眉間を貫いた

「『滅茶苦茶マイナスにしました』」

今回はできるだけ隠密に済ませたい

だから一切の猶予も与えず、叫び声も上げずに
警備員は倒れた

まあ、ただ意識を失っているだけだけど

意識を失っている警備員の懐を弄っていると、
やっとの思いで一枚のカードを見つけた

僕はそれをドアに付いているロック装置に入れる

「『ポチつとな』」

一度は言ってみたい言葉

すると、しばらくしてドアの鍵が外れる音がした

やっと研究所に進入できた…

この建物は意外にも小さい研究所で、

中には数十人しか入れなさそうだった

勤務時間が過ぎているのか、他の過負荷の襲撃を警戒したのか、研究員が見当たらない

そう、研究員は見当たらないんだけど

「誰だ！」

警備員はいーっぱい居るんだよね〜

「『あはは…』 『すみませんトイレ貸してください』」

「ふざけるな！」

廊下に居た全員の警備員が僕に銃口を向ける

自信のあつた嘘だったんだけどなあ

まあ、後ろに螺子が刺さってる警備員が倒れてるんだから説得力なんて殆ど無いんだけど

「『つわつと！』」

咄嗟に僕は物陰に身を隠した

その瞬間、銃弾の嵐が降りかかる

僕の隠れている銃弾が当たるたびに火花が散る

まるでアクション映画のシーンみたいだよ…

少し銃撃に間が出来た瞬間、僕は物陰から文字通り飛び出す

警備員に思いつきり飛び蹴りを喰らわせた

幾ら貧弱体質の僕でも顔面に思いつきり

蹴りを入れたため一人の警備員が豪快に地面に倒れこむ

「ぎゃああアアア!!」

その彼の後頭部に巨大な螺子を捻じ込むと、悲鳴を上げて気を失った

他の警備員にはこれが殺されたように見え、さらに激しくなる銃撃

急いで別の物陰に隠れた

これで一人

残りは後…二人だね

「『ん?』」

すると、足元になにか転がってきた

一見するとジュースの缶のような物体

でも、それは僕の足にコツンと当たると

煙を噴出し始めた

その動作に、僕は激しく舌打ちする

「『ふざけんなよお〜！』」

眩い光が炸裂する

それと同時に、形容できないほどの物音が超大音量で放たれる

「『うお〜…』」

それに僕は思わず目が回ってしまい、地面に倒れこむ

目を開けてもまったく見えず、なにも聞えなくなっている

そう、閃光手榴弾だよ

しかも学園都市製の思いつきりキツイやつ

海咲ちゃんがくれた学園都市の警務を任されている

武装部隊の装備品の中にそれが載っていたから分かったけど、まさかこれほどの威力だったなんて…

幸い触覚は消えていない

「『がアア〜！』」

でも、今回はそれが不運だった

その所為で殴られる痛みも感じてしまった

恐らくは投げた直後に突入してきた

警備員たちに殴られたんだと思う

はあ、最悪だ…

「貴様：二人の警備員も殺しやがって！」

警備員は僕を何度も殴る

他所から見れば高校生に暴行を加える職権乱用の警察官だね

徐々に視界と聴覚が戻ってくる

目の前にはヘルメットとゴーグル、防弾チョッキに

短機関銃を持った警備員が二人

…しょうがないなあ

「「なツ!?!」」

急にこの廊下の明かりが途絶えた

二人が声を揃えて驚愕する

「『これ以上殴られるのは僕も嫌なので』『この廊下を照らす電球の残りのエネルギーを』なかつたこと」「にしました』『」

これでもう真つ暗だ

「『こつちだつて能力とか使いたくないのに』

『序盤からポコポコにするとか止めて欲しいよ』」

他の二人同様、この警備員たちも頭部に螺子を突き刺す

オルフイクション

大嘘憑きによって意識を『なかつたこと』に

してるから無駄な殺傷はしなずに済むんだ

これって便利なんだけど、不憫でもあるんだよね

目的であつた正面の廊下を再び歩き出す

色々あつたけど、本来の目的に戻らないと

メインコンピューターに行つてこの

研究のデータを全て『なかつたこと』にすれば終わる

それか、この研究所自体を破壊すればいいんだけどね

「『げッ…！』」

しばらく廊下を歩くと、再びあの警備員たちが現れる

しかも、三人や四人じゃない

十人ぐらいは居てもおかしくはない

あんなに大勢なんて相手にしてられないよ…

とりあえず他のところへ逃げるべく、僕は来た道を振り返り、逃亡を図ろうとする

でも、その作戦は一瞬でぶち壊された

反対側にも正面とほぼ同じぐらいの数の警備員が行く手を阻んでいた

その光景に僕は笑わざるを得なかった

やっぱり理不尽だ…

ここは穩便に済ませたかったけど、もう強硬手段しかないね

こうして思考してる間にも、警備員たちはジリジリと間合いを詰めている

…無理だあ！

こんな大人数は無理だ！

諦めかけた時、僕の目に一つの物が飛び込んできた

それは、堅くて頑丈そうな扉

分厚さは軽く五センチは超えて居そうなくらい頑丈なその扉が、何故か開いていた

しかも、パスワードロック付きだから
出動した警備員でも開けられない

…ラッキー！

過負荷にも運は向いてくれるんだ！

咄嗟に僕はその部屋に飛び込み、ドアを堅く閉じた

閉じた途端、鍵の掛かる音がして僕は一安心する

幾ら警備員でもこんなに分厚い

ドアは壊せない…よね？

実際のところ学園都市の技術がどれほどのものか
まだ分からないから自信が無い

超特大威力の爆弾を持ってこられても不思議じゃない

「結局はまだ安心できないって訳よ」

背後から声が聞える

後ろを振り向くと、そこには一人の人物が立っていた

外国人なのか、金髪に碧眼というイギリス人っぽい
見た目の所為で日本語で喋ってきた事実には僕は少し驚いた

つと、そんなことを考えるんじゃない

「『うわあ』『実際に金髪とかって居るんだね』『いやまさかそんなRPGのキャラクターみたいな見た目の子が実際に居るとは全然思わなかったよ』『でも』『落ち込まないでも良いよ?』『それも君の個性なんだから!』」

「くツ…! 結局は地味に傷付くことを言ってるじゃない!」

「『別に傷付くことは無いぜ?』『だってそれは君の立派な個性なんだから』『無理せず自分らしさを誇りに思おう!』『君は君のままが良いんだから!』」

「良い台詞みたいなこと言ってるけど結局はこつちが余計に傷付く台詞ってわけよ!」

素直に僕は自分の気持ちを言うと、その女の子は怒りながら言い返してきた

感想を述べただけなのになんで怒られるんだろう?

「『それより君だれ?』」

「自分を殺そうとした相手も覚えてないわけ? 結局はただの馬鹿って訳じゃない…!」

僕を殺そうとした…

多すぎて分からないなあ

…あ

僕はポン、と手を叩いた

この子、あの四人組の一人だ

確か僕に爆弾とか投げつけてきて他の三人と比べてあまり目立たなかった可哀想な人だと記憶してる

「『ああ、あの連中の一人か』 『ってことは…』」

「麦野たちも此処に来てるわよ」

あの四人組がまた…最悪だ

しかもその麦野さんに僕はかなり恨まれているからね
今頃僕を殺そうとこっちに向かっているはずだ

「『はあ』 『一度倒した敵と再会とか』 『そういう展開は週間少年ジャンプの中だけにしたいよ』」

「安心して。結局は此処に居るのは
球磨川と私だけなんだから」

つまりねえ

「球磨川、結局アンタはここで終わりってわけよ…！」
手榴弾を取り出しながらそう言った

彼女が言うには、他の三人は樂觀するだけで
実際には来ず、この金髪さんだけしか相手しないらしい

「この研究所に警備の依頼をされて、
到着してしばらくすると僕が侵入してきた

つまり、恨みを晴らすのに絶好のチャンスらしい

麦野さんが居ない分マシかな？

あのレーザーみたいなので殺されるよりはご免だからね

でも、この人は僕が殺せる気で居るし、
しかもやる気満々だし

流石に僕もここまで言められちゃ、少し
イライラするかなあ、なんて

「『僕がここで終わる？』 『あはは』 『面白いことを言っね』

『僕らマイナスはとっくに終わってるんだよ』

二十一話 『僕たちはとっくに終わってる』 (後書き)

アイテムの再登場

理由に関しては、次話で

ちなみにフレンドの口調は超適当です、すみません

二十二話 『それでは皆さん唱和ください!』 (前書き)

現時点では『僕は悪くない』に次ぎ一番書きたかった回です

出来の良さと悪さを問わず、かなりやりたかった展開です

『二十二話』それでは皆さん、唱和ください！』

「『ワオ！』」

迫り来る爆撃を避けながら感心した声を上げる

野球のボールのように手榴弾が何個も投げられてきて
手前や直ぐ真横で爆発していたりする

それを必死に全力疾走で避けてる

爆弾を何個も投げつけられるのは中々できる体験じゃないよ

まあ、そんな体験なんてしたくないけど

「どうしたの球磨川？ 結局はこんなに弱かったってわけ？」

直撃すれば腕が一本ぐらいは持っていかれそうな

までの威力の爆弾をずっと避け続ける僕のものにもなってくれよ…

「『油断大敵って言葉知ってるかい？』」

丁度手榴弾が切れた頃に螺子を投げつける

一直線にそれは彼女の頭を貫こうと
放たれるが、何もない空間を通り過ぎる

「『ぐツ!?!』」

目の前まで迫って来ていた彼女は
一直線に腹へ食い込んだ

数メートル飛ばされると、地面に引き摺られながら倒れる

「『肉弾戦は苦手なんだけどね…』」

汚れた服を払いながらそう呟く

実際に僕って体力とかはあまり無いから
肉弾戦はまったく向いていない

運動神経だって最低レベルだし

それに比べてあっちは学園都市の暗部組織

人は両手じゃ納まらないくらい殺してる

そんな実戦経験豊富な人たちになんか敵うはずがない

普通に戦えばそうなってしまう

「なツ!?!」

でも生憎と僕は普通に戦うつもりなんてまったく無い

彼女が優勢で戦うつもりなら、僕は
劣勢で戦ってあげるよ

部屋の反対側まで逃げていた僕は、一瞬にして彼女の真正面に立っていた

あの距離からはどれだけ早くても一瞬で近付くのは無理

でも、過負荷にそんな常識なんて通用しないさ

「くッ…！」

辛うじて突き刺そうとした螺子を避けていた

だが急に動いた所為か、バランスを崩し倒れこんでしまう

「『あは！』『驚いた？』『いやあ今まで試したことないから分からなかったんだけど』『まさか本当に出来るとはね』」

「なんなのよ！ 結局アンタの能力は何なの！？」

納得できないようで怒りながら僕から距離を取る

はあ、この前説明したはずなのになあ…

「『僕の能力は現実すべてを虚構なかったことにすることだ』『つまりさっき僕は一歩も動いていない』」

『君との間にある距離を「なかったこと」にした』」

距離がなかったことにされるなら、僕は必然的に彼女の直ぐ真正面に来ることになる

でも、これはかなり扱いが難しいんだ

勢い余って攻撃が逸れてしまえば大きな隙は出来てしまうし、なにより肉弾戦の苦手な僕には自分から相手に近付くのは出来るだけ避けたい

「なんて出鱈目な能力なのよ…」

「『それこそが過^{マイナス}負荷さ』」

常識に囚われているようじゃ過負荷を相手にすることなんて出来ないぜ？

「ッ！？ 次から次へと何よ!？」

一難去つてまた一難

今度はこの部屋を明るく照らしていた電球が一つ残らず消えた

窓も無いこの部屋は明かりの源を失い、漆黒の闇に包まれる

僕も彼女も、周りが一切見えない状況になった

「『この部屋の電球のエネルギーもついでに』なかったこと』」にしました』」

「結局それじゃあアンタも見えないって訳よ！ それなら
広範囲に攻撃できる私の方が有利！」

なにかを取り出す音が聞える

爆弾か手榴弾を取り出したんだろう

彼女は何故こうも爆発物に頼るんだろう？

おそらく彼女はレベルの高く戦闘能力のある
超能力者だ、そんな彼女は超能力を一度も使っていない

使っているのは爆弾や手榴弾といった武器だけ

今時珍しい”自分の力で戦いたい”人かな？

爆弾を着火させようとしているのか
一本のマッチが炎を灯している

「『甘えよ』」

だが、その炎は一瞬で途絶えてしまった

「そ、そんな！？ 何でマッチが…」

「『炎は辺りに酸素が無いと直ぐに途絶えてしまう』』なら消す
のは簡単さ』」

『そのマッチの周りの酸素だけを「なかったこと」にすれば済む話
だしね』」

珍しく僕は頭を使った

でも後味悪いなあ…

やっぱり慣れないことはするものじゃないね

「そんな…マッチは使えない…手榴弾も全部使い切ったし…」

” 摘み ” 状態だね

武器を失った彼女は反撃の手段なんて無い

それに対して僕は螺子がある

武器の有無の差はかなり大きい

「『あれ?』」

すると、突然この部屋が再び明るくなった

僕が電球を消す前と同じぐらいまで

明るくなっている

電球のエネルギーは僕が消したはずだ

電気は点くはずが無い

となると…

「『麦野さんが何かしたみたいだね』」

おそらくこの部屋のシステムをハッキングして強引に緊急用の電気を作動させたんだろう

レベル5はその能力の強さ以前に、知能の高さも特徴的だ
演算が高いとはつまりそれだけ高いつて意味

序列が高いほど演算能力が高くなって行って、第一位の一方通行の知能はスーパーコンピューター並みだと聞いている

それほどの演算力があれば、この部屋をハッキングするなんて容易に出来るはずだ

「『ぐフツ!?!?』」

しばらくそう思考していると、突然顔を殴られる

突然の攻撃に思わず地面に倒れこんでしまう

「結局アンタは馬鹿以上に間抜けて訳よ。爆弾が無くなったからって戦えなくなったわけじゃないしね!」

さらにその上に彼女が座り、何度も殴ってくる

パンチの連打を顔面に喰らい続け、
口から血が大量に流れている

鼻の骨も折れたのか血が流れ出ている

「元々素手でもそれなりに戦えたしね！」

それでもなお収まらないパンチの連打

段々と気が遠くなってくる

「甘えよ」？ それはこっちの、台詞よ！」

重い一撃を最後に、僕の意識は完全に途絶えた

~~~~~

「へえ、フレンダも結構やるじゃない」

球磨川とフレンダの戦闘を監視カメラから

眺めていた麦野は感心したように呟く

裏での研究に加担していたこの研究所を護るため、彼女等

”アイテム”は派遣されたのだが、それが彼女にとって吉と出た

自分が堪らなく恨んでいる球磨川がこの施設に侵入してきたのだ

球磨川を見つけたことにより復讐の意思が再び燃え上がり始めた

直ぐに絹旗とフレンドをそれぞれ研究所の  
一室で待機させた

麦野も一応は部屋で待ち伏せしていたが運悪く  
球磨川はフレンドの部屋へと入っていく

落胆こそしたものの、フレンドが負けるはずが無いと思った  
麦野はそのまま交戦を許可した

結果は予想外のもの

フレンドは球磨川に対し圧勝を納めていた

まるで相手にならなかつた球磨川に、麦野は少し落胆する

溜め息を吐きながら、連絡を入れる

「フレンド、お疲れ様」

《あ、麦野。そんなに疲れてないわよ。結構弱かつたし》

「こつちも見てた、かなりガツカリだったけど、  
まあとりあえずはオツケーよ。直ぐに戻って」

《了解、と》

電話を切るフレンド

監視カメラにもう一度麦野は目をやると、そこには  
部屋を出て行こうとするフレンドの姿があった

ドアの前まで行くと、フレンドは不自然な表情をする

まるで、なにかに困惑しているような表情

だが、次の瞬間、思いもしなかった光景が麦野の目に飛び込んできた

「なッ!？」

スクリーン越しで麦野は驚愕の声を上げる

だがその瞬間、監視カメラの映像も途絶えた

時は少し戻り…

「ふう、結局は手間の掛かる奴だったって訳よ」

気を失った球磨川を見詰めながらフレンドはそんな声を漏らす

未だに球磨川は生きていた

だが、ターゲットの生還を暗部の人間が許すはずも無く、  
着々とフレンドはある物の準備を進めていた

「本当はこれは使いたくなかったんだけど…こいつ相手にはこれが

「一番よね？」

組み立てたのは一つのブレスレット

だが、着飾りのためにつけるものではなく、

そのブレスレットはとても太く四角い物体が装着されてある

そのブレスレットを球磨川に嵌めると、外れないように装着させ、開けるための鍵をきつちりと閉める

そう、その装置は爆弾だった

学園都市製のその爆弾は、その小さな外見からは考えられないほどの威力を誇っていた

少なくとも、この研究所を吹き飛ばすまでのレベル

元々アイテムはこの研究所を護る気などまったくなかった

ただ依頼されたから引き受けただけであって、  
実際は近日に襲撃し壊滅させるはずだった

それに都合よく球磨川が襲撃し、壊滅させるついでに  
球磨川も殺そうとしている

その目的を終え、研究所諸共球磨川を爆破させようとしている

「さて、帰ろっつと」

装置を発動させ、直ちに逃げるため急いで部屋から出ようとする

麦野たちには作戦前に既に連絡が行っており、  
今頃逃げているはずだろう

そう考えると、ドアを開けようとドアノブに手を掛ける

「あれ？」

だが、そこで違和感を感じた

まるで、そこにあるべき物が無いような

「ど、ドアノブが無い!？」

部屋の分厚い扉を開けるはずのドアノブが、  
その部分だけ綺麗に消えていた

切除された後などまったく無く、まるで  
予めそこに『なかった』かのようだ

「え？」

そして、そんなフレنداに覆いかぶさるように  
真後ろに影が現れた

なんの前触れも無く現れたその影に、恐る恐る後ろを振り向くフレ  
ンダ

その刹那

「がアツ!？」

巨大な螺子が突き刺さる

「『ハロー!』 『僕を倒したつもりかい?』」

フレンド諸共自分の腹を螺子で貫き、抜けないように壁へ固定しているのは、先ほど倒れていたはずの球磨川雪

「な…なんでアンタが…」

「『僕が気を失ったかと思ったかい?』 『何度も言うけど甘いねえ』」

『あの程度じゃ眠気も払えないさ』 『まあそれは冗談だけど』」

気軽に話す球磨川だが、フレンドと同じく自身の腹部には巨大な螺子が刺さっていて内臓も幾つか貫いているはずだった

血反吐も口から大量に吐いているが、それを痛む様子もなかった

「なにを…するつもりよ？」

「『君分らないのか?』 『なら見せてあげるよ』」

球磨川は自身の左腕を掲げた

そこに記されているのは、”残り10秒と表示された球磨川に装着されている爆弾

「ッ…!」





巨大な爆発が、辺りを包み込んだ

二十三話 『初めてだよ』

「嘘…だろ…？」

レベル5第四位、原子崩しこと麦野沈利は啞然としていた

目の前には変わり果てた研究所の残骸

いや、もはや研究所と判別できるかすら怪しかった

建物など爆弾によって跡形も無く消し飛んでおり

最早瓦礫の山と化しているそれには、所々警備員の死体が倒れている

418

おそらく爆発に巻き込まれたのだろう

そんな悲惨な光景に、麦野はただただ呆然とするだけだった

「大丈夫ですか、麦野？」

目の前で背を向け立ち塞がるように立っているのは同じ”アイテム”の絹旗最愛

自身の能力、窒素装甲により爆発から護っていた

そんな絹旗の問い掛けに、麦野は答えない

「『うひゃあ…!』あの外人さんも派手なことやるね」

この場に似合わないような朗らかな声が響く

まるで子供のように、悪意すら感じさせないような

その声質と共に瓦礫の下から這い出てきたのは、球磨川雪

埋もれていた所為か埃だらけになっている制服を

パンパンと払うと、笑顔で二人を迎えた

「『幾ら僕が相手でもこんなにやるかよ?』」

乾いた笑い声を発する球磨川

「てめえ…!」

それを見て、怒りを露にしながら演算を開始する麦野

「『おいおい何をそんなに怒っているんだい?』『僕は

ただ彼女が襲ってきたから戦った訳で』『完全なる正当防衛なんだ』

『それに爆弾なんていう無差別な武器を使ったのはあの外人さんだ』  
し  
『』

『僕は悪くない』

「ク、クソがアアア!!!」

利かないとは分かっている、原子崩しを  
球磨川に放つ麦野

自分の同僚であるフレンドが殺された

こんな男により、殺されていた

彼は罪悪感も、責任感も、かと言って  
悪意も感じていない

つまり、球磨川にとってフレンドはど……でもいい存在だった

そんなことを麦野は許せなかった

「『うわぁ殺気とかマジカンベンしてよね』『僕って弱虫だから  
そういうの向けられると凄く怖がっちゃうんだよ』」

やはり、それは球磨川に届く前に消されてしまう

演算を『なかったこと』にされる限り、  
この男に超能力はまったく利かなかった

それに加え、笑みを浮かべながらそう告げる球磨川に  
説得力など皆無であり、麦野の怒りを増幅させるのを助長していた

「ぶざけやがって！ ぶつ殺す！」

「『これは一応先輩からの助言だけど』 『女の子がそんな乱暴な言葉使いをしちゃいけないぜ?』」

超能力での戦闘を捨て、真っ直ぐと球磨川に走る麦野

元々フレンドでも倒せたほど球磨川は身体能力が低い

それに加え、戦闘のセンスも接近戦では  
まったくと言っていいほど無い

その点を考慮し、麦野はあえて肉弾戦に持ち込もうとしていた

「ぐ…!! あアアア!!!」

だが、球磨川に近づく前に麦野の足には  
螺子が突き刺さっている

それにより、地面に倒れてしまう

あと数十センチという距離まで近付いたにも  
関わらず、その場を動けない

「『レベル5と言っても無様なものだね』 『能力が  
使えなかったらこんなにも相手にならないなん』」

途端、球磨川の体が吹き飛んだ

隙を伺っていた絹旗が飛び上がり、球磨川の  
後頭部に蹴りを放っていた

空素装甲によつて空素で攻撃したため、威力は格段に上がっている  
攻撃の手を休めず絹旗は転がっている球磨川に追い討ちをかける  
腹部にも蹴りを放ち、瓦礫の山に衝突した球磨川

なんとか立ち上がり螺子を振り回したが、それは宙を空振り  
するだけであつて、戦闘慣れしている絹旗には当たっていない

「いい加減に死んでください！」

真つ直ぐ顔面を捉えたその拳は、吸い込まれるように頬へ食い込む

「『痛い…』」

今日何度吹き飛ばされたかは本人も分かっていないが、  
それでも笑顔を崩さず立ち上がる

血を流し、目も片方は最早半開きになっているのにも関わらず、  
笑顔を保っている球磨川を絹旗は気持ち悪く思っていた

たった一言そう告げると、口を閉じた

「『痛いなあ…』」 『本当に痛いよ』 『こんな痛みを感じて意識を  
保っていられる人間なんて』 『そうは居ないと思うんだ』 『そう思  
わないかい？』」

賛同を求める球磨川を悉く無視する

今は目の前の彼を倒すことだけを考え、

麦野の回復までなんとか粘らせたかった

「『実は僕』 『君たちの中に過負荷ほくたちと同類おなじの子が居ないかなあ』  
『って期待していたんだけど』 『期待はずれだったよ』」

そんなことを告げる球磨川に、絹旗は首を傾げた

自分たちの中に過負荷が居なかった事実になんか喜びを  
抱いた絹旗だが、それでもその発言の意味を理解できない

「どういう意味ですか？」

「『はあ…』 『分かっていないなあ』 『君たちは  
それが格好良いとか思ってるかもしれないけど』」

『君たち全員全然笑わないんだよ！』 『まるで人形みたいだ！』

あっけらかんにそう告げる球磨川

”笑わない”

それがどう過負荷と関係があるのか、まったく  
想像もしていなかった

”笑いな” という幸せを感じさせる言葉など、  
不幸マイナスとはまさに正反対、縁遠い言葉だと思っていた

「笑う、ですか。それこそ貴方たちに超似合わないでしょう？」



「『分かっていないなあ』『笑顔こそ過負荷の象徴だぜ？』  
『例えどんな時でも醜く笑う』『それが過負荷マイナスさ』」

徐々に球磨川の傷口が塞がっていく

破れて血まみれになっていた服も段々と綺麗になっていく

「『そんなことも分からないんじゃない』『君たちは過負荷なんかじゃない』」

無傷の状態に戻る球磨川

今までの絹旗の努力を、攻撃を、労力を

その全てを否定し、台無しにするかのような無能力

「『僕の大嘘オールフィクション憑きの前じゃ』『努力なんていうプラスなんか  
なんの輝きにも光にもならないんだよ』」

最早絹旗の表情に勝利を狙う目はなかった

勝機を捨て、投げ出している

「『とりあえず君は置いて』」

そんな絹旗に情けをかけるかの如く、球磨川は  
素通りすると、倒れている麦野の正面に立つ

「『僕の目標は一応レベル5の連中を殺すことだから』」

『君は流石に放っておけないね』」

懐から螺子を取り出しながら、そう言う

その螺子は今まで球磨川が使っていたプラス螺子とは打って変わって、マイナス螺子だった

その螺子は取り出すと徐々に長さが伸びていき、やがて等身大になる

「『レベル5にはこれを使って殺すことを決めてるんだよ』

『無能力者の気持ちを味わせるためにね』」

「無能力者の気持ちを…だと…?」

そう訊き返す麦野

「『君たち超能力者はいつもレベル0を差別してきた』

『僕はそんな人たちのずっとやりたかったことを自らが

やってあげているんじゃないか』『無能力者の気持ちを感じる…!』

」

その螺子を振り上げる球磨川

しかし

「やめる!」

「『ガフツ!?!』」

それは一つの拳によって遮られた

突然現れたその拳は真つ直ぐ球磨川の頬を捉え、  
全力で打ち抜いた

突然の攻撃に少し驚愕しながらも、球磨川は体制を立て直した

「『次から次へとなんだよ…？』 『なんで僕だけこんな目に…』」

「えらく大層なこと言ってるじゃないか…！ いったいなにをやってるんだよ、球磨川先輩！」

彼の目の前に立ち塞がっているのは、  
ツンツン頭の高校生

敵意を込めた瞳に、球磨川は少なからず落ち込む

「『…久しぶりだね』 『上条ちゃん』」

イマジンブレイカー  
幻想殺し、上条当麻

レベル0でありながら、あの球磨川を  
人助けするのに説得した人物

「近くで大きな音がしたと思ったら…何やってんだよ！  
球磨川先輩、これはアンタがやったのか？」

「『やったのつて』 『何を？』」

「この研究所を滅茶苦茶にしたのか訊いてるんだよ！」

再び上条の拳は球磨川を捉え、それにより  
よろめいてしまう

「『違つよ上条ちゃん』この研究所を爆破したのはあそこで倒  
れてる

彼女の仲間です』その所為で警備員が死んだんだ』僕にも襲い掛  
かって

きたから正当防衛で反撃した』つまり僕は悪くない』」

「ふざけるんじゃない！」

右腕を振り上げると、何度も球磨川を殴る

打つては胸ぐらを掴み、引き戻せば打つ

その繰り返しだった

「お前は一体…何人殺したと…思ってるんだよ！」

「『数なんか…』『数えちゃいないさ…』」

やっつて手を離す上条

打撲を何度も受け、球磨川は軽い脳震盪を起こしていた

「『無駄だよ上条ちゃん』僕の大嘘憑オールフイクションきじゃそんなことをしても  
無駄だつて…』」

再び傷を『なかったこと』にしようとするが、  
球磨川は異様な違和感を感じた

「『…傷を「なかったこと」に出来ない!?!?』」

初めて驚愕の表情を浮かべる球磨川

「どうだ、痛みを消せねえ気分は？ 痛いだろ？ それが…」

啞然とする球磨川に上条は真っ直ぐ走っていく

「お前の傷つけた人の痛みだ！」

「『グフツ!?!?』」

顎を突き上げるように殴られた球磨川の身体は、  
宙へと舞う

そして、ドサッと地面に倒れた

「はあ…はあ…」

凄まじいテンポで攻撃を繰り返した上条は、  
疲労によりそのまま地面に座り込んだ

「『…凄いな上条ちゃん』『うん』『君の  
攻撃は確かに僕に届いたぜ』」

起き上がる球磨川

「ッ…!」

彼は、涙を流していた

高校三年生には似合わないほど、涙を流す球磨川

そんな奇妙な光景に、上条は  
言葉を詰まらせた

「『僕をここまで真面目に叱ってくれたのは君が始めてだった』  
『いつも僕を恐れて逃げるばかりだったのに』『君だけは違った』  
『うん』『思い知らされたよ!』『やっぱり悪さはいけないね!』

『だから君を巻き込まないように』『僕は自分のイライラを  
何の関係も無い通行人Aに全部ぶつけようと思います』

429

「なッ!？」

予想外の返事に驚愕する上条

「『なに驚いているんだい?』『ま』『僕も傷を』なかつたこと  
に

出来ないから結構驚いちゃったけど』『やっぱり君にもなにか不思議な

力があつたんだね』『だからもう君とは戦わない』

「ふざけるな！ 逃げるのかよ！」

「『だから僕は君と戦いたくないんだよ』『君が言ってくれたじゃないか』」

『その痛みこそが他人の感じた痛みだ』って』『ならそれを教訓に』『今度は

痛みも感じさせないぐらい一瞬で片付けようと思います』」

マイナス螺子を仕舞い、再びプラス螺子を両手で取り出す球磨川

その顔からは涙は消え、貼り付けたような笑顔が支配している

この場を去るように球磨川は歩き出した

「『それじゃあ上条ちゃん』『またね』『レベル5の御坂さんにもよろしく言っといてよ』『』』」いつか過負荷が来るぞー』って』『」

背を向けながら手を振る球磨川

それをただ上条は啞然と見詰めているだけだった

「『んじゃ』『また明日とか！』『』」

そう言い残すと、球磨川の姿は見えなくなった

あとに残された上条

「ッ！ そういえばアイツ等は！」

倒れていた女たちを思い出し、

上条は慌てて辺りを見回した

だが、そこには誰の姿もなかった

おそらく球磨川とのやり取りの最中に逃げたのだろう

一人取り残された上条は、しばらく思考する

「マイナス過負荷：か」

活動がより活発になり始めた過負荷勢力

上条はそれを危険視し始めた

このままじゃ学園都市は滅茶苦茶にされる、と悟る

拳を握り締め、決意を固めたかのように表情を強める

「エリートを殺す…ならその幻想をぶっ殺してやるよ！」

この日、上条当麻は過負荷との全面对決を決意した



二十三話 『初めてだよ』（後書き）

妹達に加えさらに過負荷の事件への介入を決意してしまった上条さん

忙しい人ですね（苦笑）

ちなみにアイテムのご一行は本文で書いたように主人公とのやり取りの最中撤退しました

裏設定ではこの騒ぎでまだ登場していない  
滝壺が二人を連れて行ったってことにしています

絹旗はまだ動けるので、二人係で麦野を運んだということにしています

今話から原作への介入が増えると思います

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1468y/>

---

とある転生者の過負荷（マイナス）

2011年12月11日18時46分発行